

瀬 高 地 区 遺 跡

(権現塚南・大江南遺跡)

上長延 1 ～ 3 号墳

圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 2

福岡県文化財調査報告書

第 74 集

1986

福岡県教育委員会

瀬 高 地 区 遺 跡

(権現塚南・大江南遺跡)

上長延 1 ～ 3 号墳

福岡県文化財調査報告書

第 74 集

福岡県教育委員会

序

県内の圃場整備事業は、年々増加の一途をたどり、事前の発掘調査も増大しているところであります。

文化財の保護と圃場整備事業の円滑な推進を図るためには、文化財の実態を正確に把握することが重要であります。

このことから、あらかじめ圃場整備事業地区の遺跡詳細分布調査を実施し、その実態を明らかにして双方の調整を行っているところであります。

この報告書は、昭和57・58・59年度に実施した発掘調査のうち、重要と思われるものに関するものであります。わが国古代文化研究の一資料として活用いただければ幸甚であります。

なお、現地調査にあたり、終始尽力をいただいた地元の方々及び県市町村の関係各位に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和61年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、圃場整備事業に伴う試掘調査のため、福岡教育委員会が国庫補助を受けて実施したものの調査報告書である。
2. 調査を実施したもののうち、昭和57年度では瀬高町所在の権現塚南遺跡、58年度では広川町所在の上長延1～3号墳、59年度では瀬高町所在の大江南遺跡を掲載した。
3. 遺物の整理は、福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導により九州歴史資料館で行った。写真撮影は、遺構を川述昭人、遺物は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導のもと藤美代子氏が撮った。遺物の実測は原富子、宮園生子氏にお願いし、若干を川述が実施した。製図は、豊福弥生氏にお願いした。
4. 本書の執筆と編集は川述昭人が行った。

本文目次

I	調査の経過	1
II	瀬高地区遺跡の調査	2
	1 はじめに	2
	2 位置と環境	2
	3 権現塚南遺跡の調査	4
	4 大江南遺跡の調査	23
	5 おわりに	44
III	上長延1～3号墳の調査	47
	1 はじめに	47
	2 位置と環境	47
	3 古墳群の調査	49
	4 おわりに	57

I 調査の経過

我が県では、昭和45年に県営圃場整備事業が開始されたが、以来、事業量の増加が著しく、これに伴う埋蔵文化財の調査件数も増大の一途をたどっている。このため、昭和50年度より、県教育委員会と県農政部との間で文化財の保護と圃場整備事業の実施に関する事前協議が定形化された。事業の実施にあたっては、まず、分布、試掘調査を行って、文化財の有無、遺構面までの深さ等の測定をし、その結果をふまえて、工事計画を検討していくという方法である。

昭和57年度に調査を実施した瀬高町所在の権現塚南遺跡は、瀬高北部地区県営圃場整備事業の幹線水路の掘削工事箇所に対応し、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が検出された。昭和58年度の広川町所在上長延1～3号墳は、引井谷地区集団農区総合整備事業に伴って丘陵裾部が掘削されるため試掘調査を実施して古墳3基が確認された。59年度に調査を行った瀬高町所在の大江南遺跡は瀬高東部地区圃場整備事業に先立って試掘調査をし、遺構面までカットが及ぶため調査を行い、古墳時代の住居跡が10軒検出された。

調査関係者は下記のとおりである。

福岡県教育委員会（昭和57～60年）

総 括

教 育 長	友野 隆
教育次長	森 英俊（前任）
教育次長	安倍 徹
文化課長	藤井 功（前任）
文化課長	前田栄一

庶 務

庶務係長	松尾 満（前任）
課長補佐	平 聖峰（係長兼務）
主任主事	古賀秀幸（前任）
主任主事	川村喜一郎

調査担当

文化課	調査第一係長	宮小路賀宏（現課長技術補佐）
南筑後教育事務所	技術主査	川述昭人
文化課	技師	伊崎俊秋

Ⅱ 瀬高地区遺跡の調査

1. は じ め に

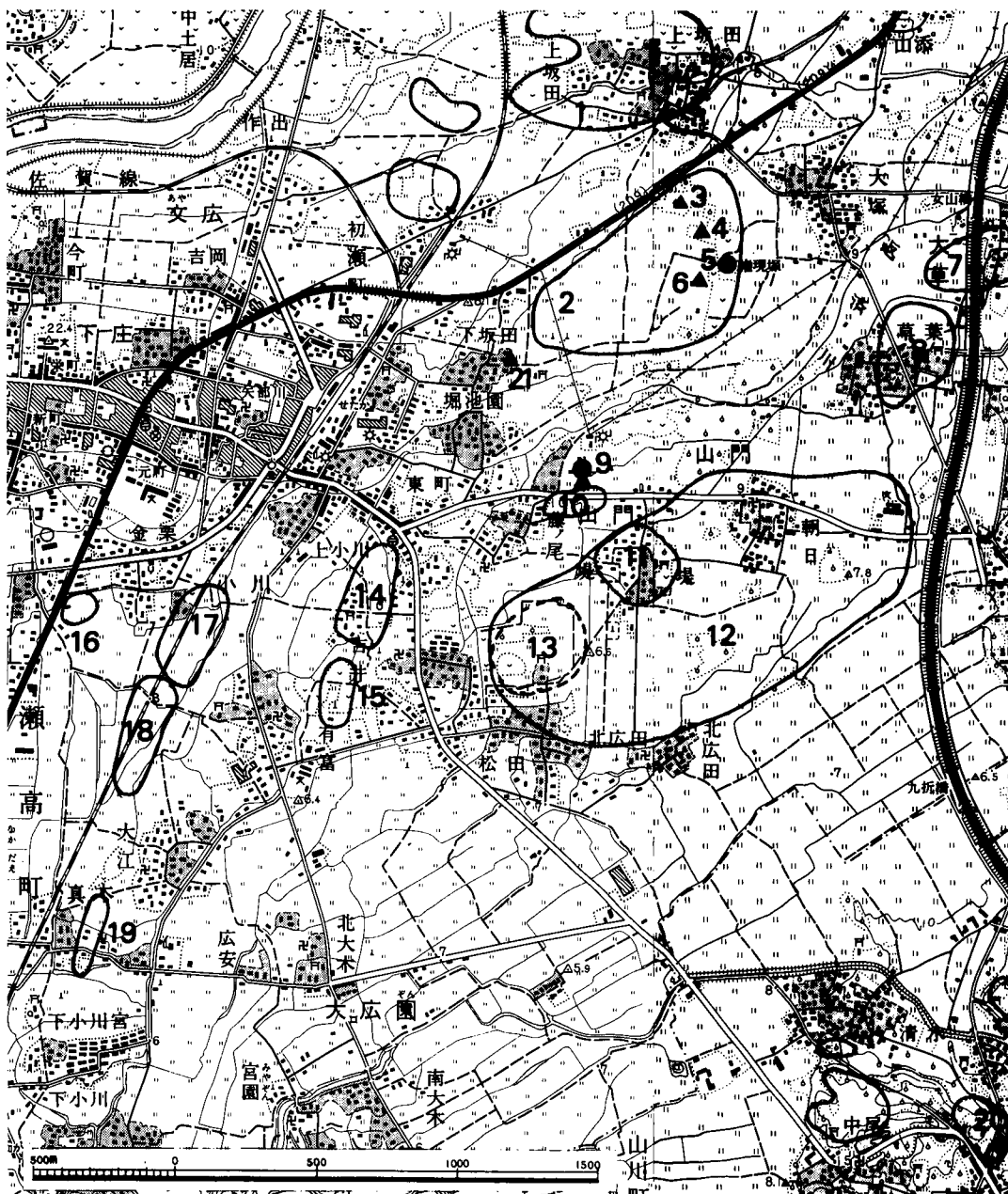
昭和57年6月の麦取り入れ後、県営圃場整備事業瀬高北部地区のうち権現塚古墳周辺の試掘調査を実施した。この結果、権現塚古墳周辺の微高地には広範囲にわたって縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が存在する事が明らかとなった。文化財の保護について、県・町の関係者、地権者による協議により遺跡は現況が畑地である関係もあって、一部はカットされるものの、その大半は畑地として残り、文化財は保存される事となった。ここにあらためて遺跡保存のために御尽力された関係者各位に対して感謝の意を表します。このうち、幹線水路に相当する箇所については掘削も止むを得ないため、昭和57年9月3日～9月12日の間発掘調査を実施した。この水路敷の遺跡を権現塚南遺跡として報告する。

昭和59年6月には、瀬高東部地区の県営圃場整備事業に先立って試掘調査を実施した。試掘調査は、水路に相当する箇所を広範囲に行い、かなりの箇所で見積の所在が確認された。今回報告の大江南遺跡は、瀬高東部地区大江遺跡の南端に位置し、工事により削平されるため事前に発掘調査を実施したものである。試掘及び発掘調査は昭和59年8月29日～9月8日の間で実施した。前記二遺跡の調査には県文化財保護指導委員の久賀愛策氏の御指導、御援助を頂いた。また、瀬高町委員会の猿渡一範氏をはじめ町関係各位、郷土史会の方々の御協力を頂いた。調査は県教育庁南筑後教育事務所技術主査川述昭人が担当し、遺構実測に際しては、県文化課技師伊崎俊秋氏の協力を頂いた。また、調査補助員として田中康信氏、作業員として北高柳、南高柳在住の方々の御協力を得た。

2. 位 置 と 環 境

権現塚南遺跡は福岡県山門郡瀬高町坂田字権現に所在し、国道209号線沿いの東側微高地に位置する。大江南遺跡は瀬高町大字大江に所在し、鹿児島本線沿の東側微高地に占地する。

瀬高町は久留米市の南方20km、大牟田市の北方16kmに位置し、町の中央部には南北方向に国道209号線、鹿児島本線が縦走し、東方の山裾には九州縦貫自動車道が通っている。同町の北方には矢部川が西流して有明海へと注いでいる。この矢部川中流域の沖積平野部に同町は位置し、大半部分は標高5m～10mの低平地である。東方には標高200～400mの筑肥山地がせまり、女山神籠石をはじめ、多数の古墳群はこの山麓の西側斜面に集中している。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 坂田遺跡 (弥生～古墳) 2. 権現塚遺跡 (縄文～平安) 3. 中園遺跡 (注口土器出土)
4. 権現塚北遺跡 (58年調査) 5. 権現塚古墳 6. 権現塚南遺跡 (調査地点) 7. 大道端遺跡
8. 草場遺跡 9. 車塚古墳 10. 杉の本遺跡 (弥生) 11. 堤古墳群 12. 山門遺跡
13. 松延遺跡 14. 東町遺跡 (弥生～古墳) 15. 上枇杷遺跡 (弥生～鎌倉) 16. 金栗遺跡
17. 鉢田遺跡 18. 大江遺跡 19. 真木遺跡 20. 赤坂1号墳 21. 石棺出土地点

権現塚南遺跡は、標高9m程の微高地上に営まれており、周囲の田面との比高は70～80cm程である。この低台地には権現塚古墳^{註1}（直径45m、高さ5.7mの2段築成の円墳・内部主体不明）があり、この古墳を基準にして北、南遺跡と仮称している。権現塚北遺跡^{註2}からは縄文時代後期～晩期にかけての住居跡や埋め甕、炉跡、ピット群などの遺構が検出され、多数点にのぼる土器や石器類が出土した。また、弥生時代の中期～後期にかけての甕棺墓48基、箱式石棺墓2基などが発見されており、周辺一帯は広範囲に縄文～歴史時代まで生活の足跡が残っている。東方の山裾近くには、弥生時代後期、古墳時代後期から奈良時代前期にかけての堅穴式住居跡149軒を検出した大道端遺跡^{註3}が所在する。

大江南遺跡は鹿児島本線の東方に隣接しており、古墳～鎌倉時代の遺構を多数検出した金栗遺跡の南東500mの所に位置する。この地点は標高5m程であるが、以前に土取りのためかなり地下げして旧状を呈していないが、いずれにしても6m足らずの高さに遺跡は位置している。この遺跡の東方は砂利層であり、旧河川敷の跡と判断され、遺跡は自然堤防上に立地していることがわかる。

同町は町の3カ所で県営圃場整備事業が実施されており、各所で、縄文～戦国時代にかけての遺構、遺物の発見が相次いでいる。

註1 瀬高町教育委員会「権現塚古墳」『女山・山内古墳群』瀬高町文化調査報告書 第2集 1982

2 瀬高町教育委員会「権現塚北遺跡」瀬高町文化財調査報告書 第3集 1985

3 福岡県教育委員会「大道端遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』XIV 1977

3. 権現塚南遺跡の調査

遺 構

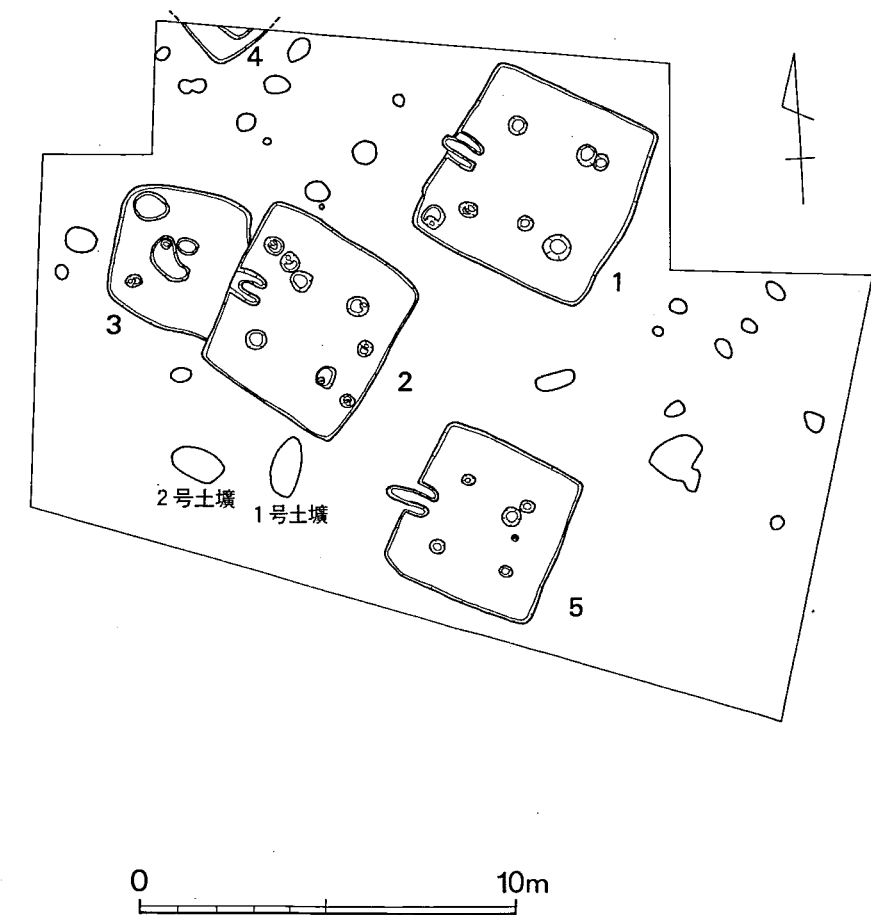
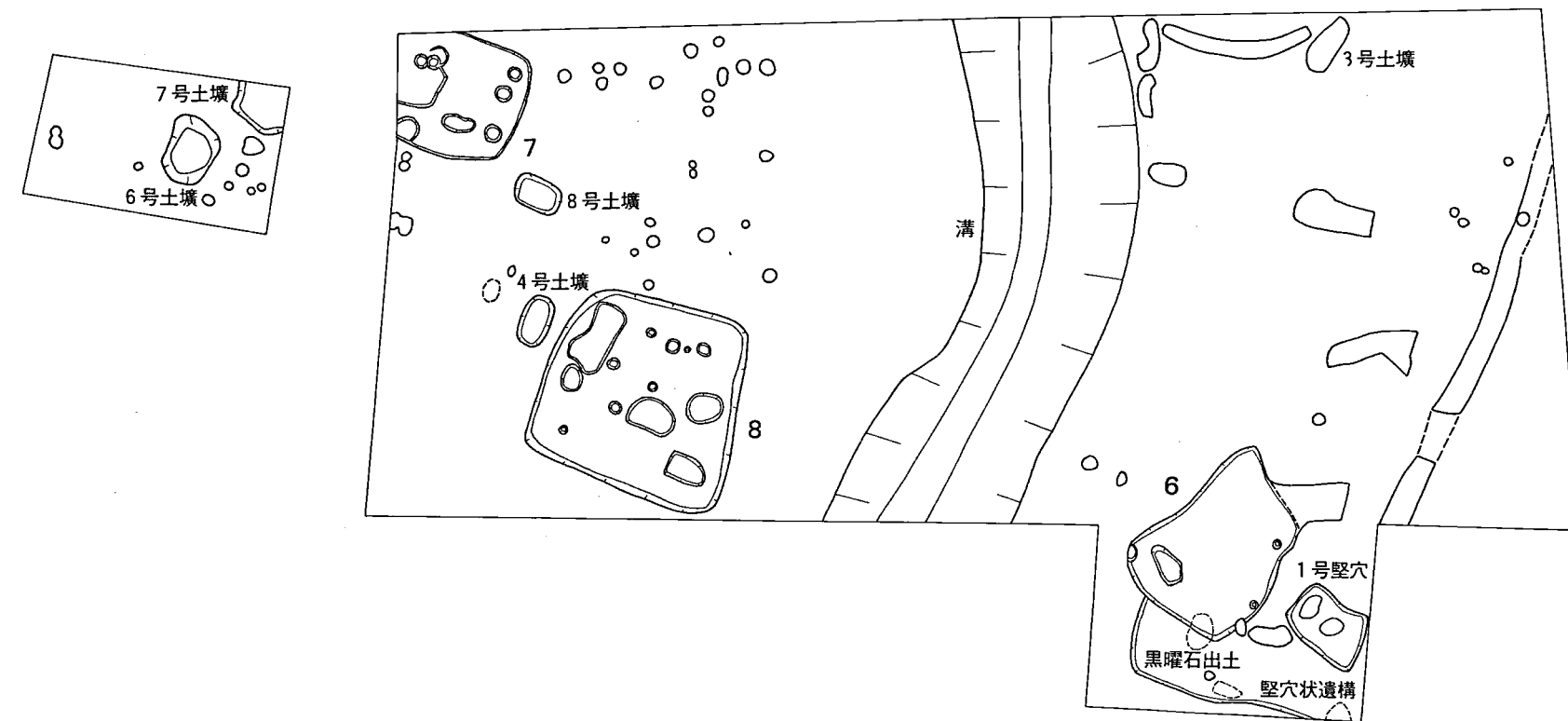
発掘調査は幹線水路に相当する箇所限定して行い、調査対象は、幅15m、長さ70mの約1000m²程である。主な検出遺構は弥生時代中期初頭～前半の住居跡3軒と土壇7基、堅穴状遺構1基、古墳時代後期の住居跡3軒、奈良時代の大溝1条と土壇1基、住居跡のコーナーのみ検出したもの1軒である。限られた範囲の調査のため、遺跡の詳細は不明であるが、周辺の試掘調査の結果より、集落は北側へ広がっている事が予想される。

(1) 弥生時代・古墳時代の遺構

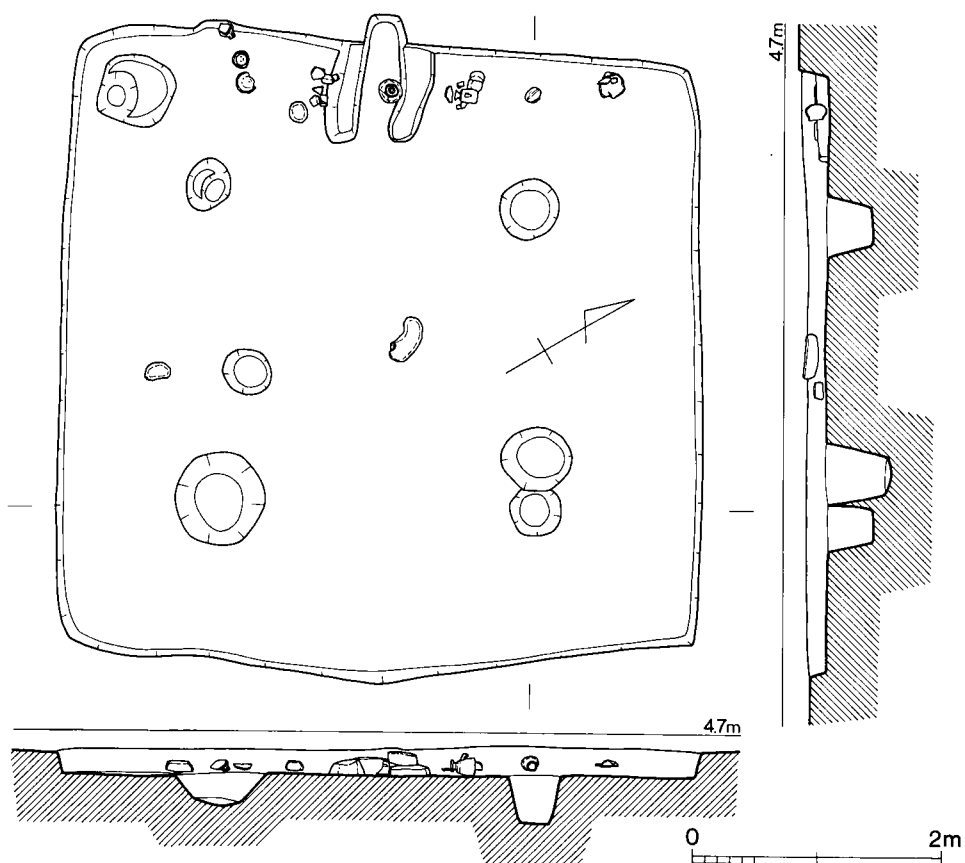
a 住居跡

1号住居跡（第3図、図版1・2）

発掘区の東側端部で検出された。平面形態は方形を呈し、規模は長軸5.2m、短軸5.1m、壁



第2図 権現塚南遺跡遺構配置図 (1/200)

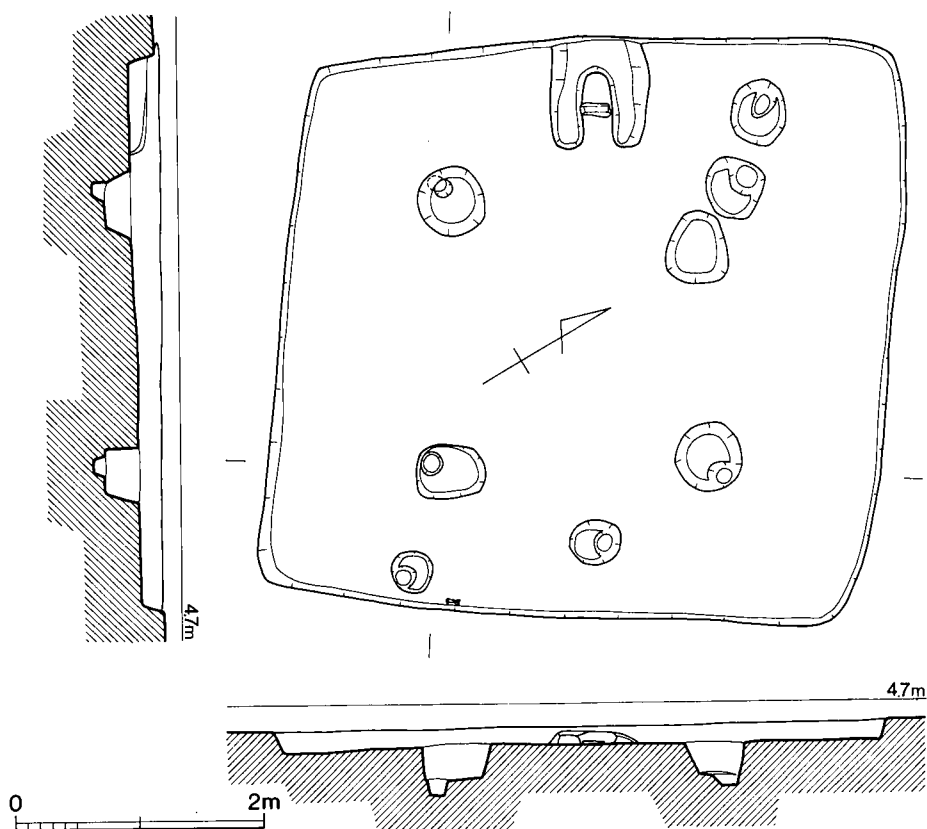


第3図 1号住居跡実測図(1/60)

高24cmである。住居跡内からは7個の柱穴を検出したが主柱穴は4本である。主柱穴は底径12～48cmで、深さは21～36cmである。心心距離は2.4～2.6mを測る。主軸の方位はN60°Wを示す。西壁の中央部にカマドを付設しており、この左右には土器が散乱していた。住居跡中央部には作業に使用したと思われる石材が1個据えている。主な出土遺物は須恵器の杯身、蓋、土師器の台付把手付碗、甕、甗、高杯である。なお、カマド中央部には高杯の脚部のみを支脚として立てて使用していた。

2号住居跡(第4図、図版2)

1号住居跡の西方1m程の位置にあり、出土遺物から、1号住居跡より後出するものと判断される。平面形態は方形を呈し、規模は長軸4.95m、短軸4.75m、壁高18cmである。住居跡内からは8個の柱穴を検出したが主柱穴は4本である。主柱穴は2段堀りであり、底径12～15cmで、深さは30～40cmである。心心間の距離は2.28～2.4mである。主軸の方位はN53°Wを示す。西壁中央部分にカマドを付設している。3号住居跡を切って造られている。出土遺物は須恵器



第4図 2号住居跡実測図 (1/60)

の杯身、高杯の脚部である。

3号住居跡 (第5図、図版2)

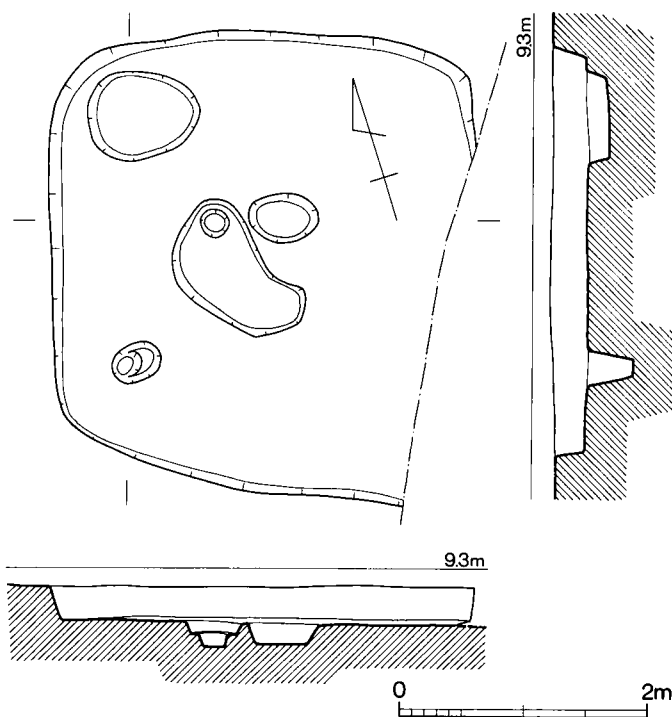
2号住居跡に東壁を切られている。平面形態は方形を呈しており、規模は長軸3.7m、短軸3.4m、壁高24cmである。住居跡内からピット5個が検出されたが、主柱穴は定かでなく、仮りに、西壁の2個をそれとすると、東壁が不明である。中央部分の楕円形状のピットは炉跡と思われる。主軸の方位はN16°Eを示す。出土遺物は甕などの弥生土器片である。

4号住居跡

発掘区の北側の端から住居跡のコーナーの一部が検出されたが、全容は不明である。

5号住居跡 (第6図、図版3)

1号住居跡の南側4m程に位置しており、1号住居跡とは主軸方向が同一である。平面形態は方形を呈しており、規模は長軸4.28m、短軸4.1m、壁高16cmである。住居跡内からは6個の柱穴が検出されたが、主枕穴は4本である。主柱穴は底径16~22cm、深さ18~20cmである。心



第5図 3号住居跡実測図(1/60)

心間の距離は1.7～1.9mである。主軸の方位はN63°Wを示す。西壁中央部にカマドを付設している。主な出土遺物は須恵器の杯蓋、身、高杯、提瓶、土師器の杯、碗、高杯、甕、甗などである。

6号住居跡

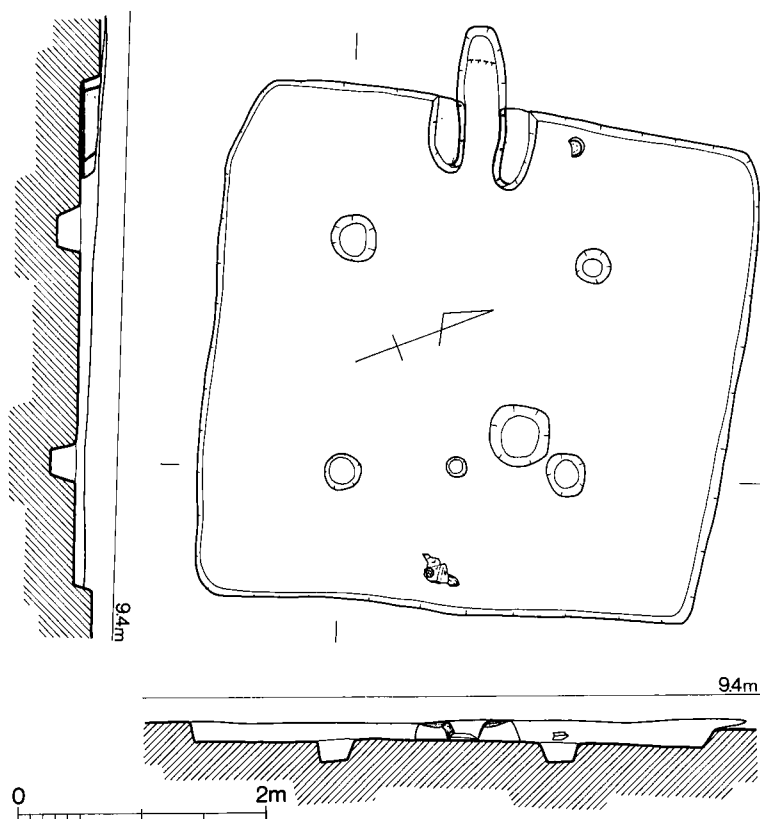
発掘区南端部に1/2程が検出されたため、この住居跡のみ発掘区を拡張して調査を行った。平面形態は不整形ながらも長方形状を呈している。規模は、長軸5.1m、短軸3.6m、壁高15～24cmを測る。柱穴らしきものは検出されず、主柱穴は不明である。出土遺物は弥生式土器片である。

7号住居跡(第7図、図版3)

発掘区西側近くで検出されたが、住居跡の西壁は完掘できなかった。平面形態は長方形を呈するものと思われ、規模は、短軸3.5m、壁高12cmを測る。主柱穴は4本と思われ、底径30～60cm、深さ13～20cmを測る。主軸の方位はN73°Wを示す。出土遺物は甕などの弥生式土器である。

8号住居跡(第8図、図版3)

発掘区の南西側から検出された。平面形態は方形を呈しており、規模は、長軸5.75m、短軸5.5m、壁高34mを測る。住居跡内からは9個のピットと4個の楕円形土壙が検出されたが、主



第6図 5号住居跡実測図(1/60)

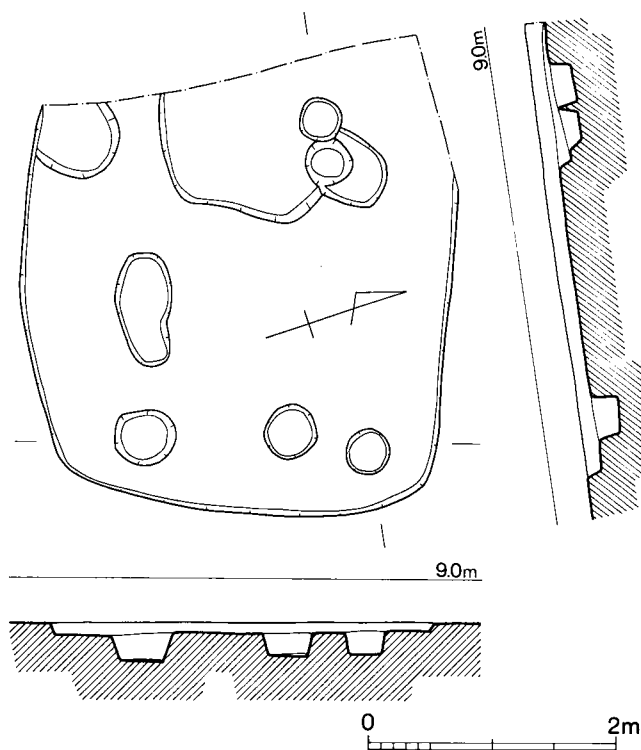
柱穴は特定できない。主軸はN21°Eを示す。出土遺物は甕などの弥生式土器片である。

b 土壙(第2図、図版4)

出土した土壙8基のうち5号土壙を除く7基の土壙はいずれも弥生時代中期のもので、平面形態は小判形を呈している。規模は長軸1.4~1.9m、短軸0.7~1.4mを測るものである。7号土壙は一部の調査のため詳細は不明であるが、平面形態は若干異なっている。1~4号、7号土壙からは甕、器台などの弥生式土器が検出されており、6号土壙からは甕棺の破片が投棄された状態で出土した。

c その他の遺構

多数の円形ピットや不整形をしたピットが検出された。6号住居跡の南からはこれに切られた堅穴状遺構が検出されたが、住居跡になるのかどうかは不明である。この中からは0.7×1



第7図 7号住居跡実測図(1/60)

mの範囲に拳大の黒曜石原石があたかも敷き詰められた様な状態で検出されたが、写真、図面をとる前に第3者によりすべて取りあげられてしまった。

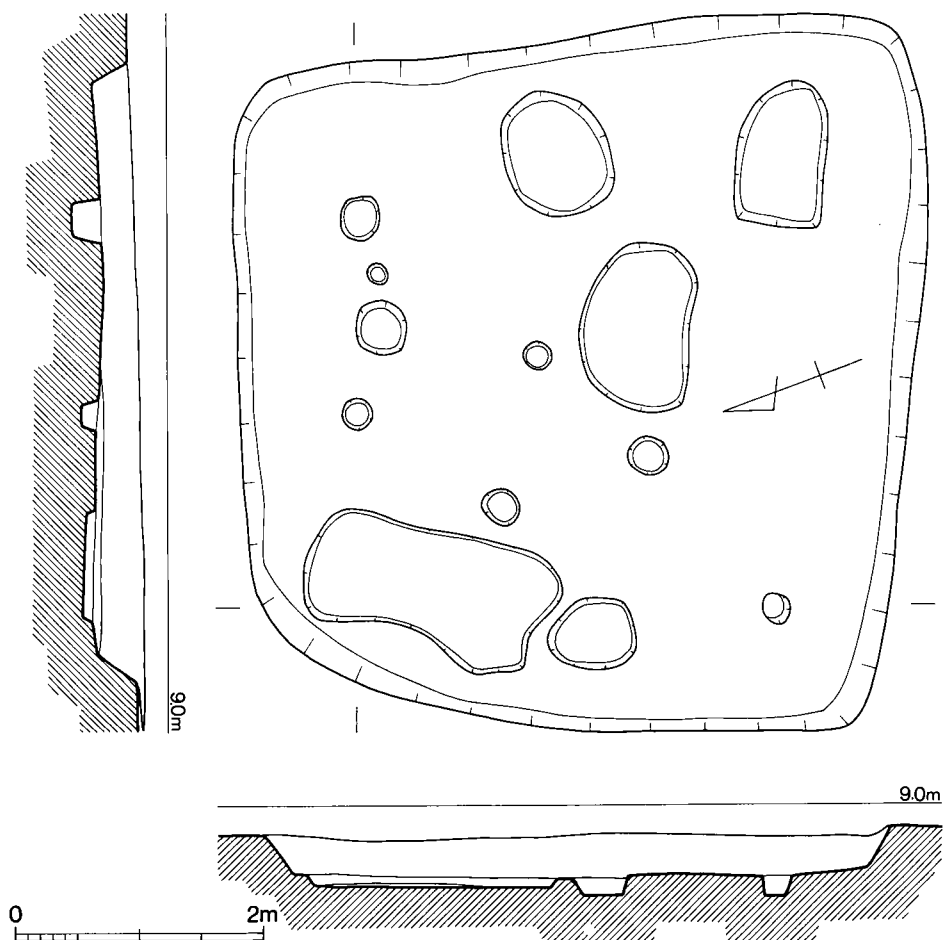
(2) 歴史時代の遺構

a 溝(第2図)

発掘区の中程を南北に延びる溝で東側に大きく弧を描いている。この大溝の規模は上部での幅4～5m、底部幅0.8～1.2m、深さ70～80cmであり、底面の傾斜は特に見られずほぼ水平である。主な出土遺物は須恵器の椀、土師器の甕など多数である。

b 土壇(第2図、図版4)

発掘区の西側のはずれから検出された5号土壇である。土壇の平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径135cm、短径109cm、深さ24cmを測る。断面の形態は浅い摺鉢状を呈するものである。出土遺物は須恵器椀蓋、土師器椀、杯、皿、甕などである。



第8図 8号住居跡実測図(1/60)

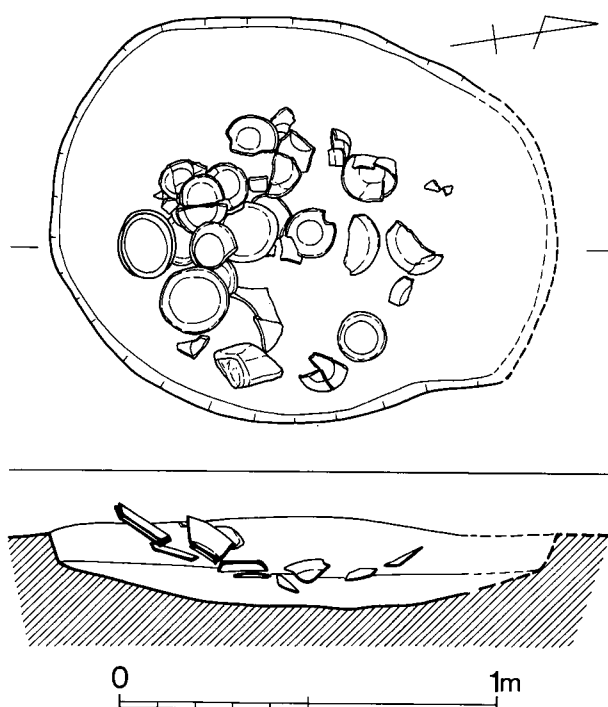
遺物

(1) 弥生時代・古墳時代の遺物

a 住居跡出土遺物

1号住居跡出土土器(第10図、図版5)

出土した土器は須恵器の杯蓋、杯身、土師器の高杯、台付把手付碗、甕、甗などである。須恵器の杯蓋(1)は、天井部と体部の境に凹線を配している。天井部外面は回転ヘラ削りし、頂部内面はナデ、他は横ナデ調整である。杯身(2・3)の立上りは1.1~1.3cm程であり、内



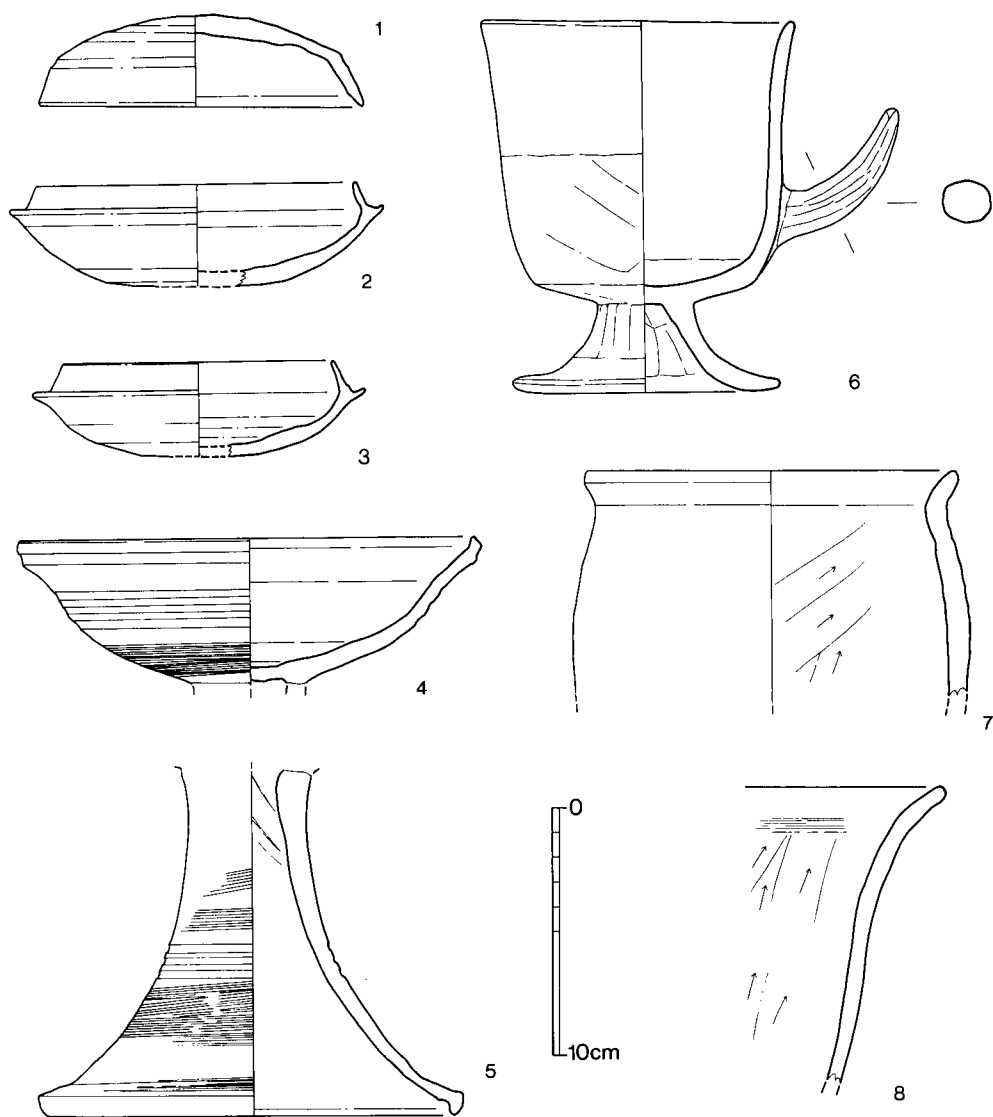
第9図 5号土坑実測図(1/20)

傾する。底部外面は回転ヘラ削りを広範囲に施す。他は横ナデとナデ調整である。高杯(4・5)は別個体である。杯部(4)は口縁部内面に段を有し、外面には凹線が入る。杯部中ほどには3条の凹線が入り以下底部までカキ目調整する。脚部(5)はカマド内の支脚がわりに用いられたものである。脚裾部内面に屈曲を有する。脚柱中ほどには3条の沈線が入り、脚部はカキ目調整する。台付把手付碗(6)は外面丹塗りの完形品である。碗は器高が高く、底部からわずかに開いて口縁部を形成する。口縁端部を少し外反させており端部は丸い。把手は底部近くに片方のみに貼付けされており、断面は扁球形を呈する細長いものである。把手はヘラ削り調整する。台状部は内外面ともにヘラ削り調整で仕上げている。口径12.6cm、器高15.0cm、脚裾径10.7cmを測る。甕(7)の胴部は張りが少く、短く外反する口縁部まで一様に器壁が厚い。内面はヘラ削りを施す。8は甗と思われる。外面はハケ目、内面はヘラ削り調整である。

出土した遺物は6世紀後半に比定される。

2号住居跡出土土器(第11図、図版5)

出土した土器のうち図示し得るのは須恵器の杯身、高杯のみである。杯身(1)は短く、基部近くは内傾するが、中ほどから直立する。底部外面は回転ヘラ削りを施している。口径10.8cm、



第10図 1号住居跡出土土器実測図（1/3）

器高4.3cm、立上り高7mmである。2の高杯は脚柱部のみを遺存する。脚部中ほどに2条の平行沈線を入れる。外面上部と、内面にしぼり痕が見られる。

出土した土器は6世紀末に比定される。

3号住居跡出土土器（第12図）

2号住居跡に切られている。出土した土器は甕、壺の小片である。甕（1）は三角口縁であり内傾している。口縁直下3cmの位置に三角凸帯を貼付する。2は壺の底部である。図示し

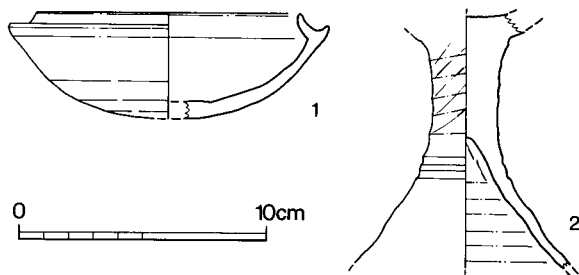
なかったが、この他に、甕のあげ底をした底部片も出土している。

出土した土器は弥生時代中期初頭に比定される。

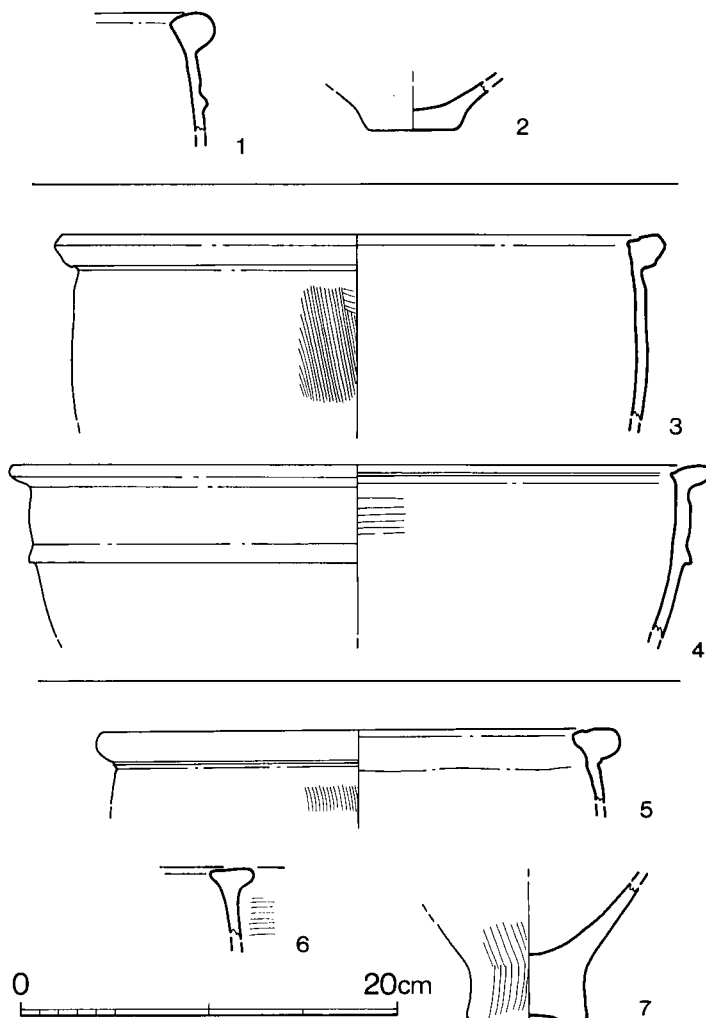
5号住居跡出土土器

(第13図、図版5)

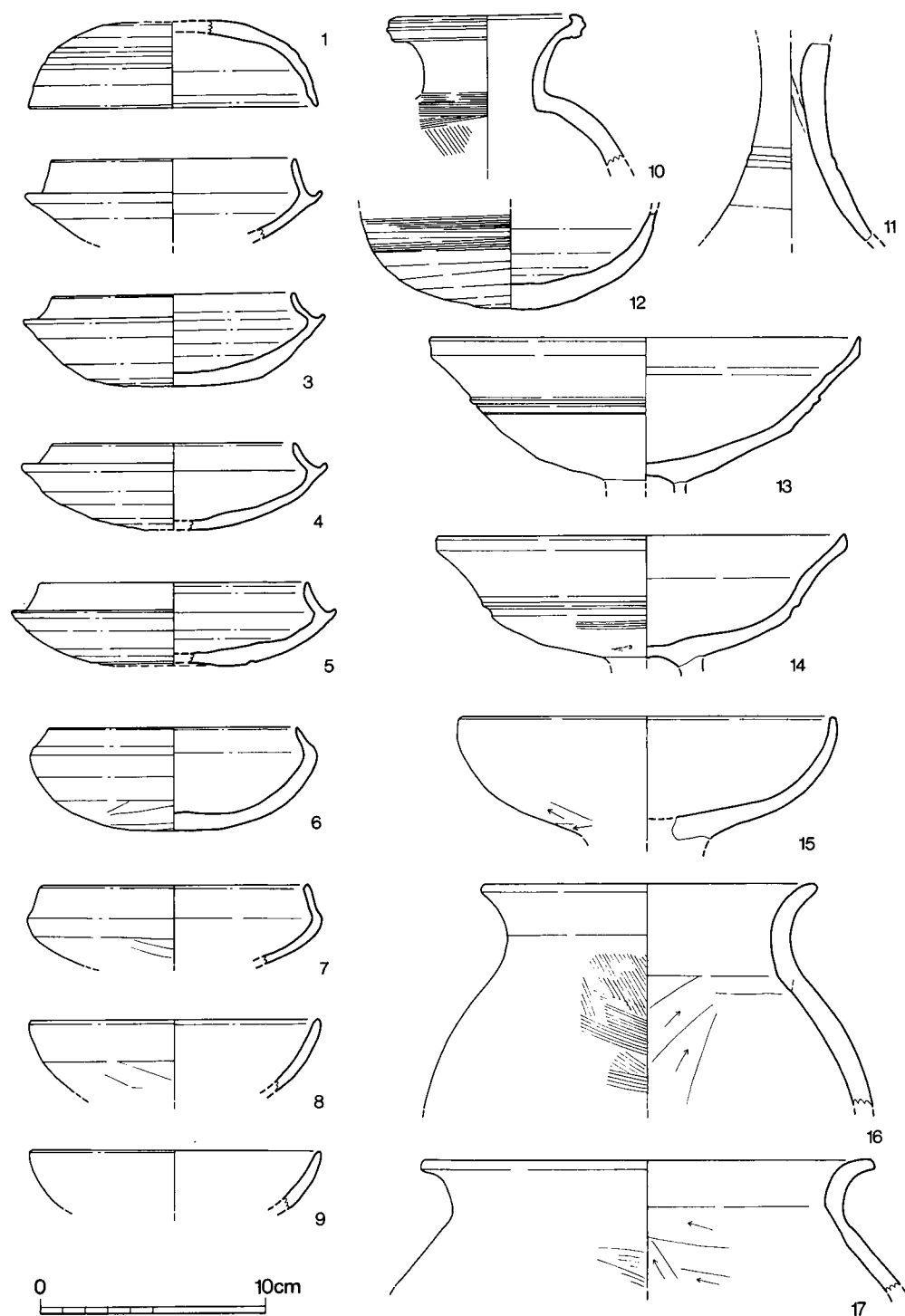
出土した土器は須恵器の杯蓋、杯身、提瓶、であり、土師器では杯、高杯、甕、甗である。須恵器の杯蓋（1）は天井部と体部の境に凹線を配しており、口縁端部内面にわずかに段をなす。天井部外面はヘラ削りを施す。



第11図 2号住居跡出土土器実測図（1/3）



第12図 3号・7号・8号住居跡出土土器実測図（1/4）



第13图 5号住居跡出土土器実測図(1/3)

杯身（2～5）は立上り高さ1.1～1.6cmであり、内傾する。底部外面は回転ヘラ削りを施す。提瓶（10）は大型品であるが口頸部周辺を残すのみである。口縁部は粘土貼付により肥厚させ2ヶ所に沈線を配している。12は椀であろうか。ヘラ削りとカキ目調整が見られる。土師器の杯（6～9）には2種類の形態がある。6・7は立ち上がりを有するものである。底部外面は静止ヘラ削りし、杯上半部から内面に掛けてヘラ磨きを施している。8・9の杯は内面ヘラ磨きし、うるしを塗っている。高杯（11・13～15）は杯部の形態に2種類がみられる。13・14は杯部中ほどに沈線を配し、この部分から口縁部までは外反気味にのび、口縁端部の断面は三角形を呈する。15の杯部は滑らかなカーブを描き、口縁端部を直立気味に仕上げている。杯部下半は静止ヘラ削りを施す。11は高杯脚柱部であり、中ほどの位置に2条の沈線が入る。脚内面上部にはしほり痕が見られる。甕（16～20）はいずれも外湾する口縁部を有し、内面の胴部との境に稜線が入る。胴部は16～19はややふくみをもっているが、20は胴部の張りがほとんどみられない。胴部外面はハケ目、もしくは、ハケ目後にナデしており、内面は横位、左上方、右上方へ走向するヘラ削りを施している。甗（21～24）の口縁部はく字状を呈して外反するもの（22）とハ字状に胴部から開くもの（21）とがある。21は多数の円孔を穿っている。外面はハケ目、内面はヘラ削り調整である。

出土した土器は6世紀後半代に比定される。

7号住居跡出土土器（第12図）

出土した土器は甕である。3は三角口縁であり、わずかに内傾する。外面は目の細かいハケ目、内面はナデ調整である。4は逆L字状口縁であり、内側に肥厚させる。口縁部は内傾する。口縁下4cm程の位置に三角凸帯を貼付する。胴部の張りは少ない。内面は黒塗である。

出土した土器は弥生時代中期前半に比定される。

8号住居跡出土土器（第12図）

出土した土器は甕である。5は三角口縁であり、わずかに内傾する。6は三角口縁の変形であり、わずかに内傾する。胴部外面はハケ調整し、内面はナデている。7の底部はわずかに上げ底である。外面は目の粗いハケ目が入る。

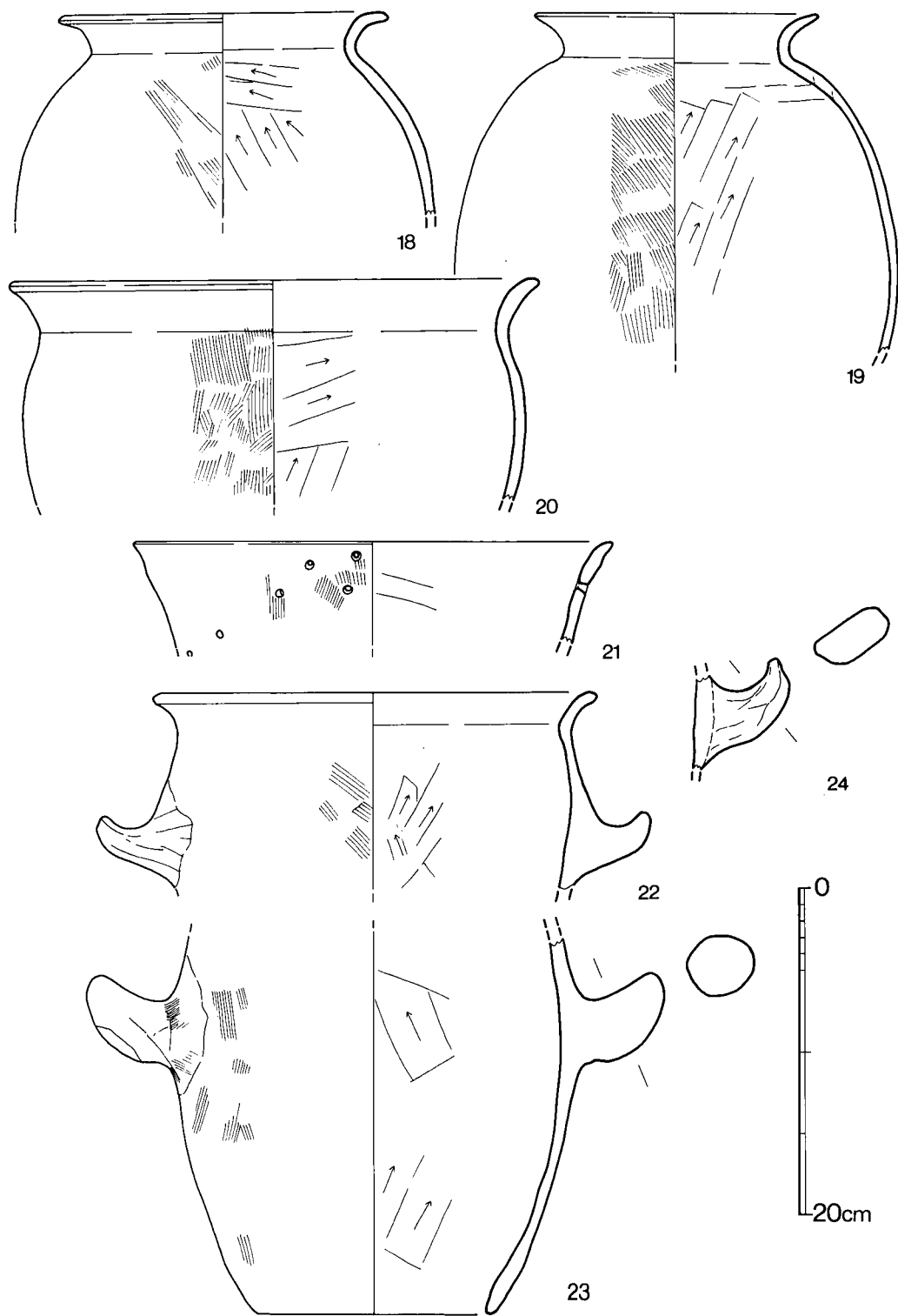
出土した土器は弥生時代中期前半に比定される。

b 土壇出土遺物

1号土壇出土土器（第15図、図版6）

1は甕であり、口縁部はやや内側へ肥厚する逆L字状口縁である。外面はハケ目調整である。2はわずかに上げ底の底部であり、胴部外面は縦方向のハケ目調整である。

出土した土器は弥生時代中期前半に比定される。



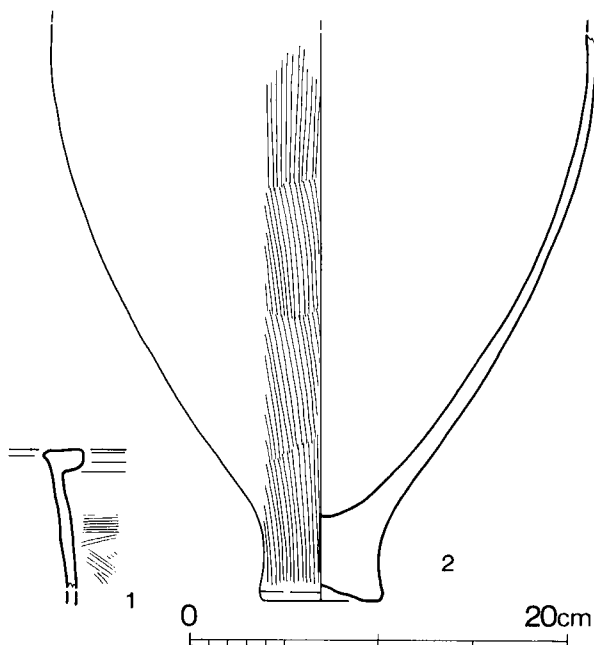
第14図 5号住居跡出土土器実測図(1/4)

3号土壙出土土器

(第16図、図版6)

出土した土器は器台、甕である。1・2の器台はいずれが上、下かの判断が困難な器形である。1は外面にハケ目が入る。2は内面に指頭圧痕が残る。3・4の甕は共に三角口縁であるが3は内傾する。4は口縁直下部分は横方向のハケ目が入り、以下は斜位のハケ目調整である。口縁部内面は指頭圧痕が残る。いずれも胴部の張りは小さい。

出土した土器は弥生時代中期初頭に比定される。



第15図 1号土壙出土土器実測図(1/4)

4号土壙出土土器 (第17図、図版6)

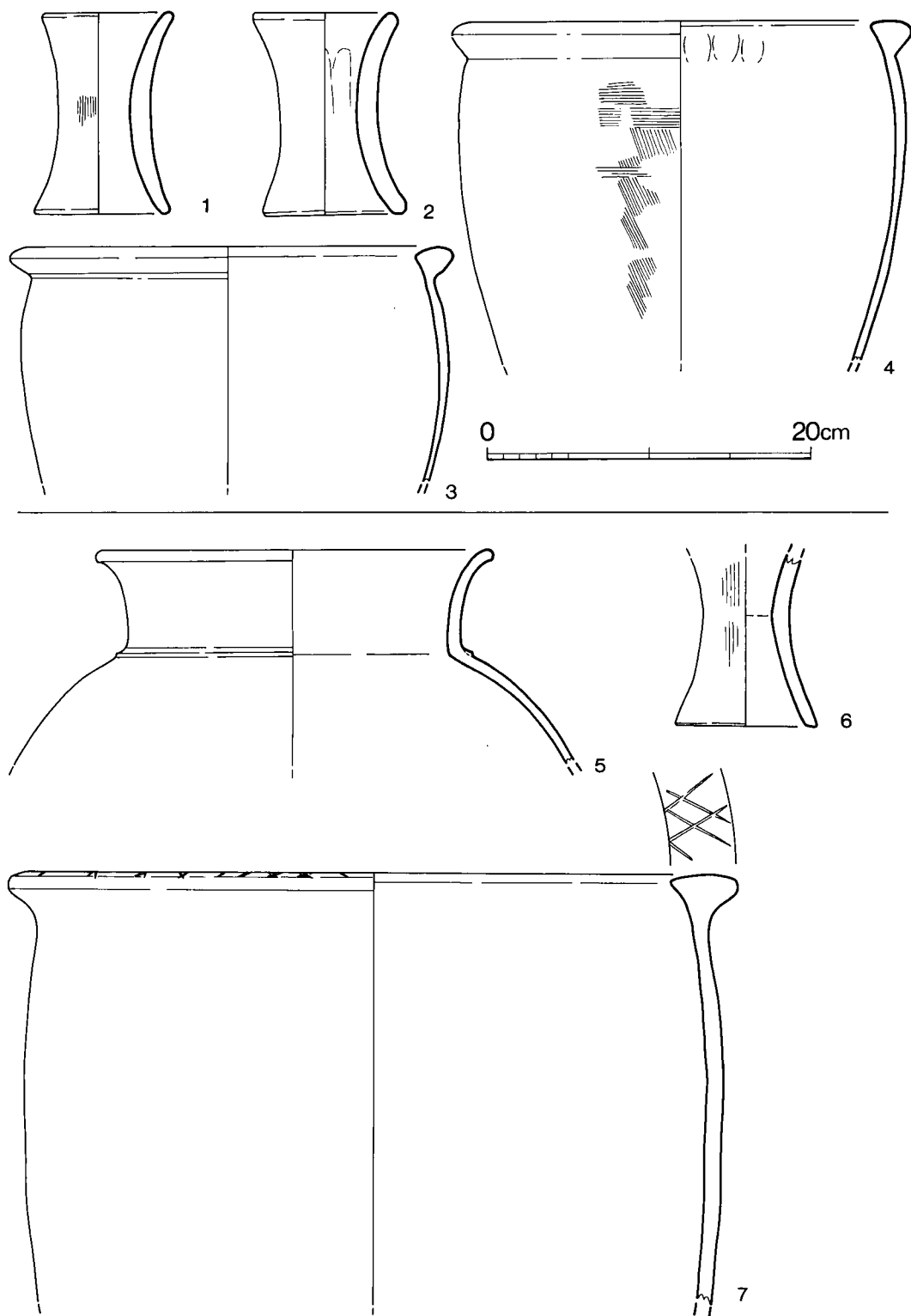
出土した土器は壺、甕、器台である。1の壺口縁部は、先端部分の外反度が強く、口唇部は平坦面をなす。器表は磨滅しており調整法は不明である。内面胴上部にわずかに指頭圧痕を残している。4は壺底部である。甕(2・3・5)の口縁部はやや内側へ肥厚させた三角口縁であり、2は口縁下に1条の沈線が入る。3の口縁部は内傾する。2の外面は目の粗い縦方向のハケ目が入り、3は斜位のハケ目の後に横方向のハケ目を施している。5の底部はわずかに上げ底であり、縦方向のハケ目が入る。器台(6~8)は内面中央部分に鈍い稜が入る。外面は縦方向のハケ目調整である。

出土した土器は弥生時代中期初頭に比定される。

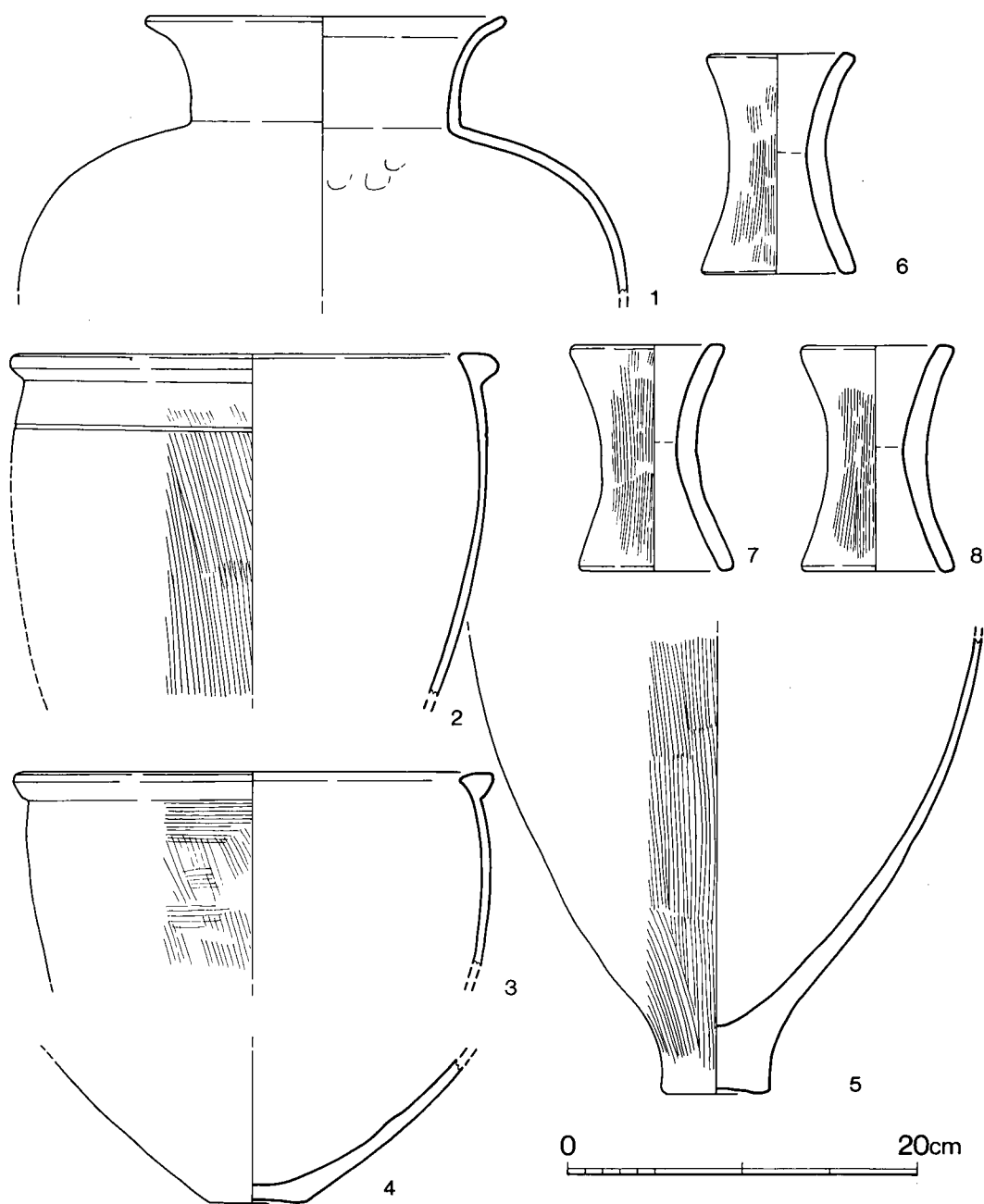
6号土壙出土土器 (第16図)

出土した土器は壺、甕、器台である。壺(5)の口縁は中ほどまでは直立気味であり、先端部を外湾させる。頸基部に三角凸帯を貼付する。胴部外面は横へら磨き、内面はナデ調整である。器台(6)は内面の中ほど部分に鈍い稜をもつものである。器表の磨滅が著しいが外面にハケ目が遺存している。大型甕(7)は口径45cmをはかる。わずかに内傾する口縁部は三角口縁の変形であり、内側へ肥厚させている。口縁部上面には横ナデ調整後に斜格子の線刻文様が入る。胴部の張りはほとんどみられない。外面は部分的に横へら磨きが見られる。

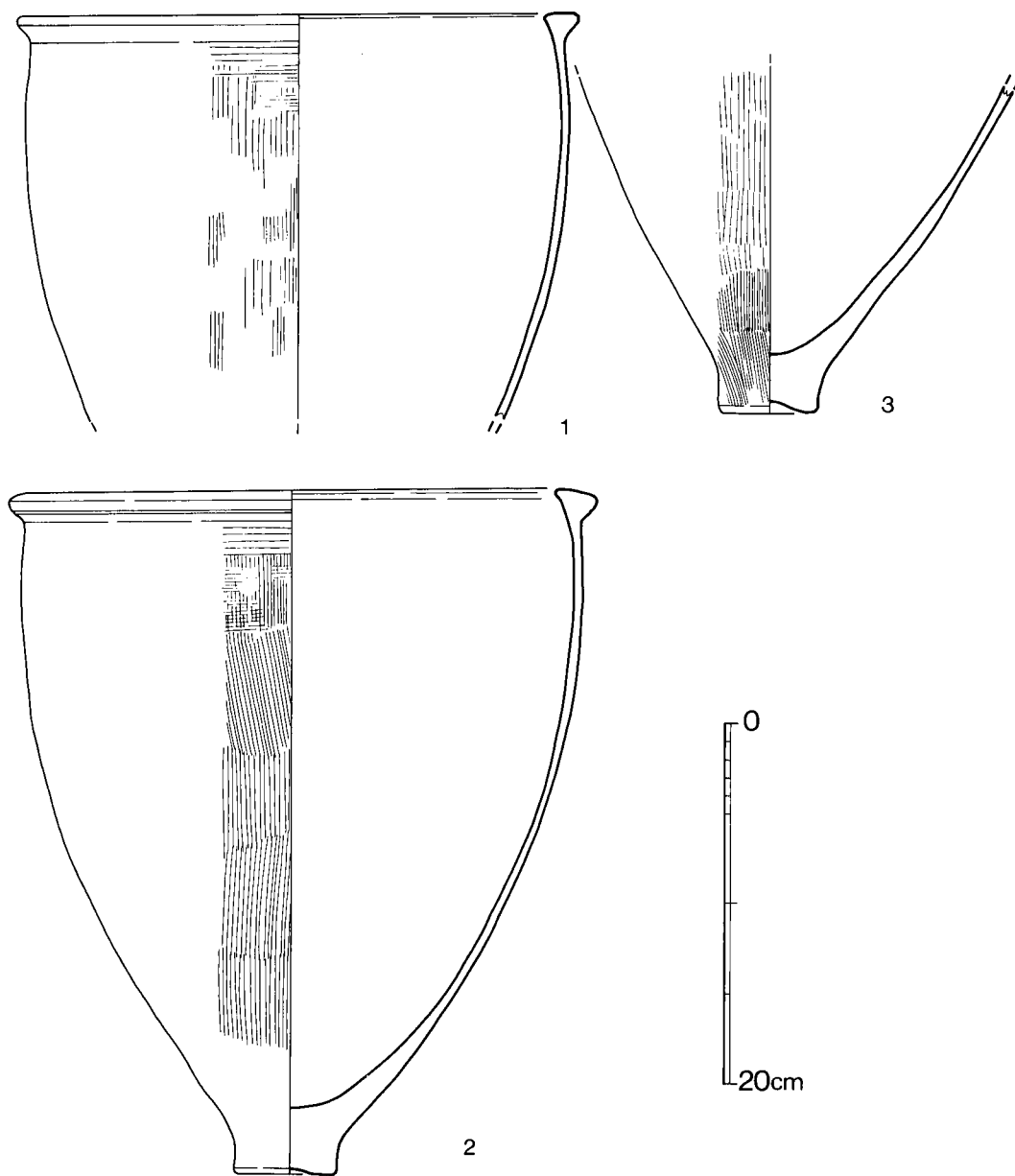
出土した土器は弥生時代中期前半に比定される。



第16図 3号・6号土壇出土土器実測図(1/4)



第17图 4号土坑出土土器实测图(1/4)



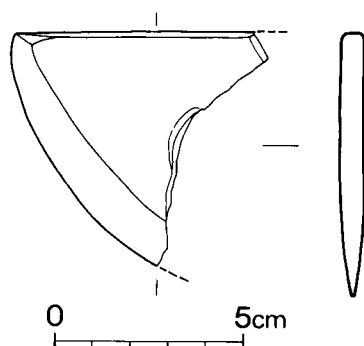
第18図 竪穴状遺構出土土器実測図（1/4）

c 竪穴状遺構出土遺物（第18・19図、図版7・8）

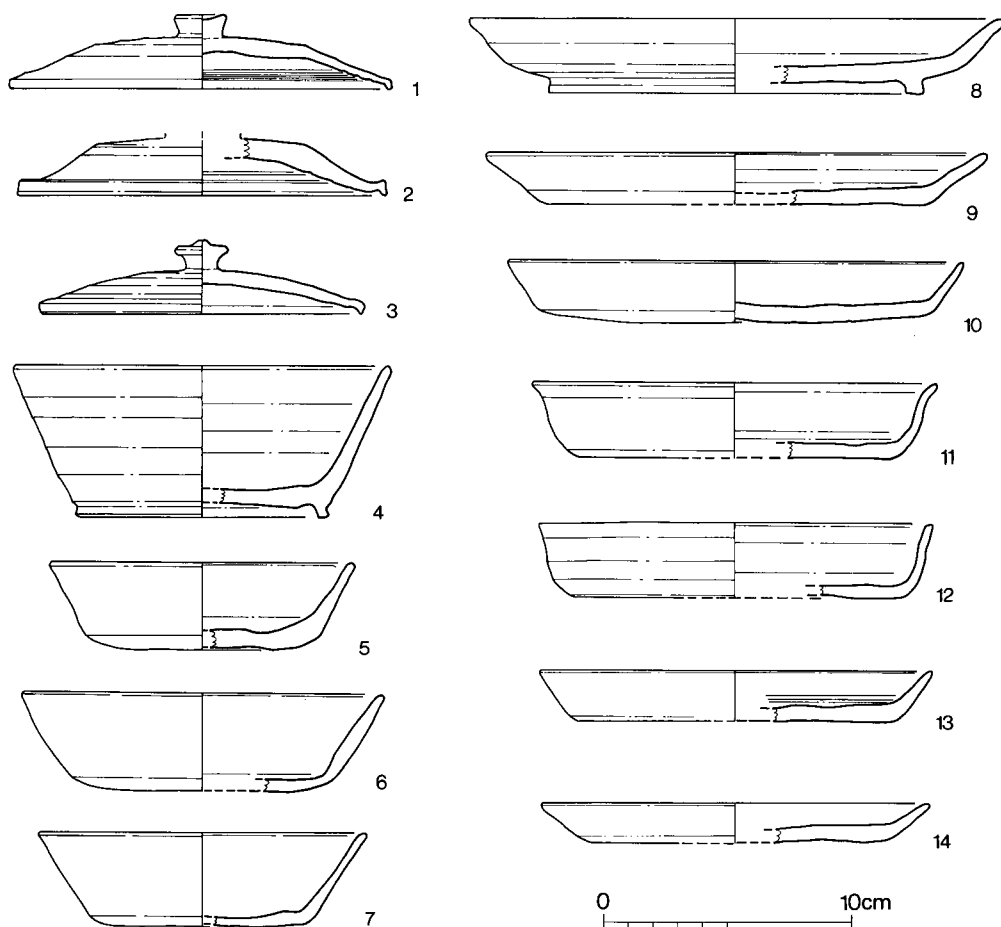
6号住居跡に切られており、遺構の性格は不明である。出土した土器は甕で、この他に、石
 庖丁1、黒曜石の原石が4～50個体出土した。甕は三角口縁の変形である口縁部をもち、2は

わずかに外傾する。1は外面の口縁部下のみ横方向のハケ目が入り、以下は縦方向のハケ目調整である。2は1と同じく口縁部下は横方向ハケ目が入り、以下の縦方向のハケ目上を、上部のみ更に横方向のハケ目を施している。底部は2、3共にわずかに上げ底であり、3は胴部外面は縦方向のハケ目調整する。石庖丁（第19図）は $\frac{1}{2}$ 程度を遺存するのみである、外湾刃で、刃部はやや鋭る。淡い灰色をした粘板岩製である。厚さ0.6cm、現存幅6.2cmであり、最大部は7.5cmになりそうな大型品である。

出土した土器は中期初頭に比定される。



第19図 竪穴状遺構出土土器実測図（1/2）

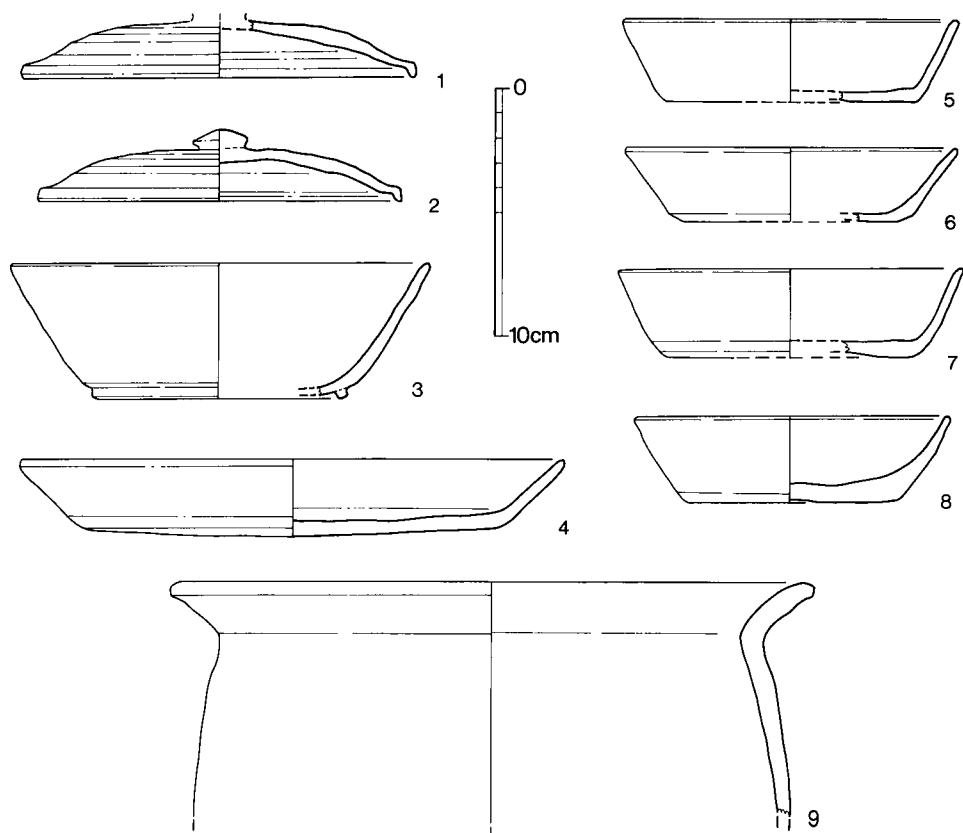


第20図 溝出土土器実測図（1/3）

(2) 歴史時代の遺物

a 溝出土土器 (第20図)

出土した土器は須恵器の椀、杯、皿、土師器の杯である。須恵器の椀蓋（1～3）は2種類がみられる。1・2は、口径14.9～15.4cmであり口縁端部は短く、直角に折り曲げている。1はつまみがつき、つまみ周辺部を回転ヘラ削りしている。内面には沈線が入る。2は器壁が異常に厚い。3は口径13cmと小型となり、頂部には凝宝珠つまみが付く。口縁端部を鋭く折り曲げている。4は高台付椀であり、底部外方に丈の低い高台を貼付している。体部は直線的に開いている。内外面とも横ナデ調整である。5は杯であり、底部をヘラ削りする。8～14は皿であり、大型で高台をもつ（8）、大型で杯部が浅く、外反度が強い（9・10）、9、10を小型化したもの（13・14）、やや器高が高くて、杯上半部を外湾させる（11・12）に4分類できる。11・12の底部はそれぞれ静止・回転ヘラ削りし、その他はナデ調整である。土師器杯（6・7）は



第21図 5号土壌出土土器実測図（1/3）

須恵器杯に比して大型品である。6は体部の器壁が厚い。出土した土器のうち、椀（4）は高台が杯部底面の外方にあり当該出土品のうちでは最も新しい様相を示す。溝出土の土器は8世紀後半代に比定されよう。

b 5号土壙出土土器（第21図、図版7）

土壙内からは20個体近くの土器が一括して出土した。器種は須恵器椀蓋、土師器椀、皿、杯、甕である。須恵器椀蓋（1・2）は口縁端部を短く直角に折り曲げるもので、2は頂部に扁平な凝宝珠つまみが付く。土師器高台付椀（3）は底部外方に丈の低い高台を付設する。底部周辺の一部を回転ヘラ削りしている。皿（4）は口径22cmの大型品である。杯（5～8）は口径12.8～13.9cmである。甕（9）はく字状を呈する口縁部を有し、胴部の張りは少ない。

出土した土器は8世紀後半代に比定されるもので溝と時期を同じくするものと考えられる。

4. 大江南遺跡の調査

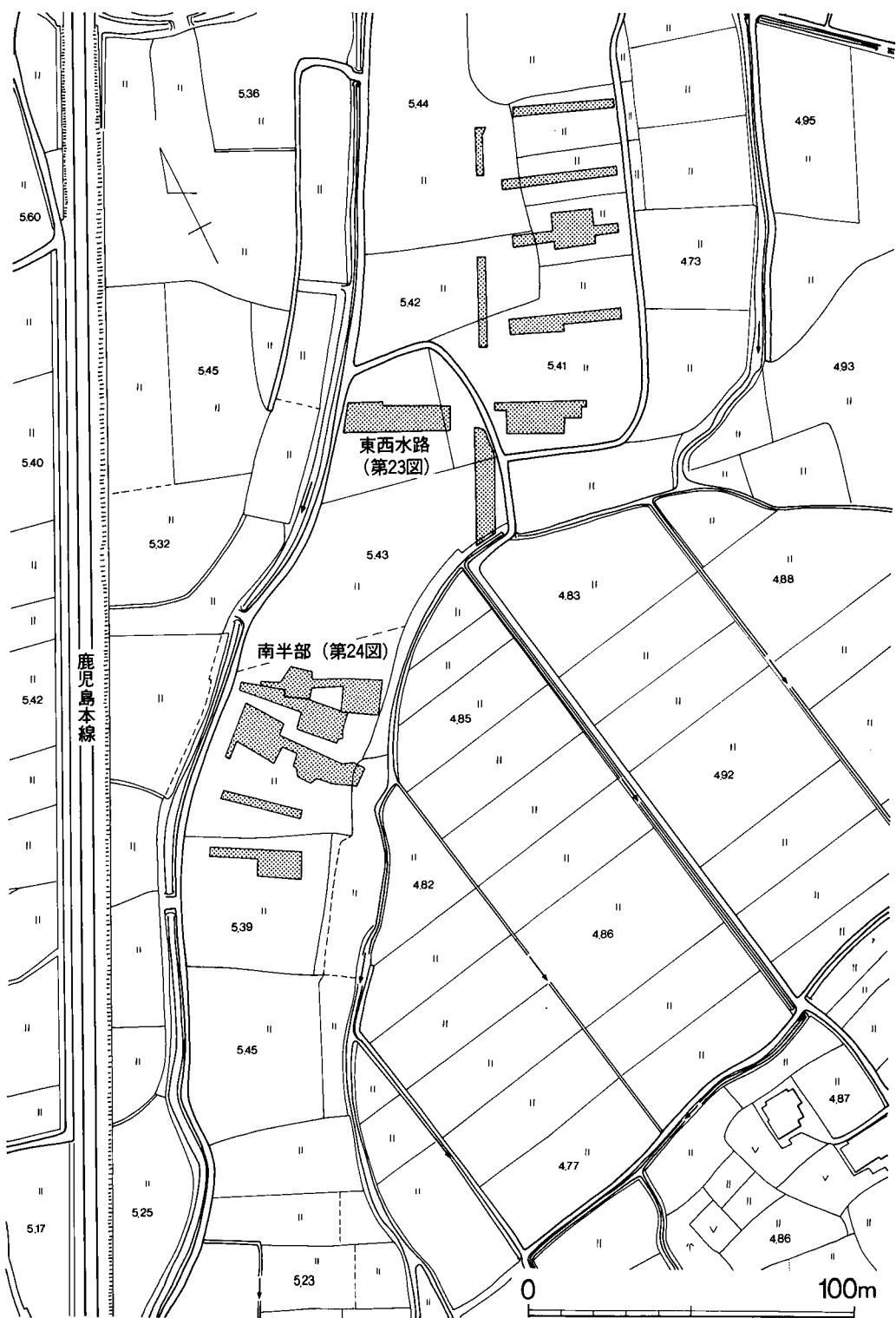
遺 構

昭和59年度の瀬高東部地区圃場整備事業に伴って試掘調査を実施し、弥生時代から中世に至る遺跡の所在が確認され、大江遺跡と呼称する。この大江遺跡の北半部は水路掘削箇所の調査により平安時代から鎌倉時代にかけての土壙、井戸、土壙墓が検出された。また、南半部の圃場整備事業により削平を受ける箇所からは弥生時代中期後半の竪穴1基と、古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居跡10軒が検出された。大江遺跡は広範囲に広がっているため便宜上、北、南に分け、ここでは大江南遺跡のみを報告する。なお、歴史時代の遺構を検出した大江北遺跡について後日の報告としたい。

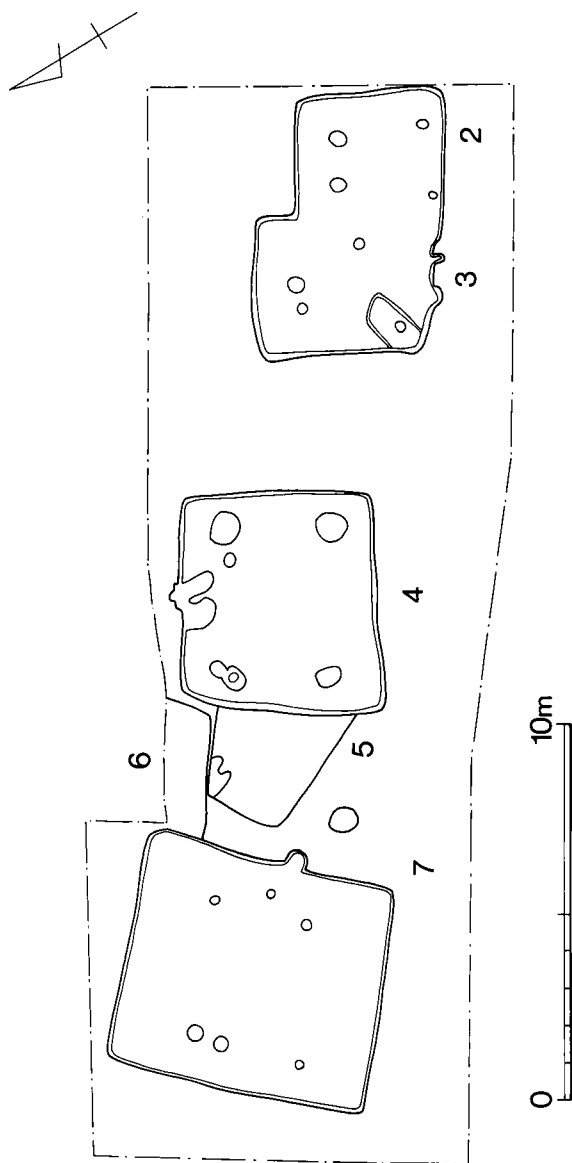
(1) 弥生時代の遺構

竪穴遺構（第24図）

最南部削平地点の調査により検出された。平面形態は長方形状を呈しており、規模は、長さ4.5m、幅1.8m、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物は壺、器台がほぼ完全な形で検出された。器台はやや上面から出土したが、壺は底面近くから出土した。



第22図 大江南遺跡地形図 (1/2,000)



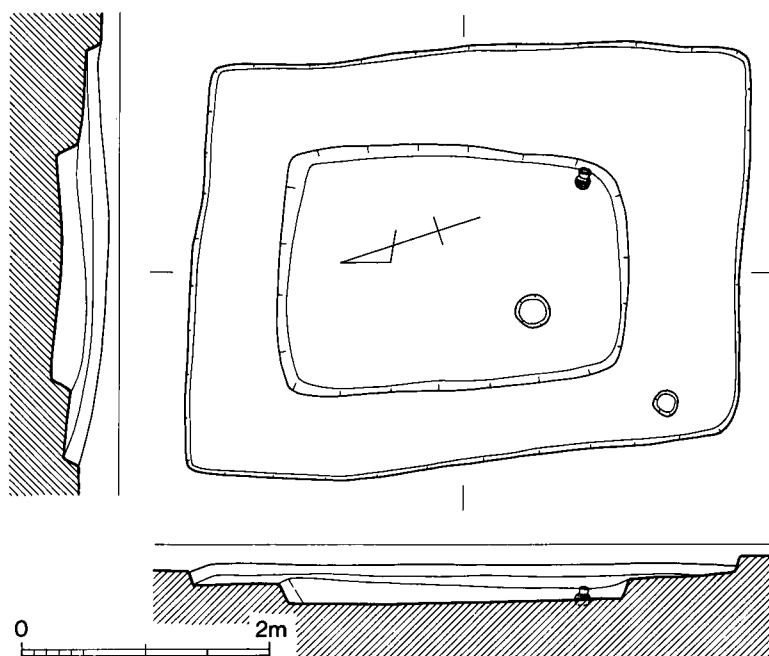
第23図 大江南遺跡東西水路遺構配置図（1/200）

(2) 古墳時代の遺構

住居跡

1号住居跡 (第25図)

南北方向の水路掘削箇所より検出された。平面形態は長方形を呈しており、規模は長軸4.43m、短軸3.35m、壁高9～14cmを測る。住居跡の中央部分には住居跡プランにあわせた長方形の掘り込みがある。規模は、長軸2.8m、短軸2.0m、壁高17cmを測る。柱穴は2個検出されたのみである。主軸はN18°Eを示す。住居跡の壁面から須恵器の甕が出土した他、杯、土師器の甕、甑を検出した。



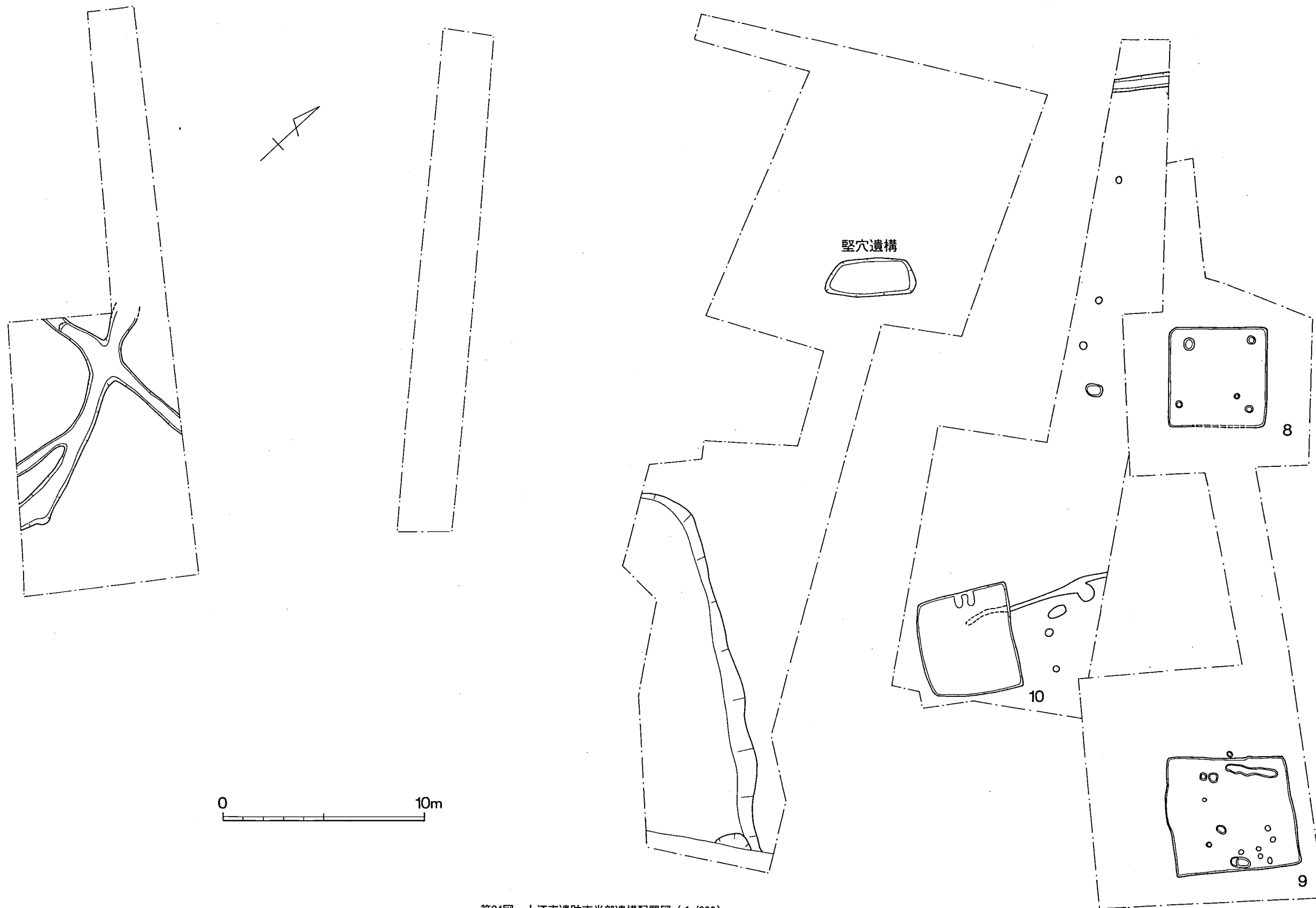
第25図 1号住居跡実測図 (1/60)

2号住居跡 (第23図、図版9)

東西方向水路部分の東側端部から検出された。3号住居跡と切り合っているが先後関係は把握できなかった。平面形態は方形を呈すると思われ、規模は、長軸4.0m、短軸の復元長4m強を測り、壁高は15cm程である。主柱穴は4個であり、やや南西壁寄りに位置している。主軸はN31°Eを示す。出土遺物は土師器の杯、小型丸底壺、甕である。

3号住居跡 (第23図、図版9)

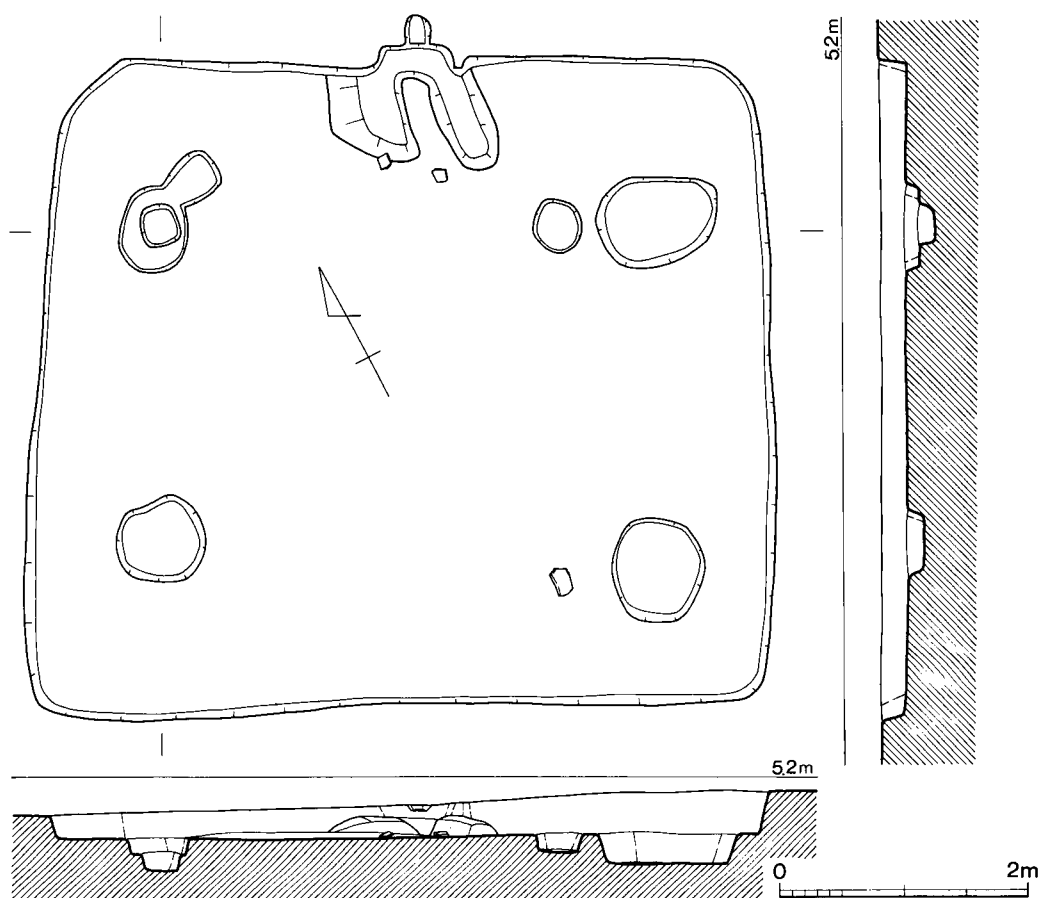
2号住居跡の西側にあり、切り合っている。平面形態は長方形を呈しており、長軸4.8m、短軸3.7m、壁高25cmを測る。主柱穴は不明瞭である。主軸はN30°Eを示す。



第24図 大江南遺跡南半部遺構配置図 (1/200)

4号住居跡（第26図、図版9）

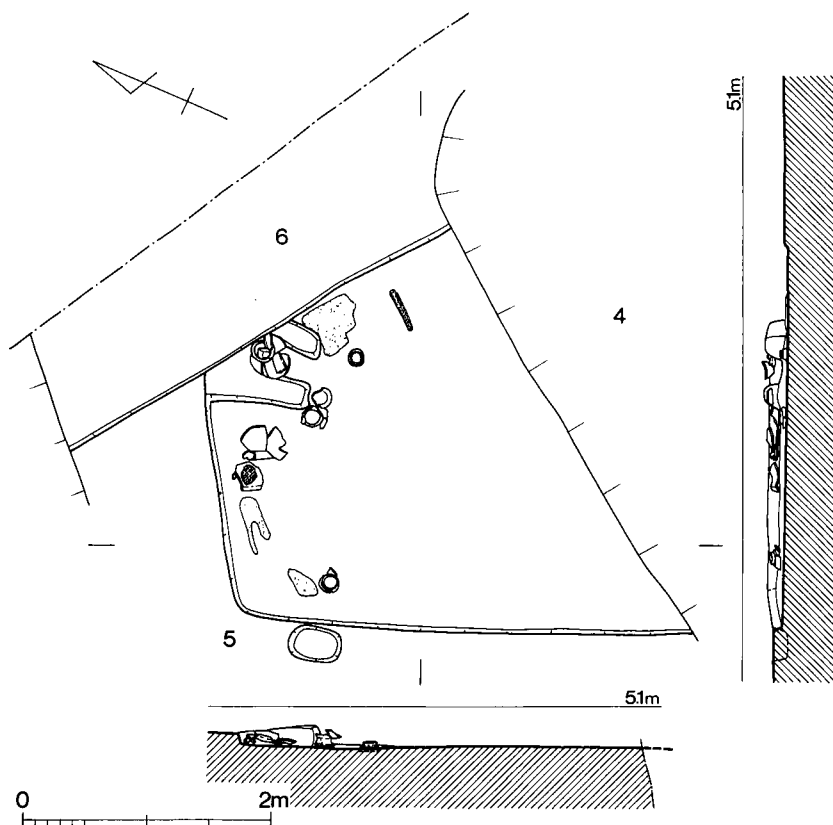
東西水路部分調査地点のほぼ中央部で検出され、5号住居跡を切って造られている。平面形態は方形を呈しており、規模は、長軸6.05m、短軸5.2m、壁高20cmを測る。主柱穴は4個で、心心間の距離は2.8～4mである。柱穴の掘り込みは浅く15～23cmである。北側壁の中央部にカマドを付設している。主軸はN28°Eを示す。出土遺物は土師器の杯、高杯、甕であり、須恵器は杯と甕の小片である。



第26図 4号住居跡実測図（1/60）

5号住居跡（第27図、図版9）

東西水路部分調査地点から検出されたが、4号、6号住居跡に切られている。このため、平面形態は特定できないが、南北の残存長は3.7m、壁高は7cmを測る。住居跡の北壁にカマドを付設しており、カマド中央部の石製支脚の周囲には甕が破砕していた。このカマド周辺に遺物が集中している。炭化材が散乱しているため、住居跡が火災に遭った事も考えられる。出土



第27図 5号住居跡実測図 (1/60)

遺物は土師器の杯、壺、把手付甕である。

6号住居跡 (第27図、図版9)

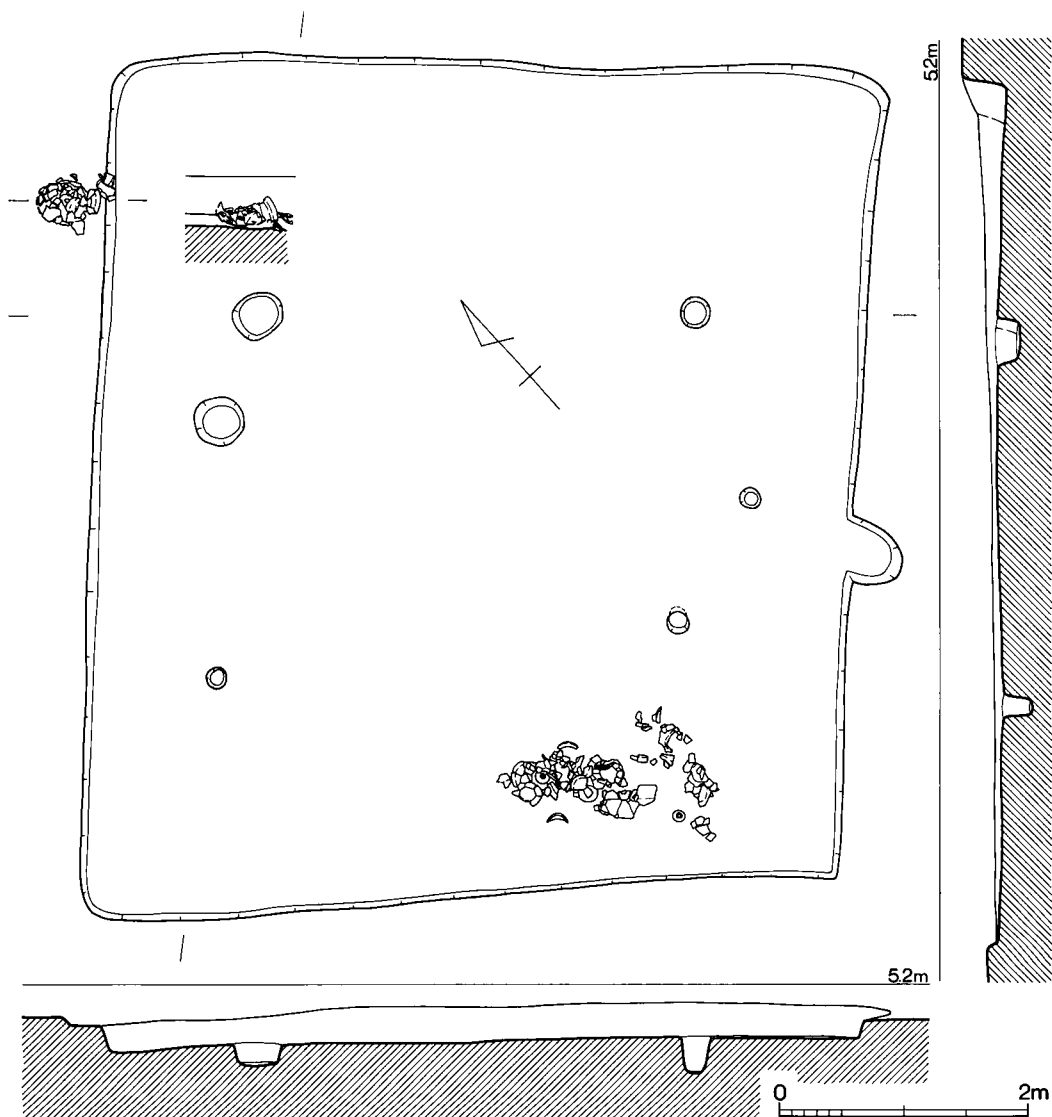
5号住居跡を切って造られているが、住居跡の一部を調査しただけで詳細は不明である。

7号住居跡 (第28図、図版10)

東西水路部分調査地点の西側端部から検出されており、当該住居跡群のうち最も規模が大である。平面形態は方形を呈しており、規模は、長軸6.8m、短軸6.2m、壁高15~21cmを測る。柱穴は台形状に位置する4個が主柱穴と思われる。南西側の壁面近くより土師器が多数まとまって出土している。主な出土遺物は杯、小型丸底壺、椀、小型甕、甕、高杯である。主軸はN41°Eを示す。

8号住居跡 (第29図、図版11)

最南部削平地点の調査により検出された。平面形態は方形を呈しており、規模は長軸4.9m、短軸4.75m、壁高25cmを測る。主柱穴は4個であるが、柱穴の配置は台形状に位置している。柱穴は底径25~48cm、深さは14~20cmと浅い掘り込みである。住居跡のほぼ中央部の30cm×25cm

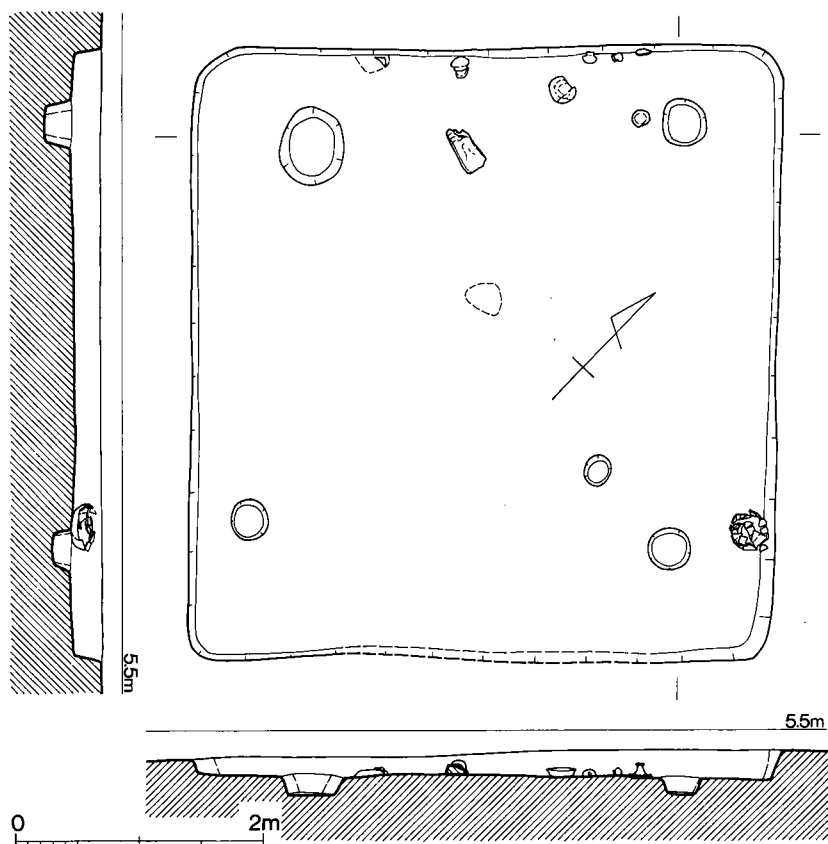


第28図 7号住居跡実測図（1/60）

の楕円形部分は火熱を受けている。住居跡の北西壁ぎわに土器が集中している。主軸はN44°Wを示す。主な出土遺物は土師器の杯、甕、高杯、小型丸底壺、碗である。

9号住居跡（第30図、図版11）

8号住居跡の南西16m程に位置している。平面形態は方形を呈しており、規模は長軸6.05m、短軸5.4m、壁高18～25cmを測る。住居跡内からは10個余りの柱穴が検出されたが、主柱穴は4個と思われる。この主柱穴のうち1個は根詰め石がみられる。住居跡の中央部よりやや北

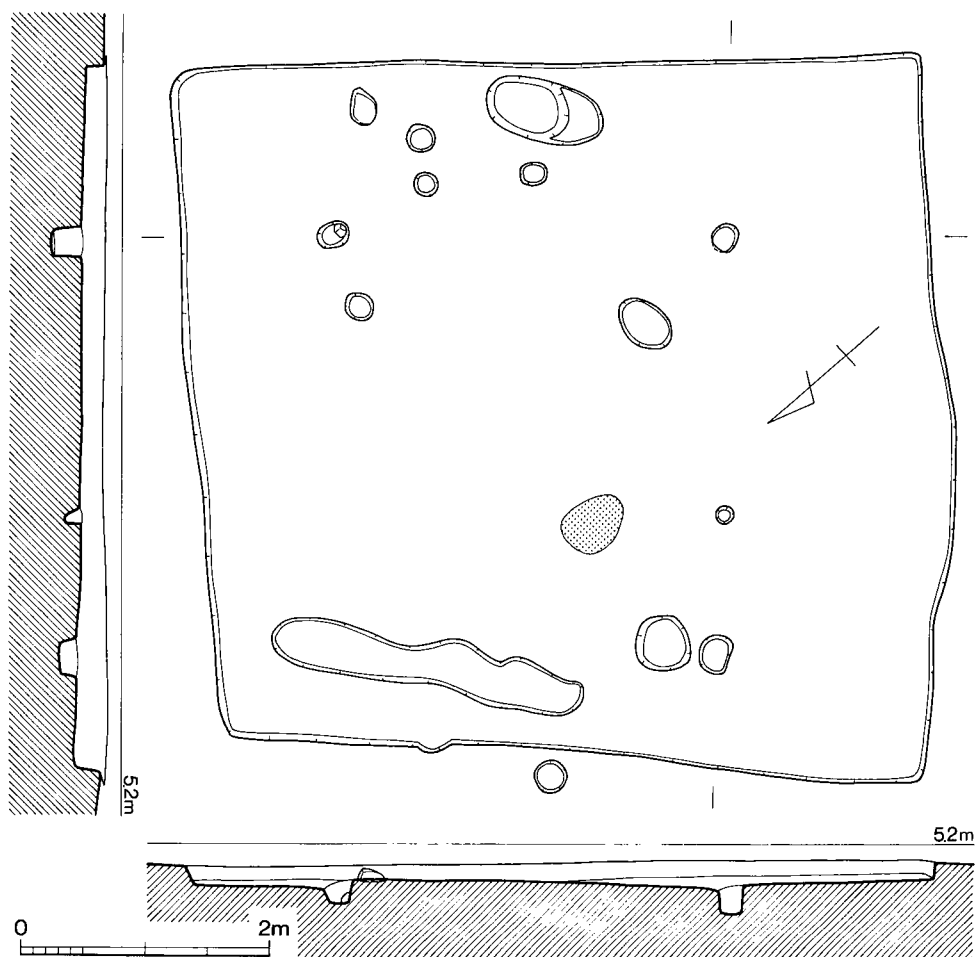


第29図 8号住居跡実測図（1/60）

西に寄った位置に楕円形状で、55cm×45cmの範囲に焼土が認められた。主軸はN38°Eを示す。主な出土遺物は土師器の杯、甕、高杯である。

10号住居跡（第31図、図版11）

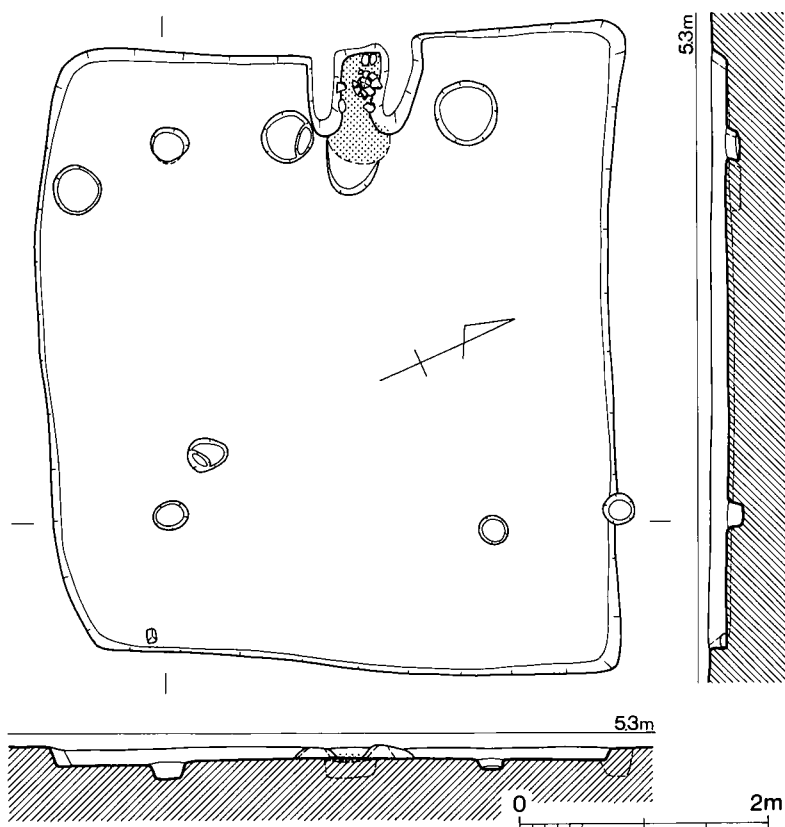
9号住居跡の西方8m程に位置している。平面形態は方形を呈しており、規模は、長軸5.25m、短軸4.6m、壁高15cmを測る。短辺である西側の壁中央部にカマドを付設する。カマドの中ほどには石製支脚が立っており、この周囲にはこの支脚上にのせたと思われる甕の破片が散乱している。カマド直前部には掻き出しによる灰が堆積している。主柱穴は4個であり、心心間の距離は2.65m～3.1mである。柱穴はいずれも深さ15cm足らずの浅いものである。主軸はN65°Wを示す。主な出土遺物は土師器の杯、小型丸底壺、手捏、甕である。



第30図 9号住居跡実測図（1/60）

(3) その他の遺構

最南部削平地点の調査により十字に交差する浅い溝状遺構と、10号住居跡を切る幅の狭い溝1条を検出したが、遺物を伴わないため時期は不明である。また、当該調査地点の中央部分の西端部からは自然地形の段落ちが見られ、奈良時代のもと思われる須恵器、土師器片が多数検出された。したがって現況で保存されるため調査しなかった地点に同時代の生活跡が遺存している事が考えられる。



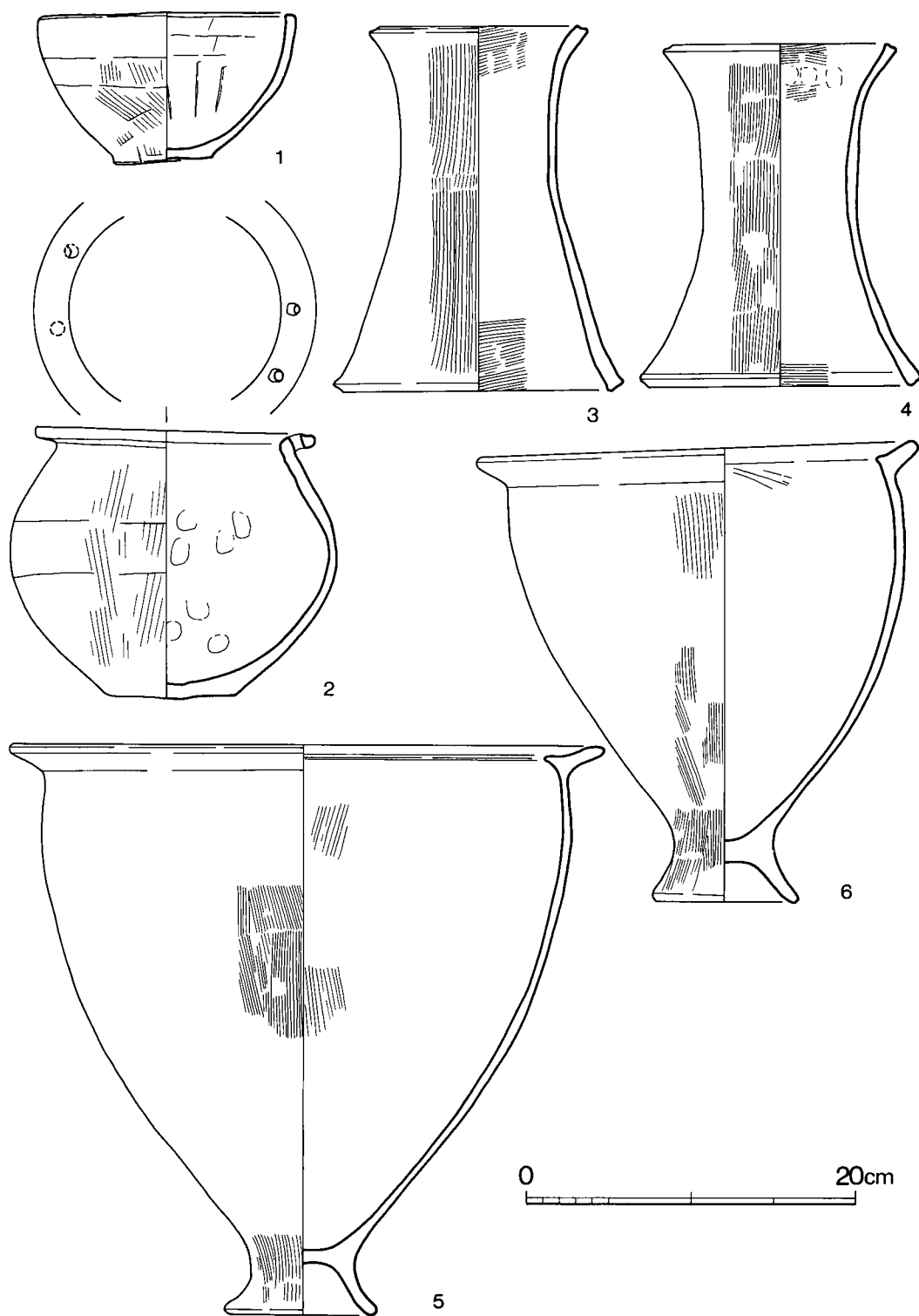
第31図 10号住居跡実測図 (1/60)

遺物

(1) 弥生時代の土器

竪穴遺構出土土器 (第32図、図版12)

出土した器種は鉢、壺、器台、甕である。鉢(1)は平底で、やや器高の高い碗形の形態を呈しており、口縁部は直立気味となる。口縁端部は平坦面を有する。外面は目の粗いハケ目、内面は指頭圧痕が残る。口径15.8cm、器高9.1cm、底径5.1cmを測る。壺(2)は口縁部に2個を1組として対面する位置に円孔を有する広口無頸壺である。口縁部はく字状を呈し、屈曲部内面には稜線が入る。胴部中ほどが最大径となり、19.9cmを測る。外面は目の粗い斜位のハケ目が入り、内面は器壁の剝離が著しいが指頭圧痕が遺存している。口径17.1cm、器高16.5cm、底径8.0cmである。底部と胴上部外面に黒斑が付く。器台(3・4)はいずれも口唇部をわずかに凹ませる特徴をもつ。上部近くにわずかに屈曲面を有するものの全体的には緩やかなカーブ



第32図 竪穴遺構出土土器実測図 (1/4)

を描いている。外面は目の細かい縦方向のハケ目が入り、内面は、上、下端部周辺に横方向のハケ目を入れている。口径13.2～14.0cm、底径16.9～17.5cm、器高20.8～22.1cmを測る。甕（5・6）はいずれも内傾するT字状口縁である。胴部はあまり張らずに底部へと移行している。底部は極端なあげ底である。5は内外面ともハケ目調整し、6は外面のみハケ目調整する。

出土遺物は弥生時代中期後半に比定される。

(2) 古墳時代の土器

1号住居跡出土（第33図、図版13）

出土した器種は須恵器の杯蓋・身・甕・土師器の甕・甗等である。杯蓋（1）は天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面にわずかに段がつく。天井部外面は回転ヘラ削りを施している。杯身（2）は口径に比して器高が低く、扁平な形態を呈し、底部外面は回転ヘラ削り調整を広範囲に施している。立上りは1.1cmで内傾する。1と2はセットにはならない。甕（3）は口縁部を欠損している。胴部の中位よりやや上面の円孔周辺に2条の平行沈線が入る。頸部と円孔の上下の小範囲に櫛描き波状文が入る。底部はヘラ削り調整後、ナデている。甕（4）は短い大きく外反する口縁部を有する。胴部外面は斜め方向のハケ目、内面は横・斜め方向のヘラ削り調整である。甗（5）は口縁部をわずかに外反させており、口唇部は平坦面を有する。外面はハケ目、内面はヘラ削り調整である。

出土した土器は6世紀後半に比定される。

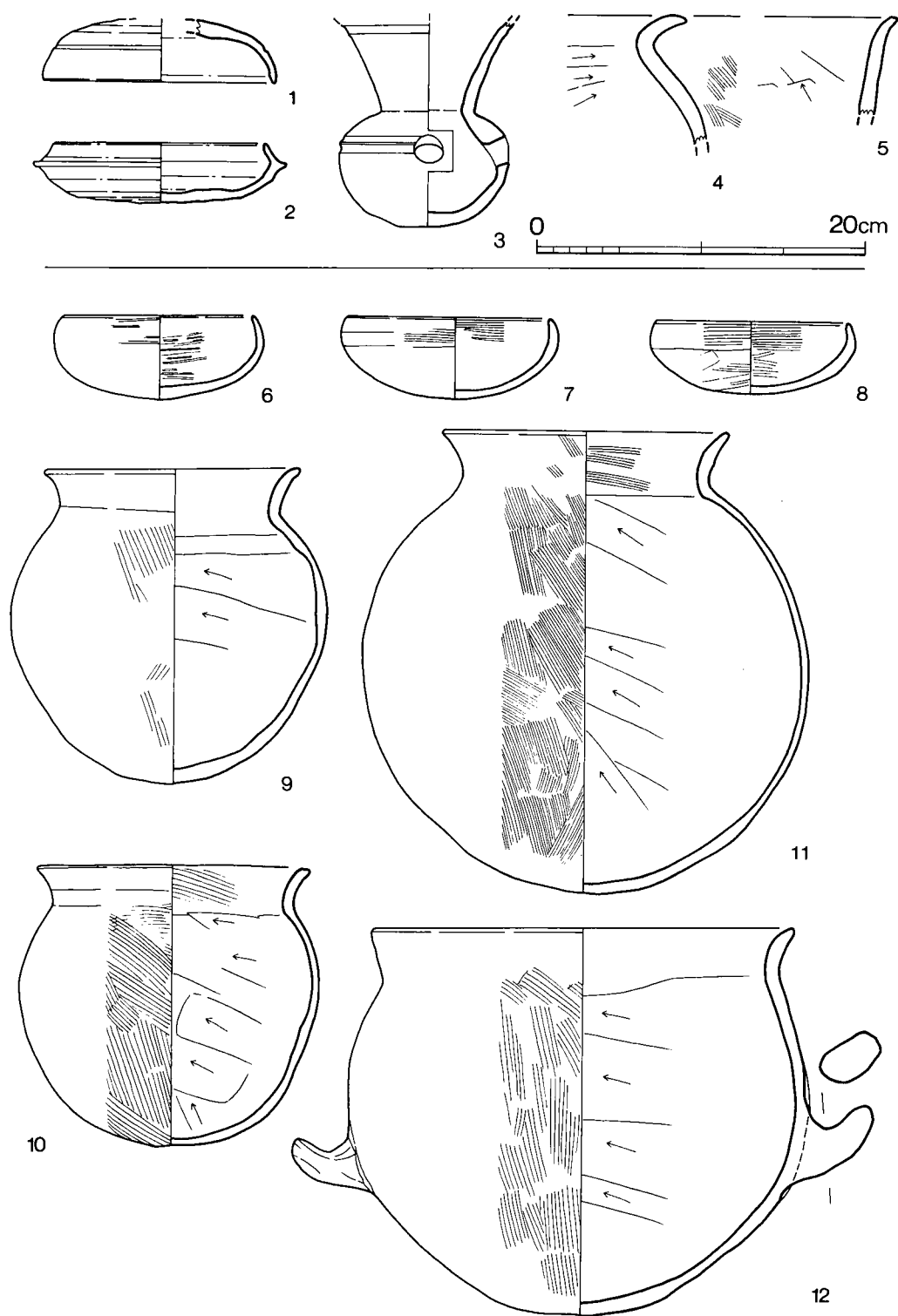
2号住居跡出土土器（第34図）

出土した土器はいずれも土師器であり、器種は杯、小型丸底壺、甕である。杯（1～3）に2種類が見られ、1・2は内傾する立上りをもつ。1は内面にヘラ磨きを、外面はヘラ削りを施している。2は外面に黒塗りが部分的に残っている。小型丸底壺（4）は口縁部と底部を欠損する。胴部外面に目の細かいハケ目が入る。甕（5～12）は外反する短い頸部のものが多数であるが、9の様にく字状に外反する長めのものもある。10・11は口縁端部を外湾させる。8・10は口縁部内面に横ハケ目を施している。いずれも胴部外面は斜め方向ハケ目を施し、内面はヘラ削り調整である。12は甗とも考えられる。

出土した土器は6世紀後半代に比定される。

4号住居跡出土土器（第34図、図版13）

出土した器種は杯、高杯、甕であり、図示していないが小片の試料として須恵器杯、甕片が出土している。杯（1～4）は口縁部の形態に内湾するもの（13）、体部からゆるやかに移行するもの（14・15）、短く外反するもの（16）の3種類が見られる。13・14は内外面ともヘラ磨きするが15は不明である。16は内外面ともヘラ磨き調整であり、底部を穿孔している。高杯（17）は杯部を欠損し、脚部は丈が短い。甕（18・19）の口縁部の形態は、18はく字状に外反



第33図 1号・5号住居跡出土土器実測図(1/4)

し、19は頸基部は直立させ、途中から外反する。18は胴部外面はハケ目上をナデており、内面は横方向のヘラ削りを施している。

出土した須恵器片などより、6世紀後半代に比定する。

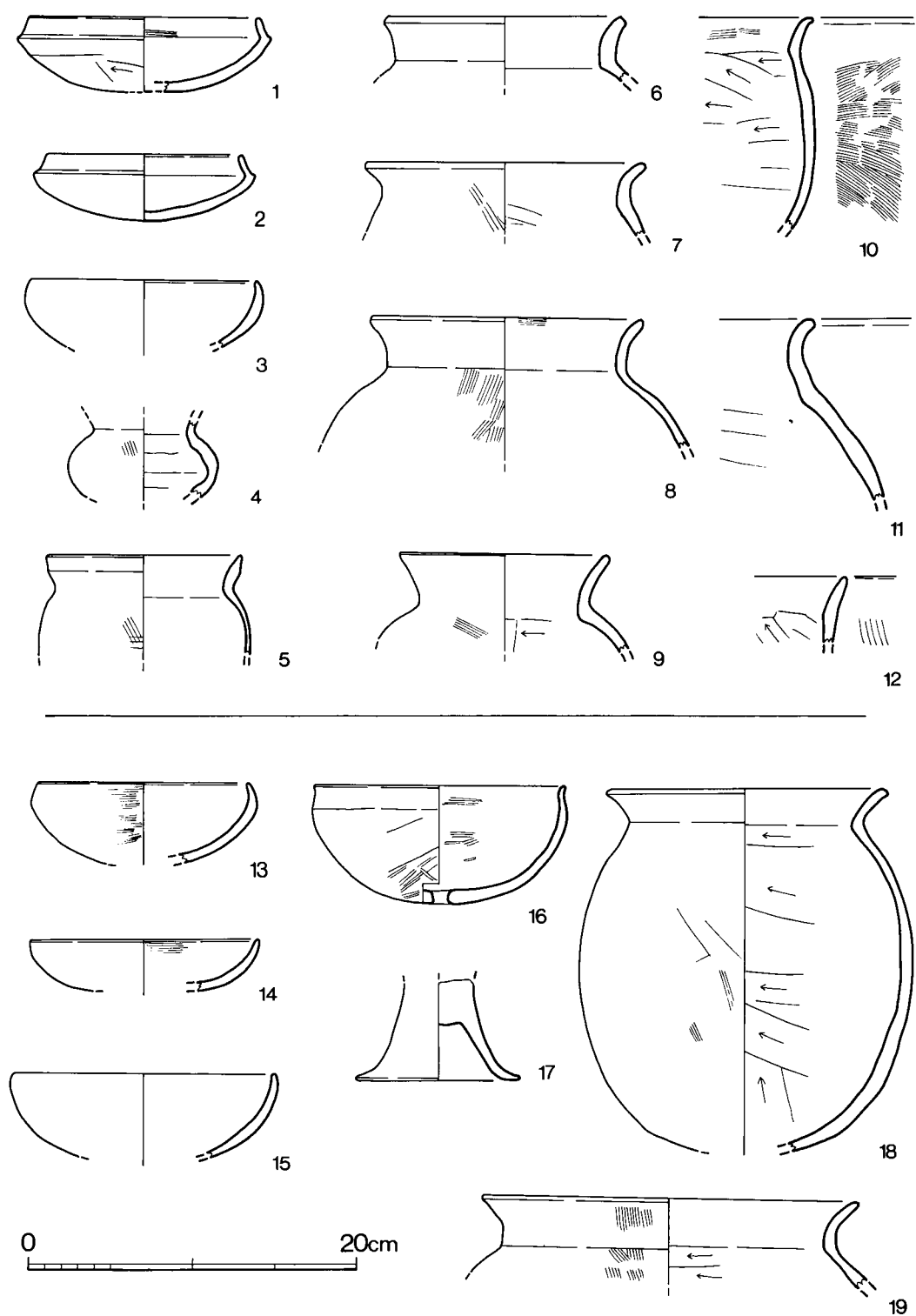
5号住居跡出土土器（第33図、図版13）

出土した器種は杯、壺、把手付き甕である。杯（6～8）はいづれも口縁部を内湾しており、端部は丸くつくられている。6は底部外面をヘラ削り後にヘラ磨きし、内面を含めたそれ以外の部分はヘラ磨き調整する、7は底部外面をヘラ削りし、それ以外はヘラ磨きする。8は6と同じ調整である。6～8は口径11.6～12.4cm、器高4.5～5.0cmである。壺は2種類の大きさが見られる。口縁部は外湾ぎみのく字状口縁であり、胴部は球状を呈する。10、11は口縁部内面に横方向のハケ目調整を施し、3個体とも胴部外面は斜め方向のハケ目、内面は左上方へ向ってヘラ削りを施している、11は住居跡のカマド内から検出されており、口縁部内外面に煤が付着している。10も外面に煤が付着している。把手付甕（12）の口縁部は、く字状を呈し、外湾ぎみに開き、内面の頸基部と胴部の境は鈍く稜線が入る。把手は隅丸長方形の断面形態を呈し、胴部中位に貼付される。胴部外面はタテ方向のハケ目が入り、内面は左上方へのヘラ削り調整である。口径25.6cm、器高23.7cmを測る。

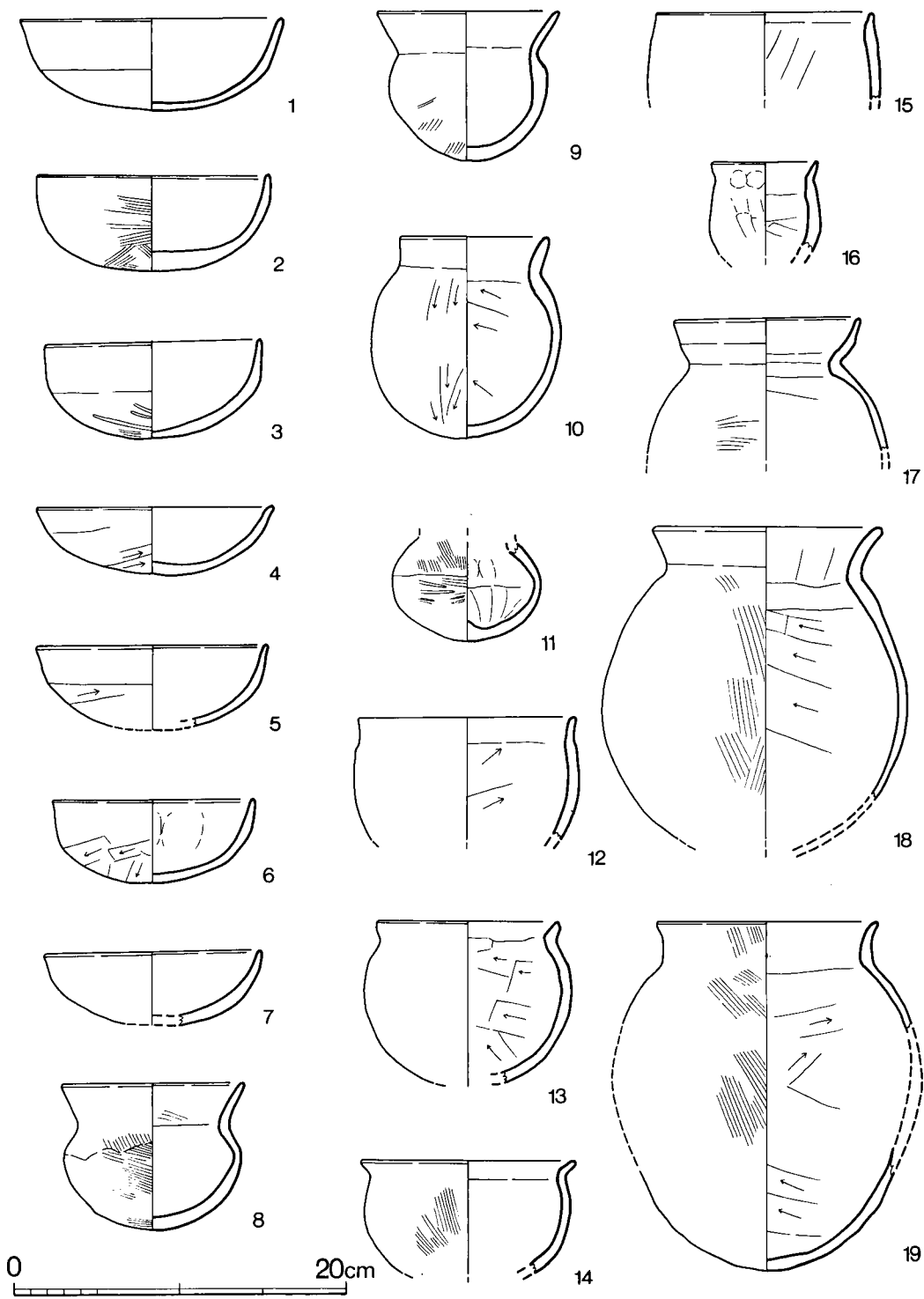
4号住居跡に切られており、これよりは若干先行するものである。

7号住居跡出土土器（第35～37図、図版14～16）

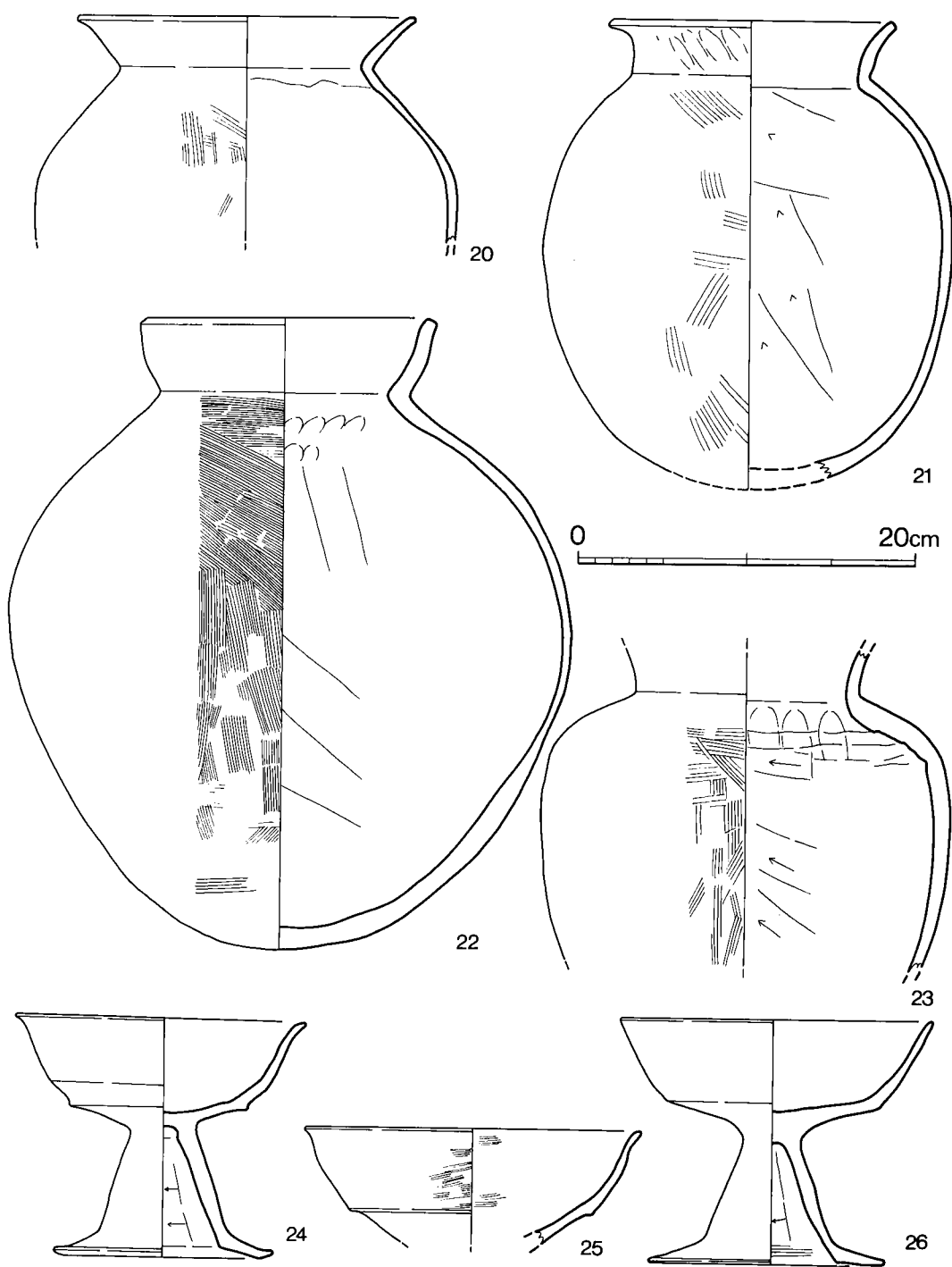
出土した器種は杯、小型丸底壺、碗、小型甕、甕、高杯である。杯（1～7）は口径に比して器高が高いもの（2・3・6）と低いものがある。口縁部はやや直立気味と外反気味との2種類が見られる。器表が磨減して調整法が不明のものもあるが、2は体部外面をハケ目、3～7はヘラ削りを施す。内面はナデ調整であり、6は指頭圧痕が残る。小型丸底壺（18～11）の口縁部はく字状に外反して、胴部よりも外側へ開くものと、短く外反するものとがみられる。9は頸基部と胴部の境は凹湾する。8は口縁部内面は横方向のハケ目が入り、胴部外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。9も同一の調整法である。10の胴部は外面は下方へ、内面は左上方へのヘラ削りを施している。11は内面に指頭圧痕を残している。碗（12～16）は直立気味の口縁部のもの、短いが鋭く外反する口縁部のものがみられる。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削り調整を施しており、16は頸基部に指頭圧痕を残す。17は小型甕としたが小型丸底壺と同一視して良いのかも知れない。口縁部はく字状に外反し、中ほどから直立気味となり、この部分に鈍いが稜線が入る。胴部外面はハケ目調整である。甕（18～23）の口縁部の形態はく字状に外湾するもの（18・19・21）と薄手造りでく字状に大きく外反するもの（20）、口縁部を肥厚させて内湾気味に外反するもの（22）がある。18～21は胴部外面に目の粗いハケ目を施し、内面はヘラ削りする。22は胴部外面に目の細かいハケ目を施し、底部近くはハケ目をナデで消している。口径16.5cm、器高37.5cmを測る。23は内面の頸基部直下に指頭圧痕が著しい。外面は



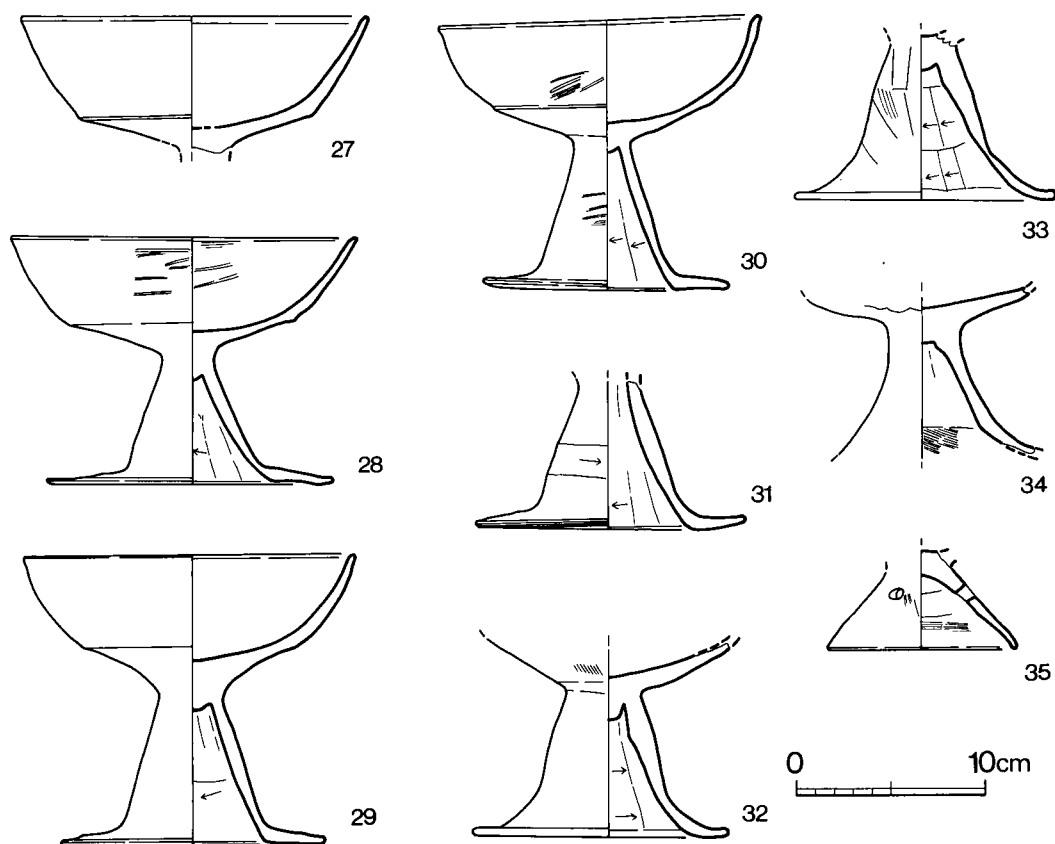
第34図 2号・4号住居跡出土土器実測図(1/4)



第35图 7号住居跡出土土器実測図(1/4)



第36図 7号住居跡出土土器実測図(1/4)



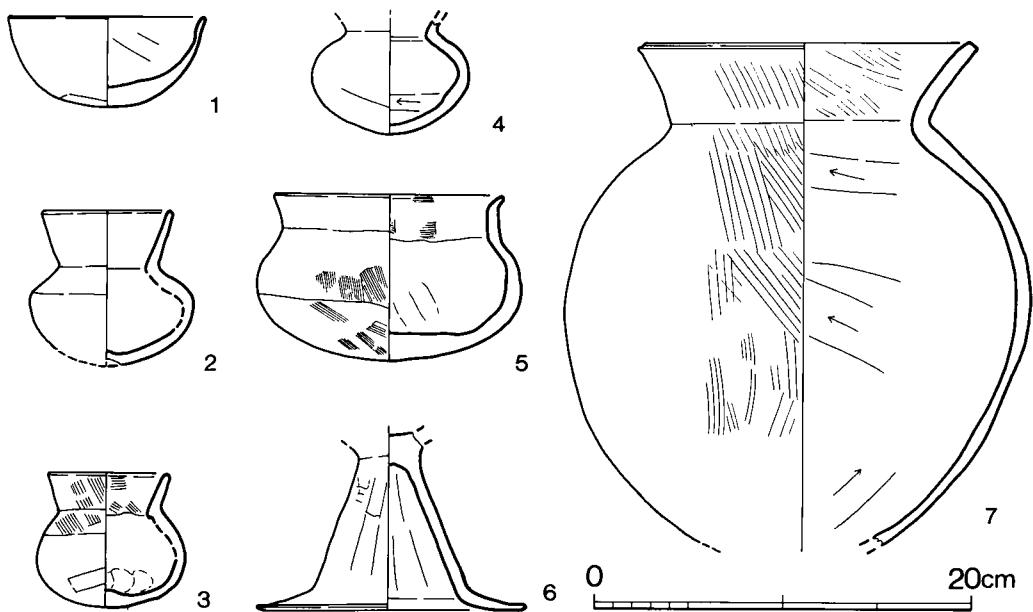
第37図 7号住居跡出土土器実測図(1/4)

ハケ目、内面はヘラ削り調整である。胴部外面には煤が付着している。高杯(24~35)は4種類に分類することができる。24・25は杯部の底部と体部の境にやや鋭い屈曲がつき、口縁部先端を外反させる。脚裾部は鋭く屈曲するが、脚端部のみが地につく。脚柱部の中央がわずかにふくらむ形態である。26~31は杯部の底部と体部の境の屈曲が小さくなり、口縁先端部は外反せず丸くおさめている。脚裾部は鋭く屈曲し、屈曲面のすべてが地につく。32・33は脚裾部に鋭い屈曲をもたないものである。35は小型高杯の脚部であり、脚はハ字状に開く。脚部上面に3個の円孔を有する。25・28・30の外面はヘラ磨きの後ナデている。31・33は脚部外面をヘラ削りする。大半の脚部内面はヘラ削りしている。

出土した土器は5世紀前葉に比定される。

8号住居跡出土土器(第38図、図版16)

出土した器種は杯、小型丸底壺、椀、高杯、甕である。杯(1)は口縁部をわずかに外反させる。底部は器壁が厚く、外面はヘラ削りしている。内面は布状のものをういたナデ調整である。口径10.5cm、器高4.8cmである。2~4の小型丸底壺は口縁部を緩かに外反させる。3は



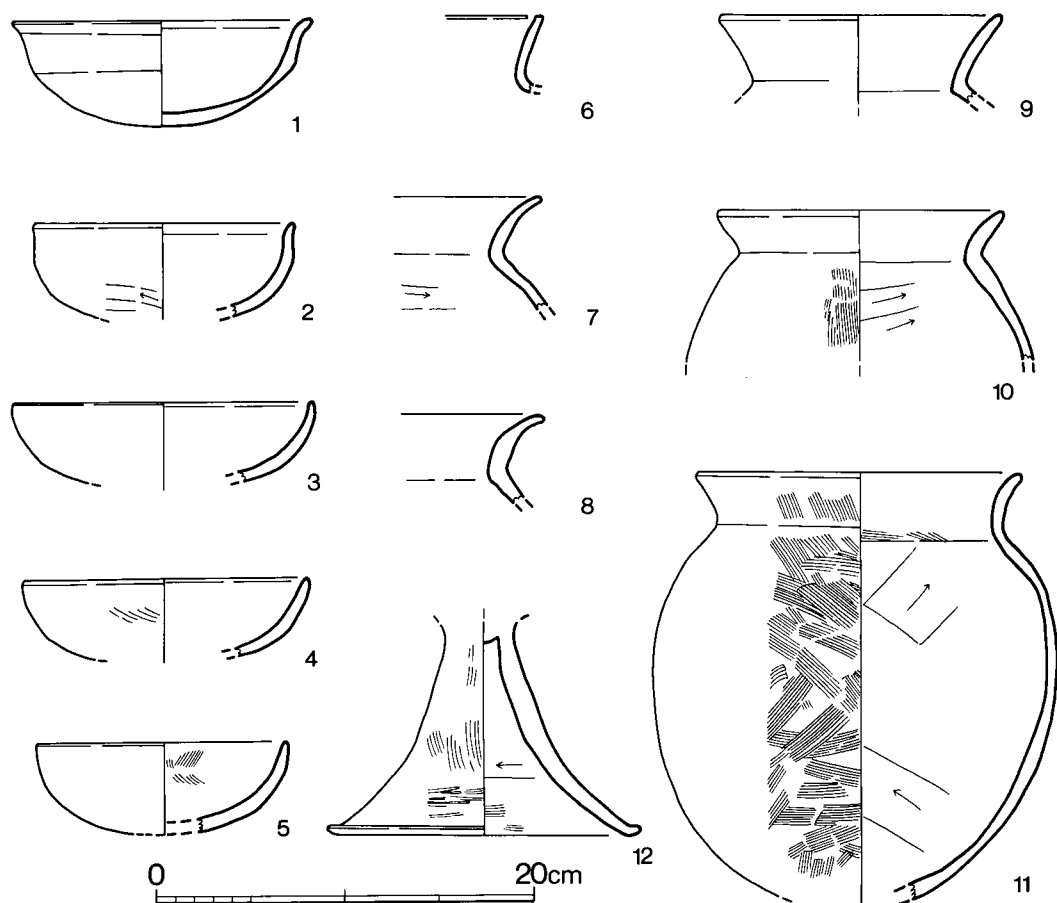
第38図 8号住居跡出土土器実測図(1/4)

口縁部内面に横方向のハケ目が入り、内底部は指頭圧痕が著しく残る。外面は口縁部と胴上部はハケ目、以下はヘラ削りする。碗(5)の口縁部は直立し、端部のみを外反させる。胴部は扁球形であり、外面はヘラ削り上をハケ目調整している。口縁部内面は横ハケ目、以下はナデ調整である、頸基部内面に粘土椀の接合痕がみられる。高杯(6)は杯部を欠損する。脚裾部分は鋭く屈曲させている。内外面ともヘラ削り調整である。甕(7)の口縁部はく字状に外反し、口唇部をわずかにくぼませている。外面は口縁部以下底部近くまで目の粗いハケ目を施しており、底部周辺はハケ目をナデ消している。内面は口縁部にはハケ目、胴部はヘラ削りを施している。

出土した土器は5世紀前葉に比定される。

9号住居跡出土土器(第39図、図版17)

出土した器種は杯、甕、高杯である。杯の口縁部は短く外反させるもの(1・2)と直立気味のもの(3～5)とがある。器表が磨滅していて、調整法が明瞭でないが、外面下半部はヘラ削りし、内面にハケ目を施すものもある。甕(6～11)の口縁部は、く字状を呈して、直線的に外反するもの(6・9)と、口縁部の長さに長・短はあるが外湾気味に開くものとがみられる。6は口縁端部を内側へ若干肥厚させている。11は口縁部の内外面ともハケ目調整し、張りの強い胴部外面は目の細かいハケ目、内面はヘラ削り調整する。高杯(12)は脚部のみであり、脚部は八字状に開く。脚裾部付近の内外面は粗雑な横方向ヘラ磨きを行う。脚柱上半部の外面はハケ目調整後にナデを施す。



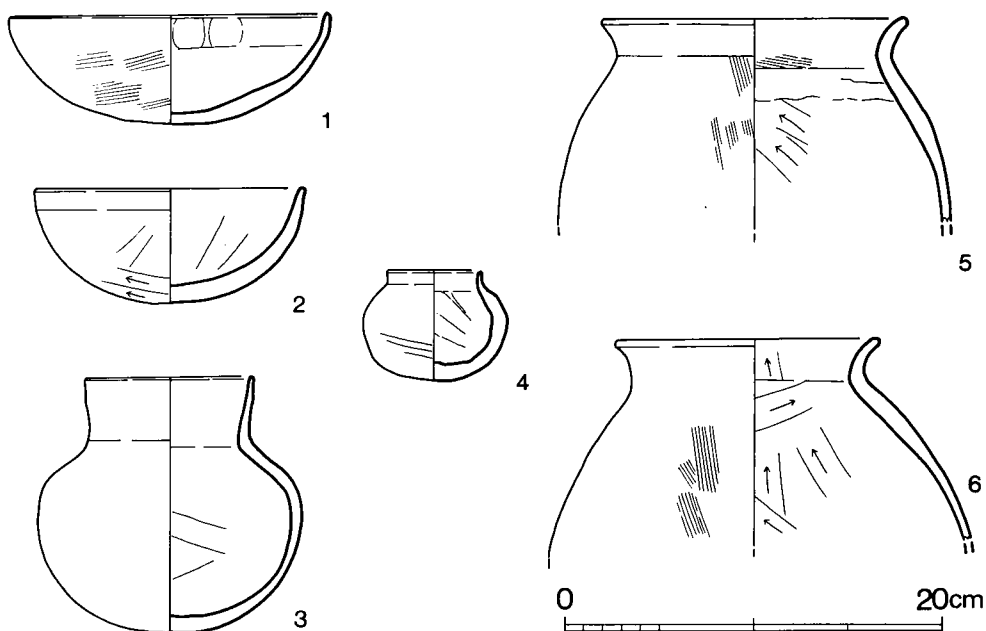
第39図 9号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土した土器より住居跡の年代は、7号住居跡に近い時期と思われる。

10号住居跡出土土器（第40図、図版17）

出土した器種は、杯、小型丸底壺、手捏、甕である。杯（1・2）は口縁部が直立するものと、わずかに外反するものがある。1は外面をハケ目調整後、部分的にナデしており、口縁部内面は指頭圧痕が残る。2は外面をヘラ削りし、口縁部直下にヘラ磨きを施している。内面は布状の器具を用いたナデを行っている。小型丸底壺（3）は直立気味の口縁部を有し、胴部内外面はヘラ削りにより薄手に仕上げられている。手捏（4）は短く直立する口縁部を有し、端部は丸い。器壁は厚手であり、内面は指頭圧痕が顕著にみられる。甕（5・6）の口縁部は外湾気味のく字状を呈する。胴部外面は斜位のハケ目を施し、内面はヘラ削りを行う。5は口縁部内面をハケ目調整し、横ナデしている。

出土した土器より住居跡の年代は、5号住居跡とほぼ同時期と思われる。



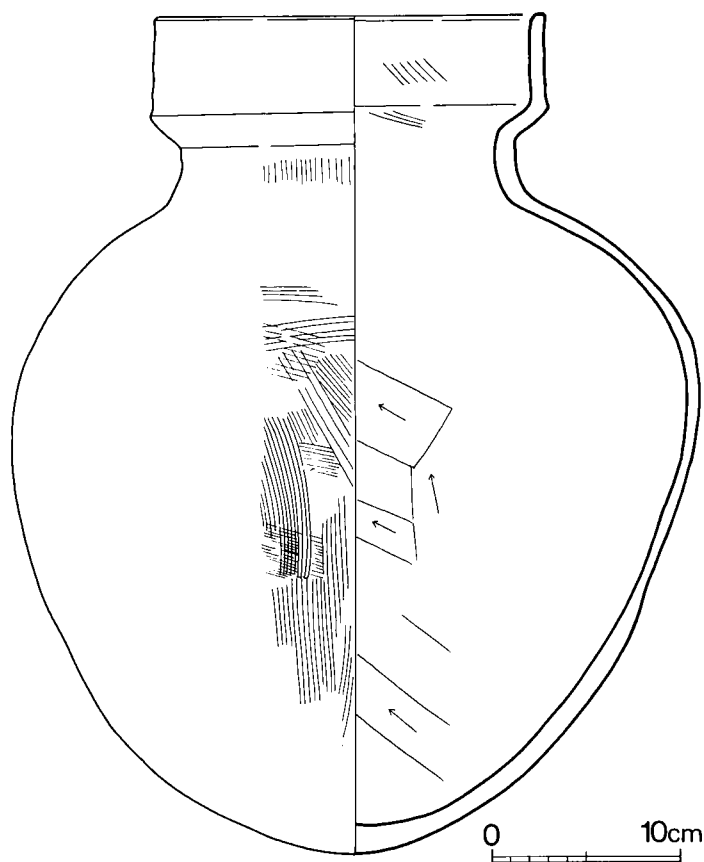
第40図 10号住居跡出土土器実測図（1/4）

溝状遺構出土土器（第41図、図版17）

7号住居跡の西側の浅い溝状の遺構から出土しており、7号住居跡に切られるいる。複合口縁壺であり、口縁上半部を5cm程直立させる。胴部はふくらみをもち、胴部最大径は中ほどよりやや上方に位置する。頸基部外面は縦方向のハケ目調整後ナデている。胴部は横位、斜位方向にハケ目調整し、内面はヘラ削りする。口縁部内面は斜位の目の粗いハケ目をナデている。口径20.3cm、器高44.6cm、胴部最大径36cmを測る。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含む。

出土した土器は井上裕弘氏編年の柏田Ⅲ式に比定されるものと思われ、^{註1}畿内の布留式の古期に併行すると考えられる。

註1 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集下 1977



第41図 溝状遺構出土土器実測図(1/4)

5. お わ り に

瀬高町内の圃場整備事業は北部・東部・南部地と3地区あり、現在まで、瀬高北部地区では、権現塚北、南遺跡の調査により、標高9.5m程の低位丘陵上から縄文時代後期～晩期の住居跡、埋め甕、炉跡、ピット群を検出し、多数の土器、石器類を出土した^{註1}。この縄文時代の生活層は現表土から60～110cm程下位に位置する。さらに上層部には弥生時代中期初頭から後期前半までの住居跡、土壇群、甕棺墓・石棺墓群が存在する。この弥生時代の層と同一レベルか、わずかに上層から(表土からは30cm程の深さ)は、古墳時代の住居跡や奈良時代の溝、土壇などが発見されている。

権現塚遺跡はその大部分が畑地として保存されたが、今回報告する権現塚南遺跡の調査は遺跡南寄りの地点で、幅15m、長さ70mの水路掘削によるトレンチ内の調査であり、弥生時代中

期初頭から前半にかけての住居跡3軒、土壇7基、竪穴状遺構1基が検出された。これと同一レベルで古墳時代後期のカマドを付設した住居跡3軒が発掘区東側で検出された。カマドはいずれも西壁に付設されており、支脚として石、高杯の脚部を用いている。奈良時代の遺構としては、弧状を呈して南北方向に延びる幅4～5mの溝が検出されたが、限られた範囲の調査のため性格は不明である。

弥生時代中期初頭と思われる竪穴状遺構からは、床面に、拳大の黒曜石原石が敷き詰め様な状態で検出された。この原石は一部には打撃を加えた様なものもみられる。周辺には石くずは見られないため、単なる保管場所であったと思われる。

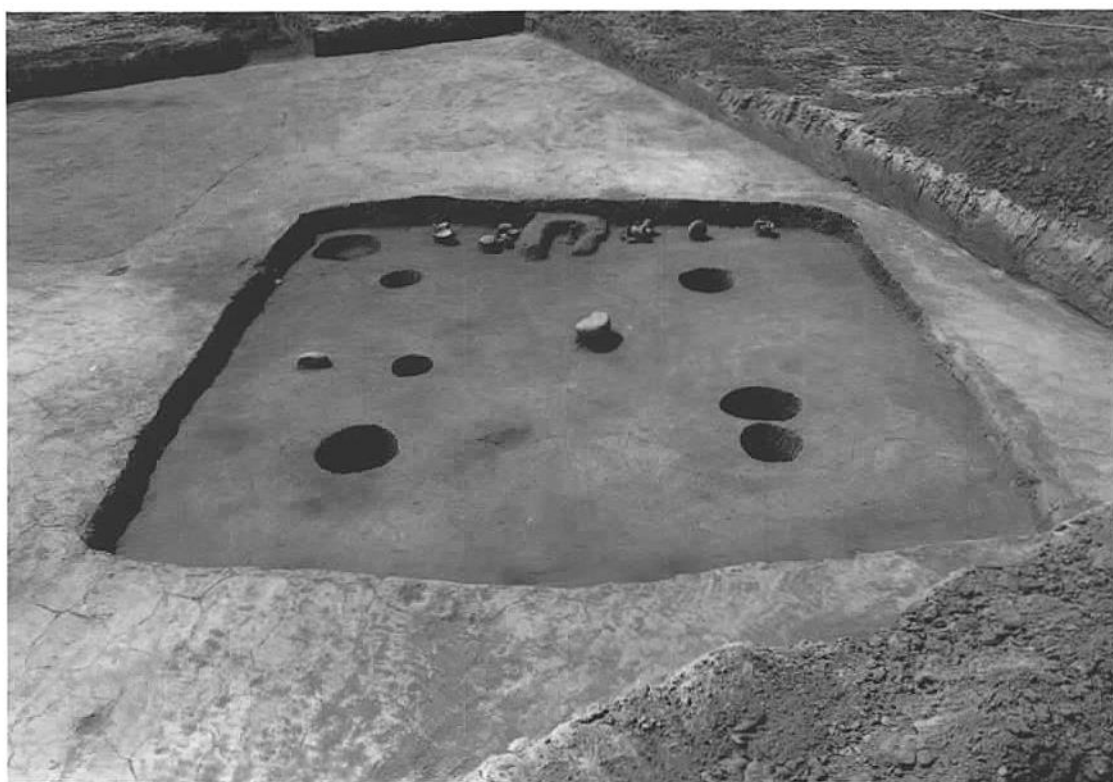
瀬高東部地区圃場整備事業に伴う文化財の調査は昭和59年度から開始され、現在までに大江・真木・松延・上枇杷・藤ノ尾の5遺跡が調査された。まず、大江遺跡であるが、これは、昭和31年から32年にかけて地下げ工事に伴って調査した鉾田遺跡に南接しており、大江北遺跡は、広義の鉾田遺跡に含まれるものである。鉾田遺跡は東西200m、南北500mの広い範囲に弥生時代から中世にかけての遺構が発見されたが未調査のまま消滅したものもあると聞く。この鉾田遺跡に連続する大江遺跡の南端部を大江南遺跡と呼称している。当該地は、前述の土取り工事により削平され、遺跡は標高5m程で、周囲の田面よりはわずかに高い低位丘陵上に所在する。現況は一様に平坦面をなすが、遺跡所在地は自然堤防止に営まれたものであり、東側を矢部川の一支流が流れていた事が判った。ここからは、弥生時代中期後半の竪穴遺構、古墳時代中期の7～9号住居跡、後期の1～6号、10号住居跡の総数10軒の竪穴式住居跡が検出された。なかでも、5世紀前葉頃に比定される7～9号住居跡と、それに伴う遺物の出土は、当該地の大型円墳、前方後円墳の出現の契機を考える上で貴重な資料となる。当該地の坂田と藤ノ尾には、前述の如く、5世紀代の築造と思われる直径45mの権現塚古墳、全長約55mの車塚前方後円墳が出現する。車塚からは2面ないし3面の鏡が出土したと言われているが詳しくはわからず、両墳とも内部主体、出土品については不明である。

今後は、圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査が車塚周辺に中心を移すため、車塚とそれを取りまく周辺部から、大江南遺跡7～9号住居跡と同時代の遺跡が検出される事と思われ、車塚を頂点とした当時の社会の実態解明に少しでも近づける事を期待する。

註1 川述昭人編『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書 第3集 1985 瀬高町教育委員会



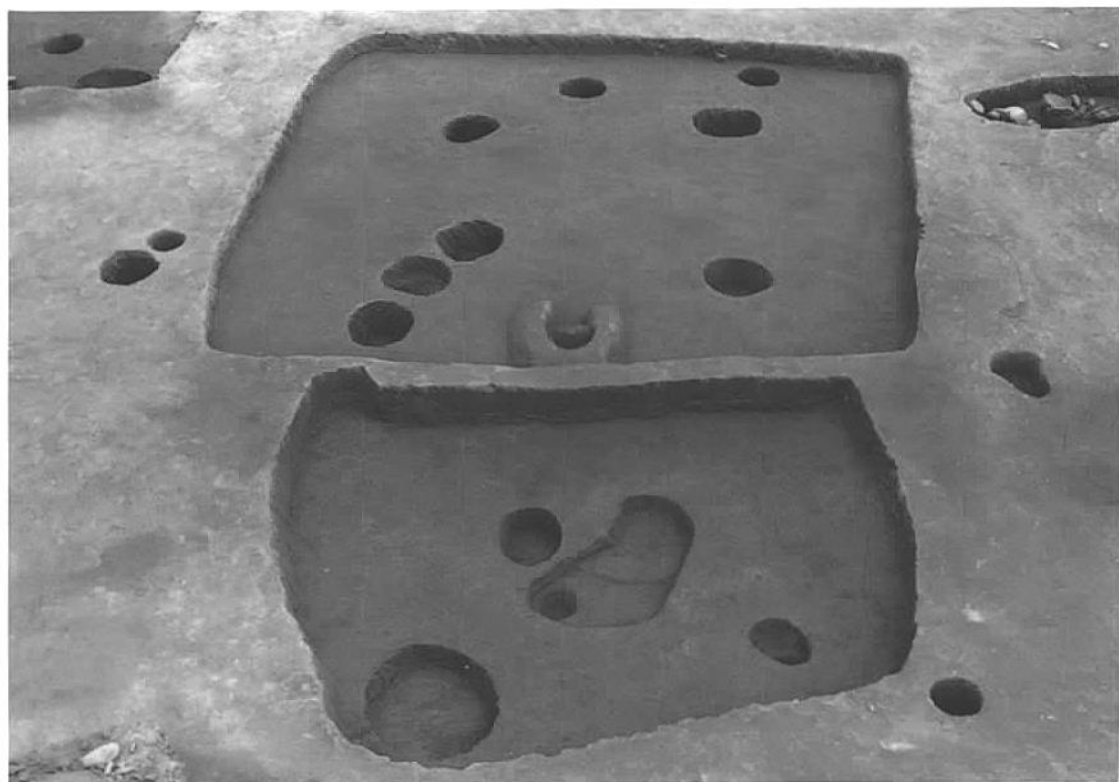
権現塚南遺跡 遺構出土状態（西から）



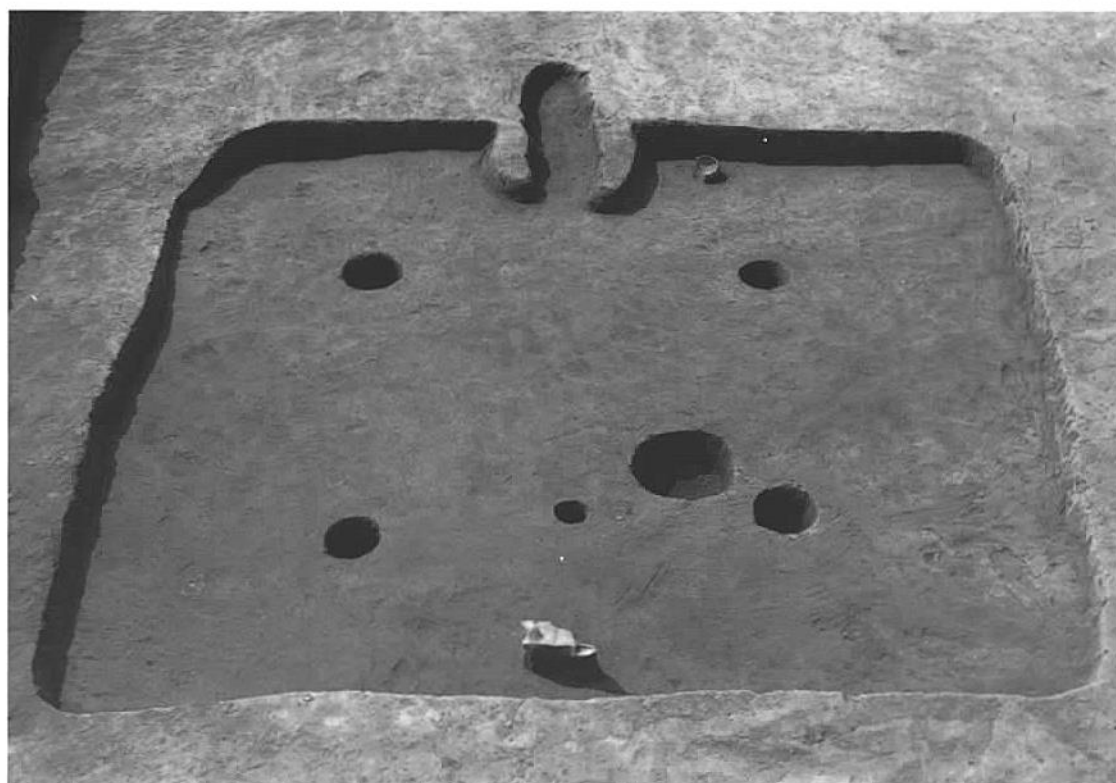
権現塚南遺跡 1号住居跡（東から）



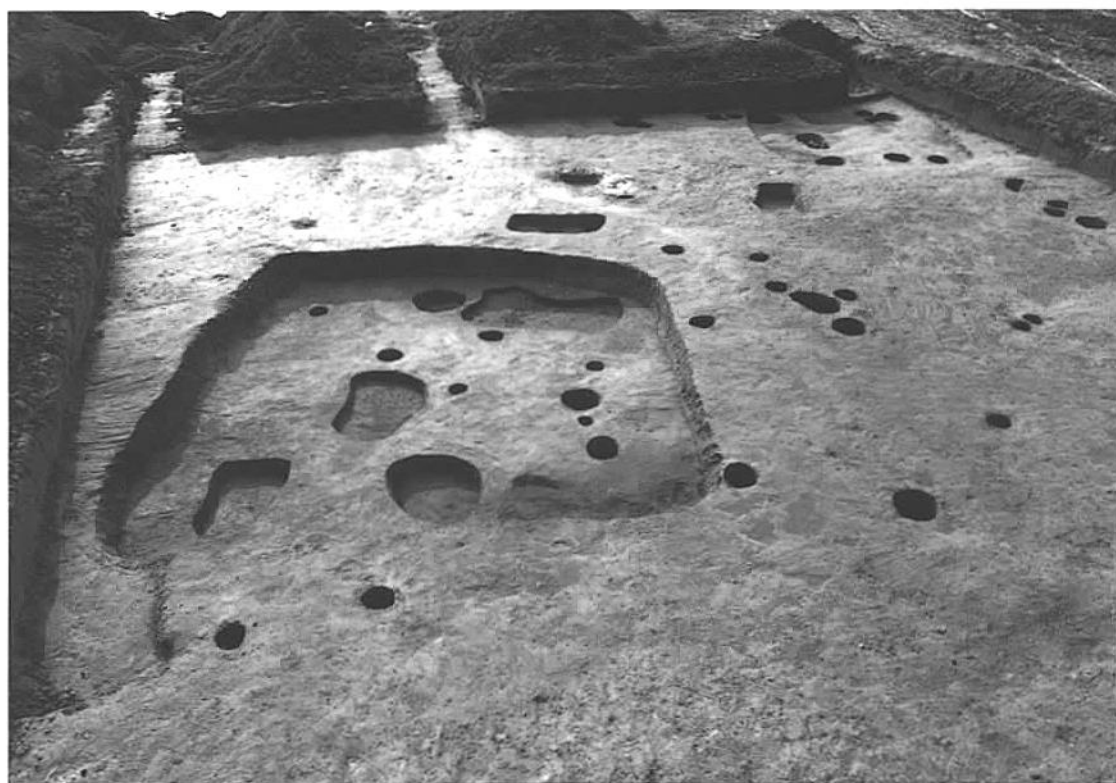
権現塚南遺跡 1号住居跡 カマド



権現塚南遺跡 2・3号住居跡（西から）



権現塚南遺跡 5号住居跡（東から）



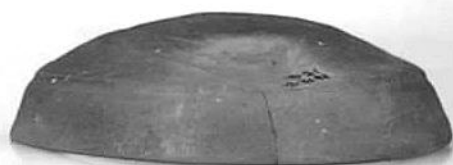
権現塚南遺跡 7号（右上）・8号（左下）住居跡（東から）



権現塚南遺跡 7号土坑



権現塚南遺跡 5号土坑



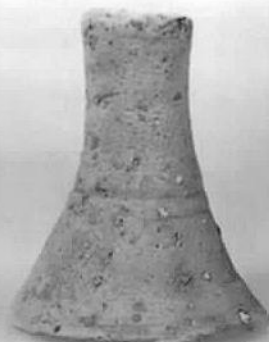
住1-1



住5-4



住1-5



住5-11



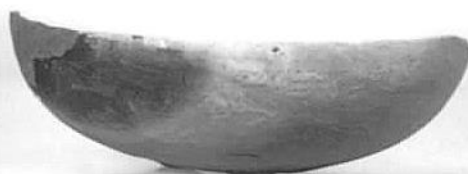
住1-4



住5-13



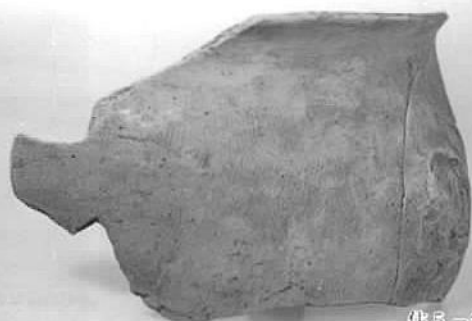
住1-6



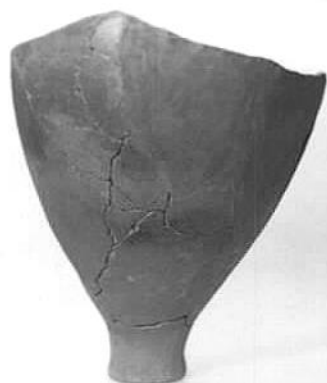
住5-15



住2-1



住5-20



土1-2



土4-3



土3-1



土4-5



土3-3



土4-6



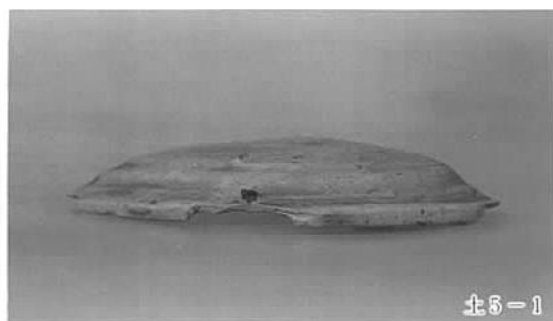
土3-4



土4-7



土 6-36



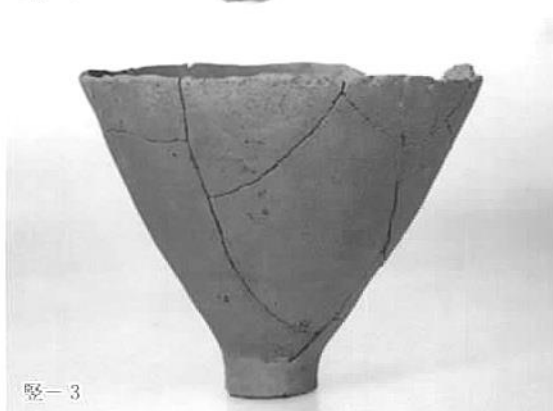
土 5-1



豎-2



土 5-3



豎-3



土 5-4



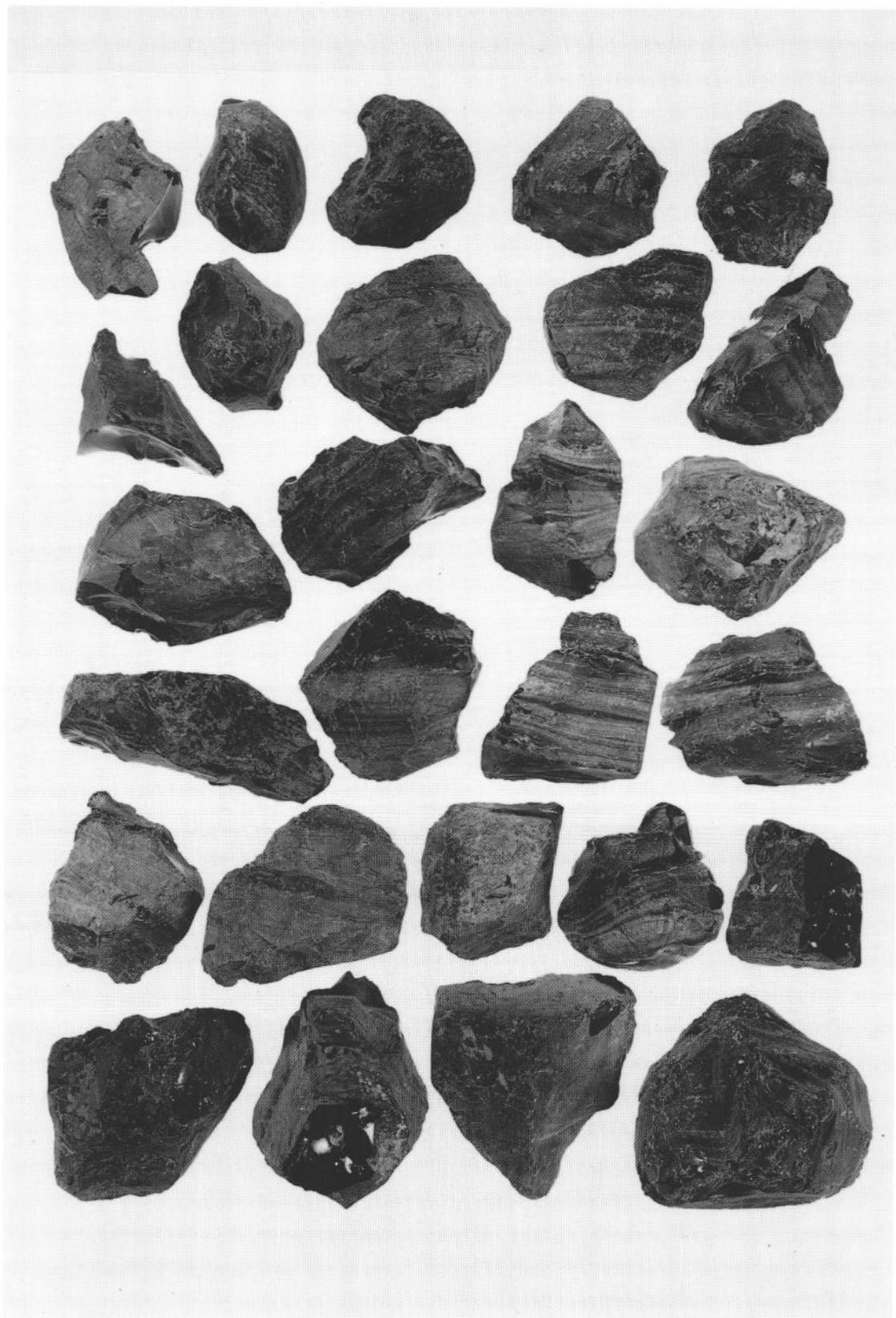
土 5-7



豎



土 5-9



権現塚南遺跡 竪穴状遺構出土黒曜石



大江南遺跡 上 2・3号住居跡、中 4号住居跡、下 4～6住居跡



大江南遺跡 7号住居跡 (南から)



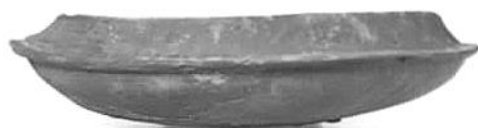
大江南遺跡 7号住居跡土器出土状態



大江南遺跡 上 8号住居跡、中 9号住居跡、下 10号住居跡



大江南遺跡 竪穴状遺構出土土器



住1-2



住1-3



住5-12



住4-16



住5-8



住5-11



住5-9



住5-10



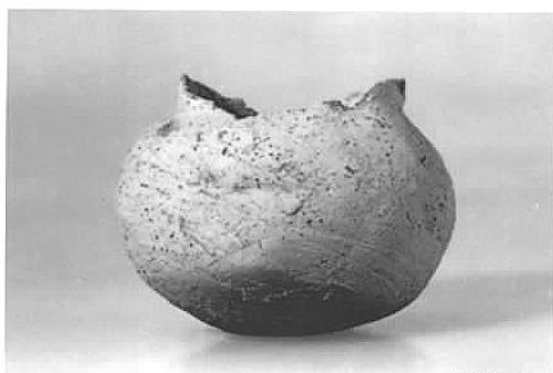


大江南遺跡 7号住居跡出土土器





住9-5



住10-4



住10-1



住10-6



住10-2



住10-3



溝状遺構

Ⅲ 上長延 1 ～ 3 号墳の調査

1. は じ め に

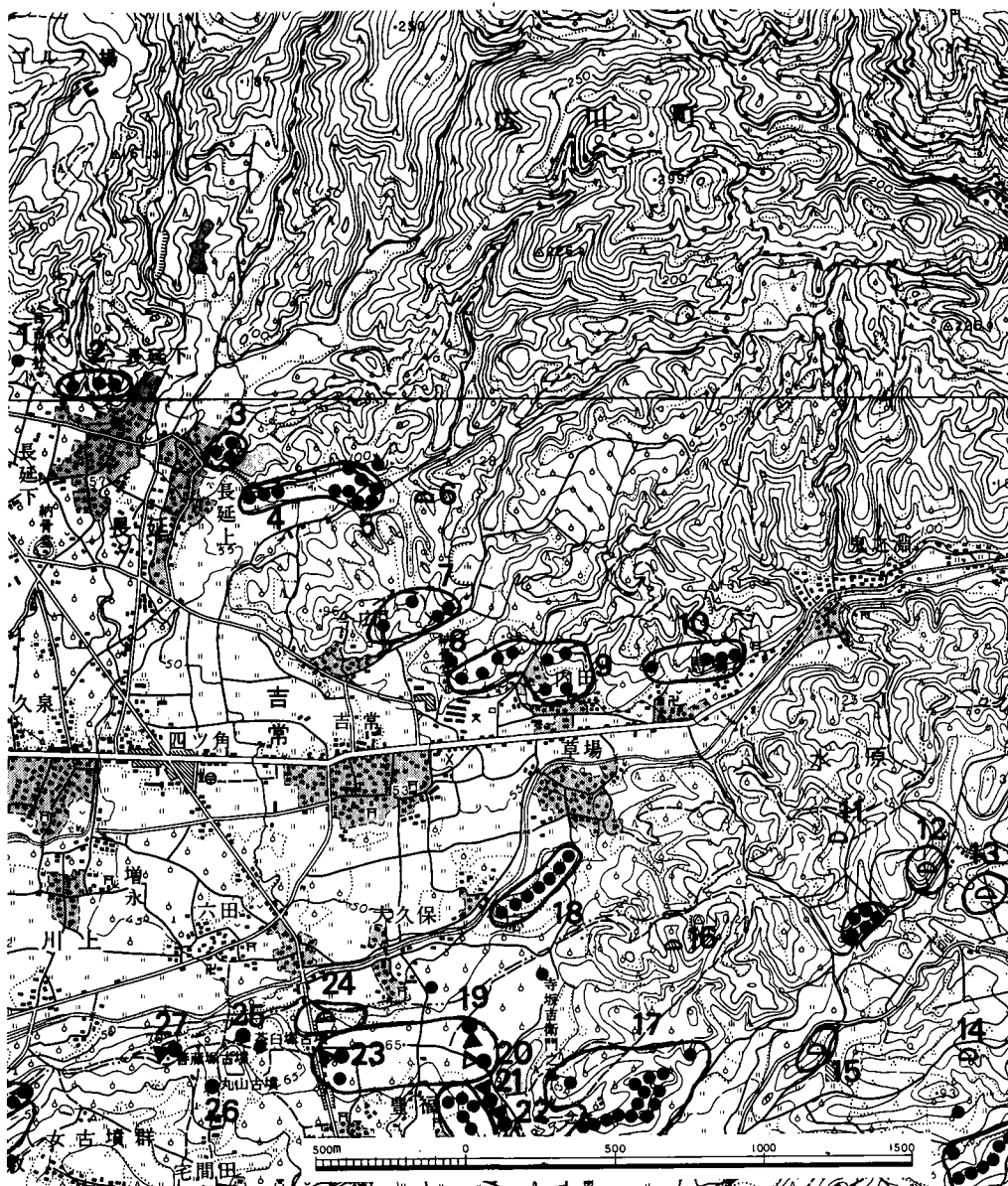
広川町長延の引井谷地区集団農区総合整備事業の実施に先立って分布調査をし、試堀の必要があると判断されたため、昭和58年11月に実施した。この試堀調査で59年度事業実施予定地区には少なくとも3基の古墳が存在することがわかった。この試堀調査の終了直後に、筑後考古学研究会会員の江口寿高氏より、当該事業地区の現工事現場で石室が発見されたとの連絡を頂いた。翌日、現地調査を行った所、山裾を通っている幅2m程の農道部分の、法面をバックフォーで堀削中に石室が検出されて、既に半壊状態になっていた。このため、工事の中断を依頼して、バックフォーによる遺構検出作業を行い、古墳3基を発見し、直ちに発掘調査に取りかかった。古墳はいずれも墳丘を既に消失しており、上半部分を破壊された横穴式石室2基と、床面しか遺存しない横穴式石室1基である。発掘調査は昭和58年11月10日～12月1日の間で実施した。調査は、南筑後教育事務所技術主査川述昭人が担当し、遺構の実測に際しては県文化課伊崎俊秋氏の協力を頂いた。また、広川町教育委員会をはじめとする、関係各位並びに作業に従事された地元の方々の協力により、調査を終了することができた。記して感謝の意を表します。

2. 位 置 と 環 境

遺跡は福岡県八女郡広川町大字長延字引井谷に所在する。

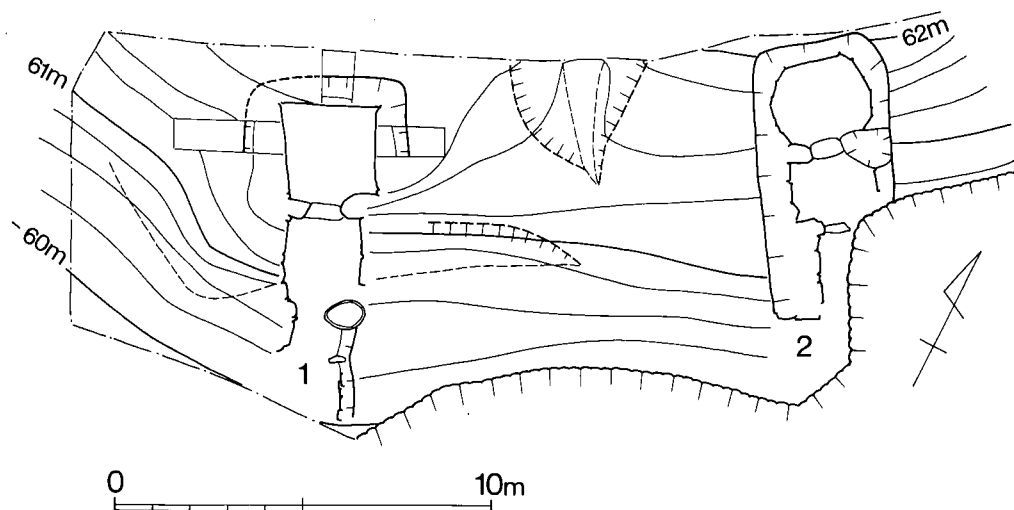
広川町は福岡県の南西部にあたり、北の久留米市、南の八女市との中間に位置している。広川町と八女市との行政境には、筑柴国造家の奥津城とされる八女丘陵が東西に延びている。ここには、丘陵西側から石人山古墳、岩戸山古墳、乗馬古墳、善蔵塚古墳、鶴見山古墳、釘崎、1・2・3号墳、立山丸山古墳等の前方後円墳をはじめ、多数の古墳が存在している。

上長延古墳群は耳納山脈の南西山麓の裾部に位置し、谷あいから平野部へ抜け出した長延川の右岸にあたる標高60～70mの山裾部にそって築造されている。福岡県遺跡等分布地図（八女市、八女部編）によると、吉常2号墳として1基のみが掲載されている地点から西方300mの長延1～3号墳までの間に所在するものを上長延古墳群と言う。厳密には、吉常古墳群の丘陵裾部から、谷状の平坦部に所在する支群とした方が良さそうであるが、吉常古墳群は古墳番号が南方へつけられているので、混同をさけるため上長延の名称を用いた。上長延古墳群は、総数10基の古墳が調査されたが、このうち、東支群の4号～10号墳については「上長延古墳群^{46.1}」



第42図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 山王山古墳 2. 長延4～6号墳 3. 長延1～3号墳 4. 上長延1～3号墳 5. 上長延4～10号墳
6. 川原谷窯跡 7. 吉常3～6号墳 8. 吉常1号墳 9. 内田古墳群 10. 馬場古墳群
11. 牛焼谷窯跡 12. 塚の谷窯跡群 13. 菅の谷窯跡群 14. 三助山窯跡 15. 中尾谷窯跡群
16. ハスワ窯跡 17. 鹿子島山古墳群 18. 常願山古墳群 19. 釘崎3号墳 20. 釘崎4号墳
21. 釘崎2号墳 22. 釘崎1号墳 23. 鶴見山古墳 24. 豊福横穴群 25. 茶臼塚古墳
26. 丸山塚古墳 27. 善蔵塚古墳



第43図 上長延1・2号墳地形図 (1/200)

として昭和59年度に調査報告済みであるので、参照されたい。今回の報告分は上長延古墳群の西支群にあたる1～3号までの3基である。

註1 「上長延古墳群」広川町文化財調査報告書 第4集 広川町教育委員会 1985

3. 古墳群の調査

1 号 墳

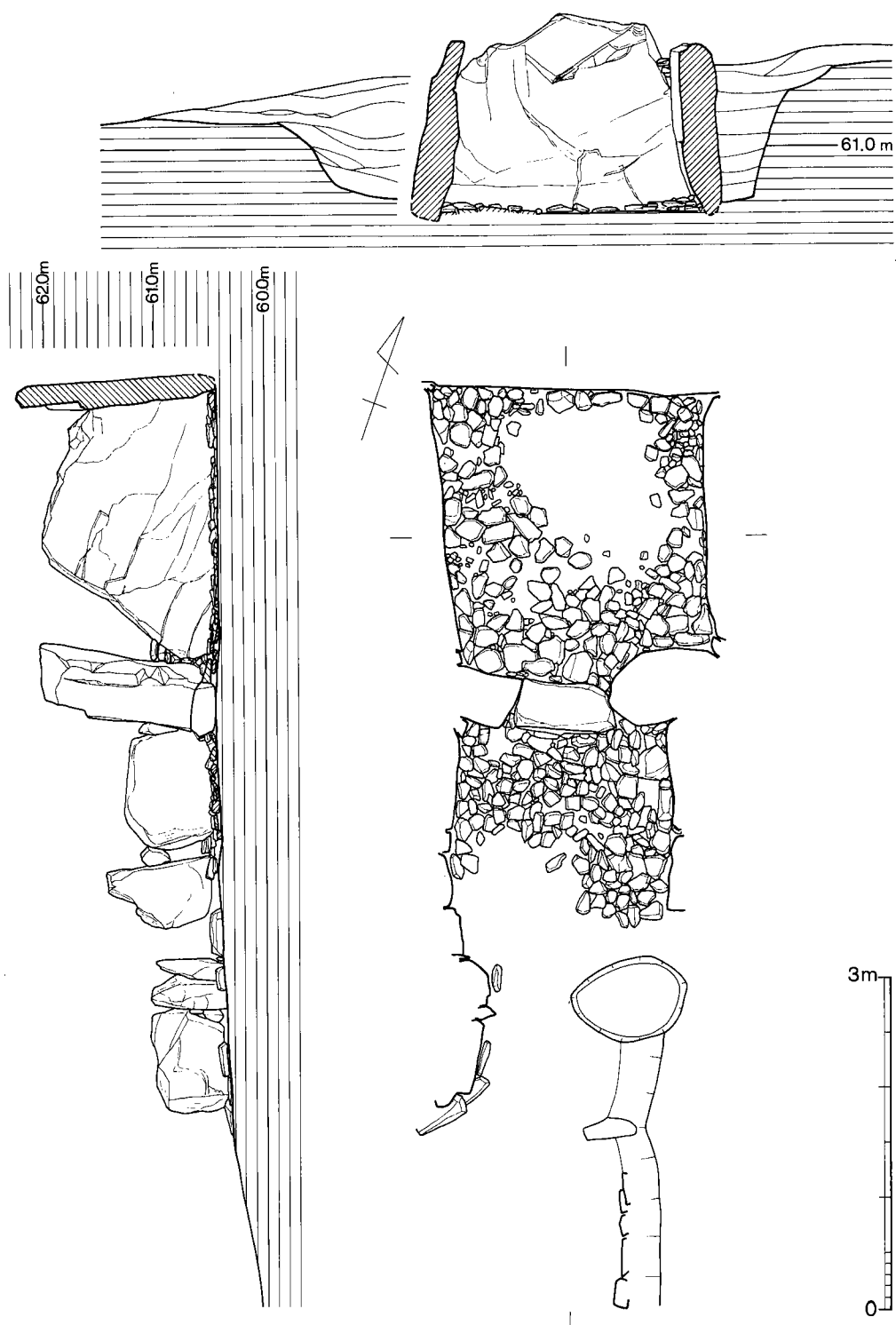
墳 丘 (第43図、図版18)

古墳は丘陵南側斜面の裾部近くの、標高62m程に位置している。墳丘の盛土部分はすでに削平されており、全て遺存していない。

石室の東方、2号墳との中間地点あたりに地山を溝状に堀削した箇所があり、両古墳を区画する地山整形の堀り込みと思われる。この溝底面の西側部分を一つの目安とし、後室の中心点を基準にして円を描がくと、このラインは、羨道部右側石積みの先端部と一致しており、この位置を墳丘裾部と考えることができる。これより得た半径は6.7mであり、このことから古墳の直径は13.4m程と判断できる。

石 室 (第44図、図版18・19)

内部主体は主軸をN-19°-Wにとり南南東に開口する復室両袖の横穴式石室でる。



第44図 1号墳石室実測図 (1/60)

玄室の平面形は、胴張り形態をとらずに方形プランであり、筑後地区におけるこの時期のものとしてはむしろ稀な平面形態である。

各部分の規模は以下のとおりである。

玄 室 主軸長 2.70m、奥壁部幅 2.47m、前壁部幅 2.27m

現存壁高 1.75m

前 室 主軸長 2.14m、玄門部幅 1.87m、羨門部幅 約1.85m

羨道部 左側壁長 1.30m、右側壁長 約3.15m

墓壙の調査は玄室北半部のみで実地した。その結果、墓壙は地山堀削による幅4.3mの規模であり、墓壙中央部に石室を構築しているのがわかる。

玄室は奥壁、左・右壁とも大石1個を用いて腰石としているが、上部構造は不明である。床面の敷石は盗堀のため中央部分が攪乱されている。

袖石は柱状の石材を側壁から55～90cm程突出させており、袖石間の床面には、長さ75cm、幅40cm、厚さ20cm大の扁平な石材を仕切石として置いている。

前室は、左、右壁とも腰石として各3個の石材を使用しているが、粗雑な並らべ方である。

羨道部は左・右壁とも破壊の度合いが強い。

床面のレベルは玄室・前室とも水平であるが、羨道部中程から下降させている。

遺物出土状態

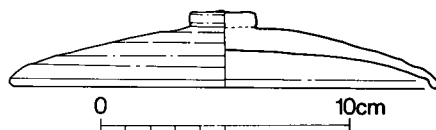
盗堀のため遺物は少く、前室の床面からは追葬時の須恵器碗の蓋が1個体検出された。

遺 物

須恵器（第45図、図版21）

碗蓋、口縁端部を下方へ短く折り曲げており、この部分には稜線が入る。天井部には扁平なボタン状のつみが付き、この周辺部はヘラ削り調整を施している。口径17.2cm、器高3.1cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成不十分である。胎土には細砂粒をわずかに含んでいる。

出土した土器は追葬時のもので8世紀前半に比定されるが、古墳築造の年代は他の古墳との比較により6世紀後半に比定できよう。



第45図 1号墳出土土器実測図（1/3）

2 号 墳

墳 丘（第43図、図版19）

丘陵南側斜面の裾部近くに占地し、1号墳の東方に墳丘を接する様に位置したものと思われる。墳丘の盛土は削平されていて現存しない。

石室の西方にある地山整形による溝状の堀り込みを両墳共通の周溝と考えて、この周溝底辺東側と、玄室中心点との距離6.0mを半径として円を描くとこの軌線は石室前面左側の列石線と一致する。したがって、古墳の直径は12m程と判断できる。

石室（第46図、図版19）

内部主体は主軸をN-27°-Wにとり、南南東に開口する復室両袖の横穴式石室である。

玄室の平面形態は胴張りを呈する筑後地区通有のものであるが、前室は方形を呈している。各部分の規模は以下のとおりである。

玄 室 主軸長 2.25m、奥壁部幅 1.48m、中央部幅 2.64m

前壁部幅 1.90m、現存壁高 1.25m

前 室 主軸長 1.55m、中央部幅 2.22m、羨門部幅約0.7m

羨道部 左側壁長 2.2m（列石まで）

墓壇は隅丸長方形の平面形態を呈しており、規模は、長さ7m、幅3.6mを測る。

玄室は奥壁に、床面からの高さ1.25m程の大石1個を鏡石として据えている。側壁は片岩を小口積みしており、左・右壁とも最下段部は7個の石材を弧状に並べている。この胴張りのカーブは玄室の中心を基点として円を描くとこれとはほぼ一致しており円形に近い平面形態である。壁面の断面形態は上部に除々に内側へせり出させる持送り式石積である。

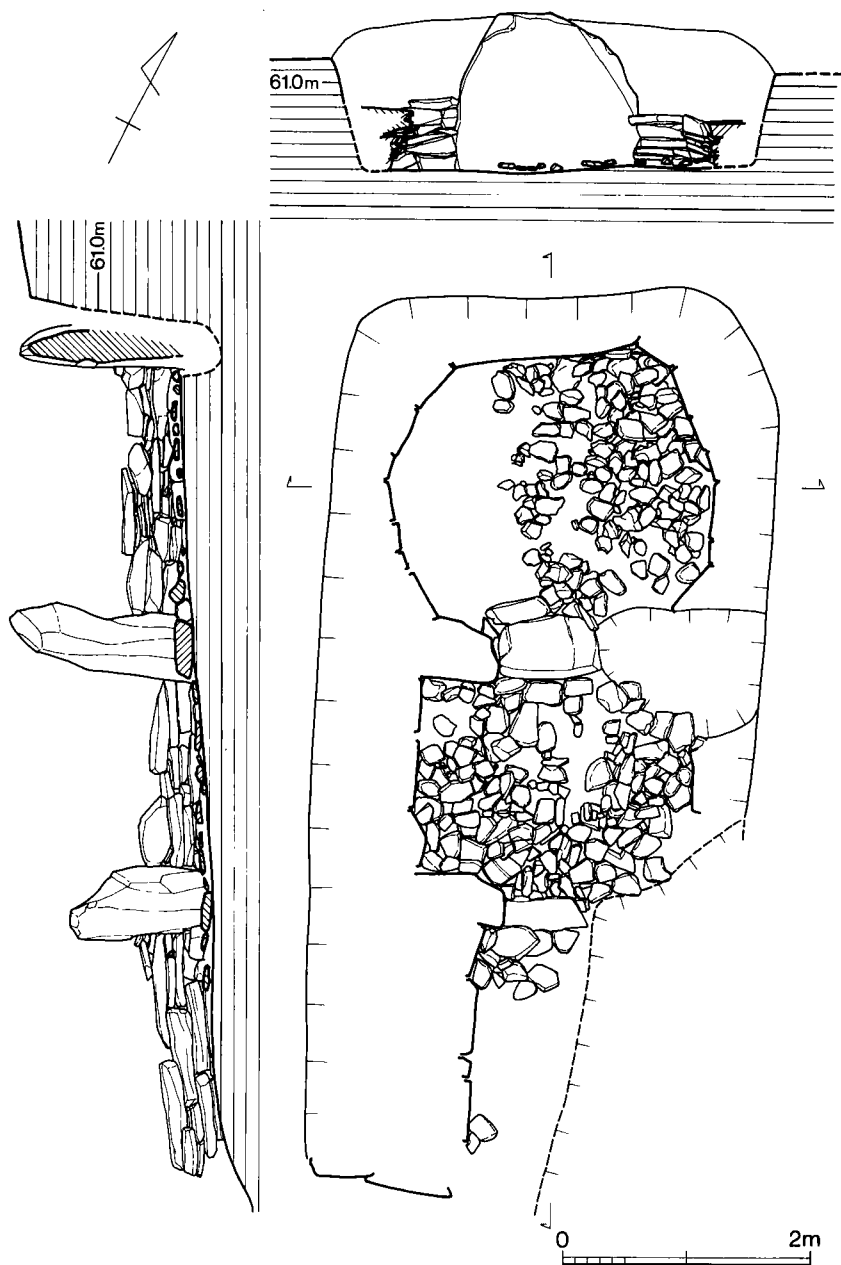
袖石は柱状の石材を側壁から50cm程突出させており、右袖石は持ち去られていて現存しない。袖石間には、長さ80cm、幅45cm、厚さ15cm大の扁平な石材を仕切石として置いている。前室の平面形態は方形を呈するが、右壁は大半が破壊されている。

羨道部は玄、前室に比してひとまわり大型の石材を用いており、入口に向って若干、幅を広めている。羨道部前面には長さ1.2mで3段積みした列石がめぐっており、現位置が墳丘裾部に相当するものと思われる。

床面には玄室、前室、さらに羨道部にも敷石が施されており、床面のレベルは玄室から羨道部へゆるやかに傾斜させており、羨道先端部との比高は35cmである。

遺物出土状態

盗堀のために石室内は攪乱されていたが、前室の左側壁寄りの床面から須恵器碗の身と蓋が



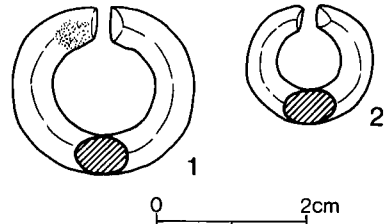
第46図 2号墳石室実測図 (1/60)

6 個体、鉄鏃、鉸具などの鉄器が出土した。玄室攪乱土中から耳環が2 個体出土した。

遺物

装身具 (第47図、図版21)

耳環 (1・2) 1は銀環であり、わずかに腐蝕している。長径24mm、短径21.8mmである。環の断面は楕円形を呈しており、長径6.8mm、短径5mmである。重量は9.4gである。2は金環であり、遺存状態が良く、光沢がある。

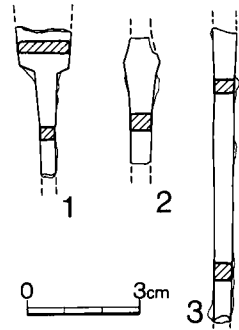


第47図 2号墳出土耳環実測図 (実大)

環の断面の口径は、両小口部分が小さい。長径16.3mm、短径15.5mmである。環の断面は楕円形を呈しており、長径6.5mm、短径4.5mmである。重量は4.9gである。

鉄器 (第48図)

鉄鏃 (1～3) 前室より出土した。1は鋒先端部を欠損するが、円頭もしくは圭頭広根斧箭式であろう。



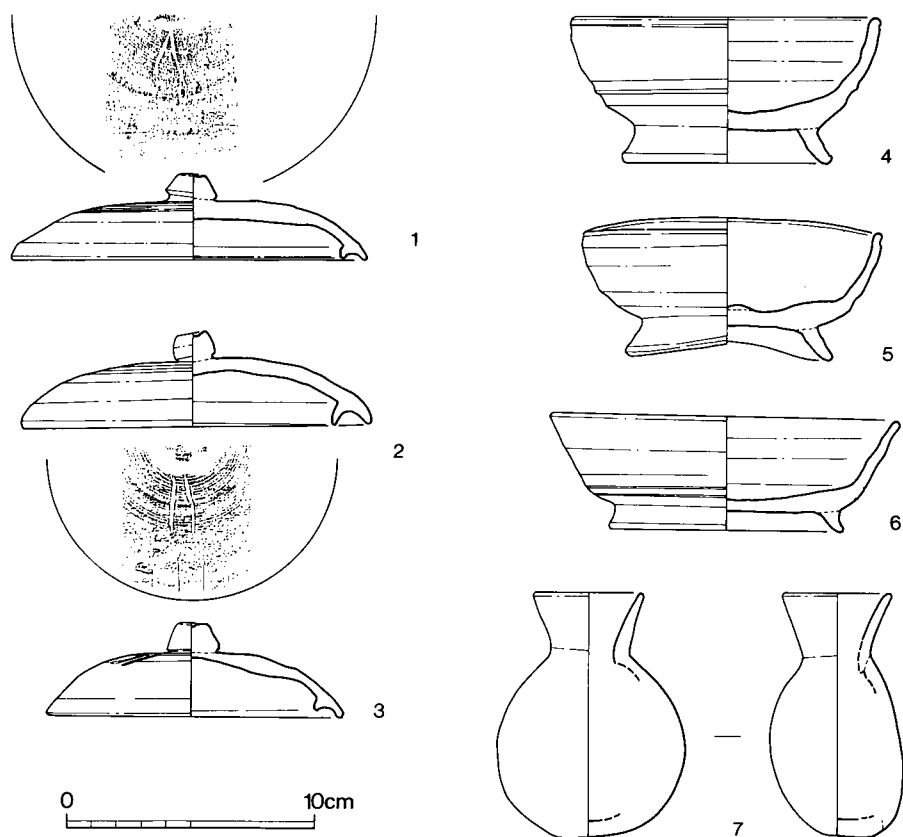
第48図 鉄鏃実測図 (1/2)

須恵器 (49図、図版21)

碗 (1～6) 1～3は蓋であり、4～6の身とはセット的に用いられるものであるが、いずれの個体もセットにはなり得なかった。1・2は口径14.1～14.3cm、器高3.5～3.8cmであり、口縁部内面の身受けのかえりは、口縁端部とはほぼ等しい長さである。凝宝珠つまみより変化して、頂部は平坦でわずかに凹ませたつまみがつく。天井部外面のつまみ周辺部はヘラ削りの後、カキ目調整する。1は天井部外面にヘラ記号がつく。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含んでいる。3は1・2に比して小型品であり、口径12cm、器高3.7cmである。口縁端部内面の身受け返りは、やや短く、端部より内側に位置する。頂部のつまみ周辺部はヘラ削り後、カキ目調整する。天井部外面にヘラ記号がつく。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微砂粒をわずかに含む。4～6は身である。4・5は口径12～12.5cm、器高5.4～5.9cmである。高台は丈が長く、外方へ開いており、高台底面はやや丸味をもっている。体部の下半部には凹線が入る。5は焼きひずみが著しい。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を多く含んでいる。6は口径14cm、器高4.6cmである。高台はやや長いものの1・2に比しては低くなっている。体部内面は布状のものでナデ調整している。色調は小豆色を呈しており、いわゆる須恵器特色の色調になっていない。胎土には細砂粒を含む。

1～6は床面からの一括出土品である。

土師器 (第49図、図版21)



第49図 2号墳出土土器実測図(1/3)

提瓶(7)口縁端部は丸くつくられている。器表の剥落が著しいため調整法は不明である。口径4.3cm、器高9.9cm、胴部最大径7.6cmを測る。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含んでいる。

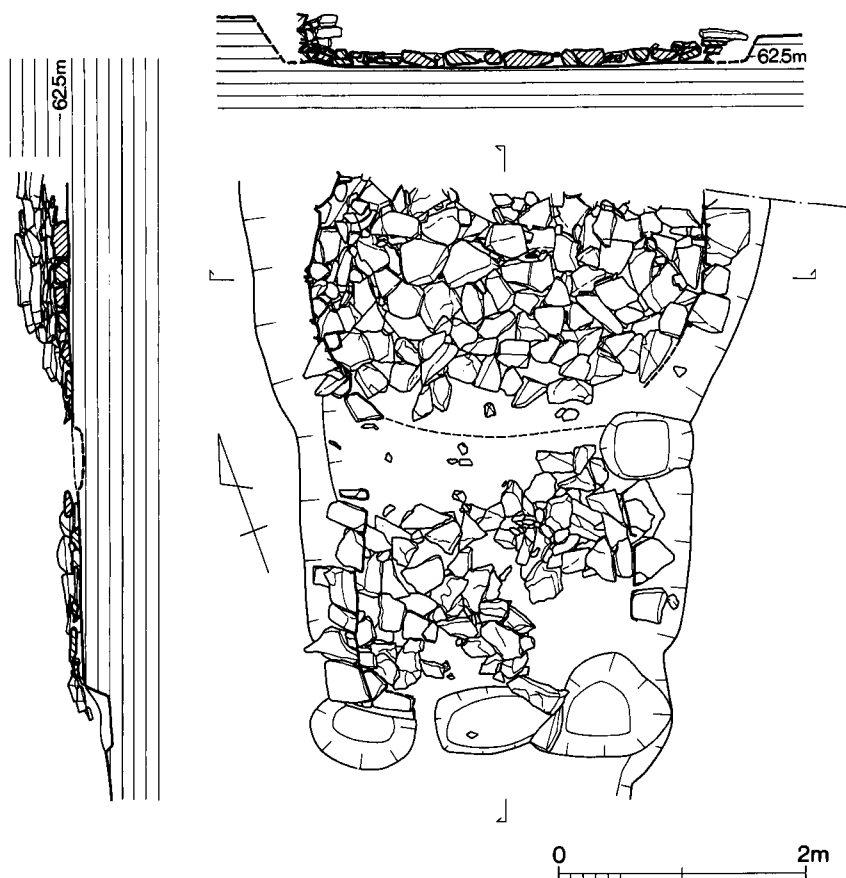
出土した土器は7世紀中葉頃に比定でき、追葬によるものと思われる。古墳築造時の年代は石室の形態から6世紀後半代に求められる。

3 号 墳

墳 丘

古墳は盛土だけでなく墓壙まで削平されており、地形整形等による古墳の形状、規模の確認もできない。

古墳は南傾斜面の裾部近くに占地しており、2号墳の東方50m程の距離にある。



第50図 3号墳石室実測図 (1/60)

石 室 (第50図、図版20)

内部主体は主軸をN-20°-Eにとり、南南西方向に開口する復室両袖の横穴式石室である。石室は玄室、前室ともに胴張りの平面形態を呈するが、いずれも下段部分を遺存するのみである。

各部分の平面形態は以下のとおりである。

玄 室 中央部幅 3.1m、現存壁高 0.4m

前 室 中央部幅 2.2m

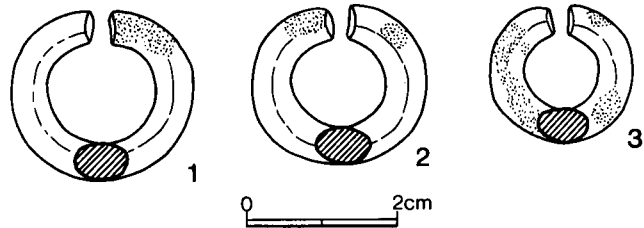
玄室の奥壁側1/2程は道路の下面に位置するため調査不能である。側壁は片岩の小口積みであり40cmの高さまで確認された。床面には1・2号墳に比して大振りの石材で敷石している。

袖石は左・右壁とも抜かれており不明である。

前室は、最下段部を遺存するのみである。

羨道、墓道については削平のため不明である。

床面は入口方向へ向かってわずかに傾斜させている。



遺物出土状態

第51図 3号墳出土耳環実測図（実大）

玄室の床面近くの攪乱土中から耳環が3個出土しただけで、その他は皆無である。

遺物

装身具（第51図、図版21）

耳環（1～3）玄室内の攪乱土中から出土した。1は銀環であり、わずかに腐蝕している。長径23.5mm、短径22mmである。環の断面は楕円形を呈しており、長径6.8mm、短径4.9mmである。重量は9.5gである。2は銀環であり、わずかに腐蝕している。1よりはひとまわり小さく、長径23.0mm、短径20.5mmである。環の断面は楕円形を呈しており、長径7mm、短径4.8mmである。重量は9.7gである。3は金環の小型品である。長径18.9mm、短径17.8mmである。環の断面は楕円形を呈しており、長径6.1mm、短径4.1mmである。重量は6.0gである。1～3はいずれも対にはならない。

4. おわりに

(1) 石室の構造について

今回報告する3基（1～3号墳）の古墳はいずれも墳丘を削平されていたが、1・2号墳間に遺存していた地山整形の周溝の一部からそれぞれの墳丘の規模を復元することができた。直径は13.4m、12mと小規模なものである。

石室の構造は1・3号墳とも当該地区独特の平面形態である胴張りを呈する。この種平面形態は筑後地区では、最も普遍的なプランであるが、熊本県北部、日田盆地にまでみることができ。ただし、1号墳の石室は復室横穴式石室でありながら方形プランを呈している。当該古墳群の東支群にあたる4～10古墳もすべて片岩小口積みによる胴張り形態を示し、同町の過去の調査でも方形プランは発見されていない。

この様に同一古墳群の中で、胴張り構造のものと否ものとが共存する例は、八女市大字本の牛焼谷古墳群^{註2}（5基のうち1号墳のみ胴張り構造ではない）、山門群瀬高町山内の山内古墳群^{註3}（2基のうち1号墳は胴張りでない）などに見られ、いずれも同時期に異なった構造の石室が造られている。当該1号墳は玄室のみ、牛焼谷1号墳は玄、前室ともに各側壁は大石1個を腰石としておりこの場合は胴張りにはなりえない。山内1号墳は、玄室の両側壁腰石に長さ1m大のやや長大な石材を各3個ずつ使用して長方形プランを形成している。この様に、胴張り形態の石室が盛行する中で、同時期、同一古墳群にありながら胴張りでない平面形を呈するのは、石室構築に用いられた石材との関連性が大きい。

当核古墳群からは石室に屍床を形成する構造のものは1基も検出されなかったが、当該古墳の西方1kmの山王山古墳^{註4}をはじめ、同町西方に位置した山の前古墳群^{註5}、東山古墳群^{註6}、大塚1号墳^{註7}、鬼塚1・2号墳^{註8}では、1石室につき1～3箇所に屍床が付設されている。さらに、これらの古墳群は4～5基という小数の古墳を一単位とするなど当核古墳群とは趣きを異にしている。

(2) 年代について

1号墳の前室からは追葬時の供献品と思われる8世紀代の土器が出土したが、古墳の築造時期は上長延古墳群の他の石室形態の比較から6世紀後半に比定できよう。2号墳の前室からは7世紀中葉に比定される須恵器の供献品が検出されたが、石室の形態や、上長延5号墳における副葬品のあり方から、追葬によるものと判断でき、築造時期は6世紀後半に比定できよう。3号墳についても2号墳と同時年代を比定できる。

註1 川述昭人編『上長延古墳群』広川町文化財調査報告書 第4集 1985 広川町教育委員会

2 小田富士雄編「牛焼谷古墳群の調査」『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅳ 1972 八女古窯跡群調査団

3 川述昭人編『女山・山内古墳群』瀬高町文化財調査報告書 第2集 1982 瀬高町教育委員会

4 池辺元明・川述昭人編『山王山古墳』広川町文化財調査報告書 第3集 1983

5 西谷正編 「山の前古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ 福岡県教育委員会

6 井上裕弘編『東山古墳群』広川町文化財調査報告書 第1集 1981

7 伊崎俊秋・川述昭人編『大塚1号墳』広川町文化財調査報告書 第2集 1982

8 川述昭人編『鬼塚古墳群』広川町文化財調査報告書 第5集 1986



上長延1・2号墳全景



上長延1号墳全景



上長延1号墳玄室



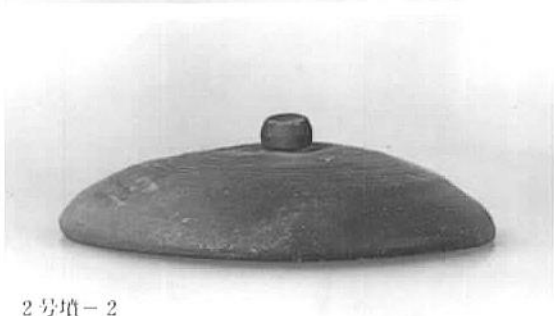
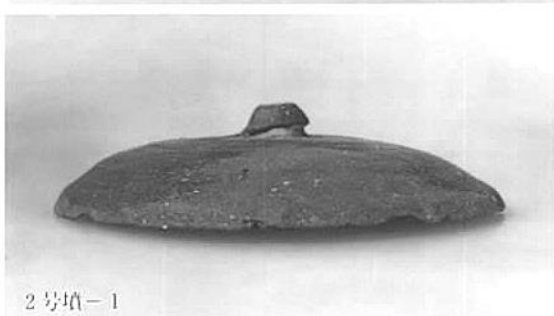
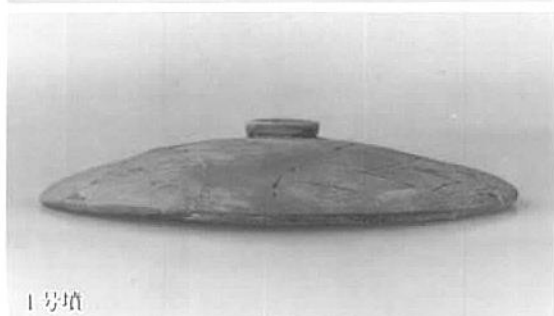
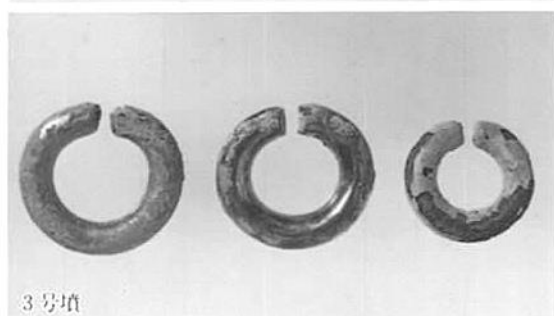
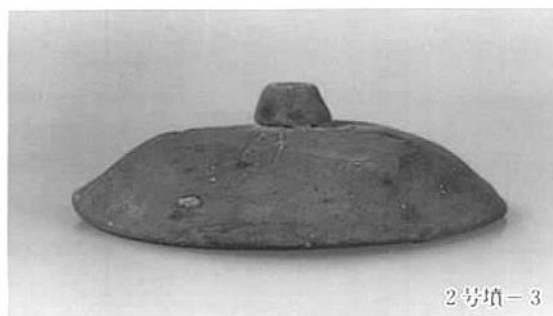
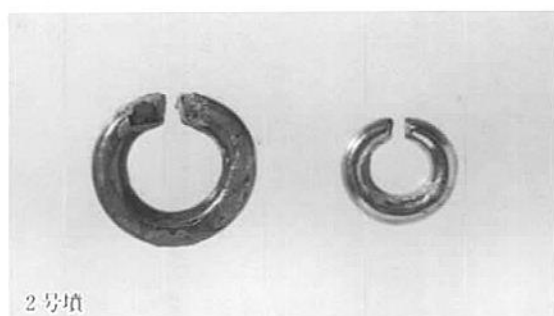
上長延2号墳全景



上長延2号墳前室遺物出土状態



上長延3号墳石室



瀬 高 地 区 遺 跡

(権現塚南・大江南遺跡)

上長延 1 ～ 3 号墳

福岡県文化財調査報告書

第74集

昭和61年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 株式会社 天地堂印刷製本所

北九州市小倉北区大手町10番18号